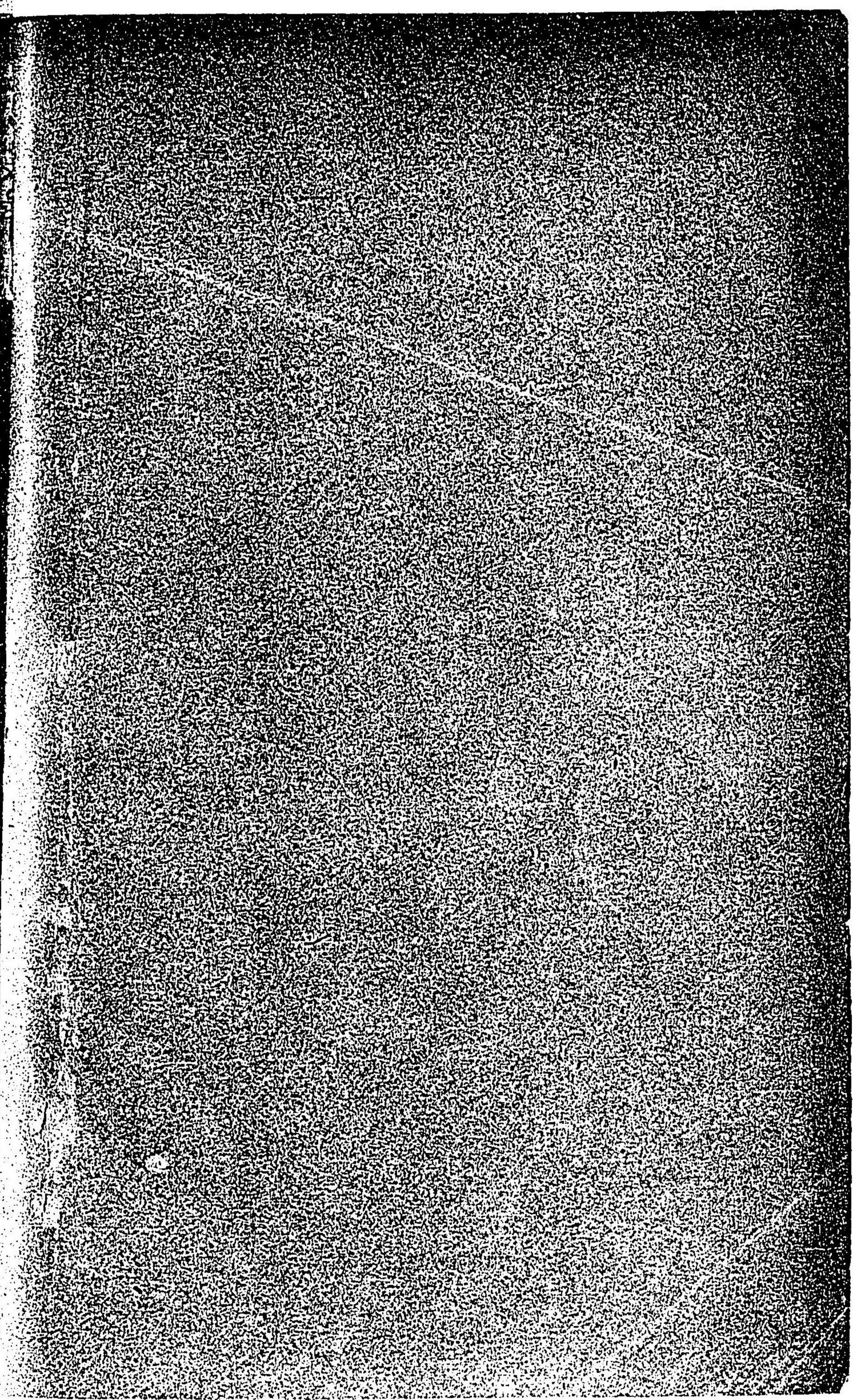


京阪名所案内



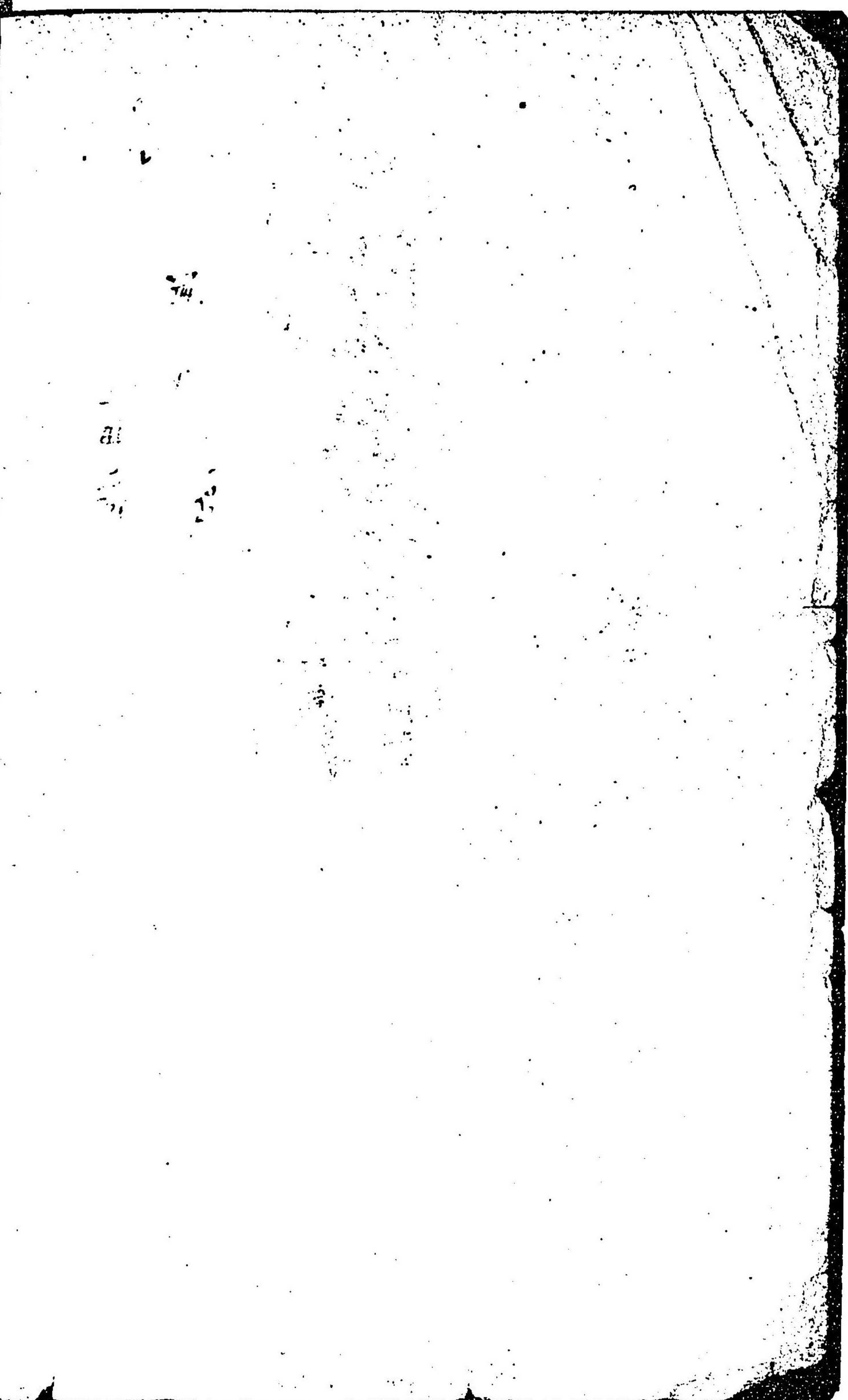
六
地
六
義
六
初



Vertical handwritten text on the left side, possibly a signature or title.



明治
37 6 18
内交



天下第一
地之大
義利



Small vertical text or mark at the top edge of the page.

象山題



明治
37 6 18
内交

心

心

物

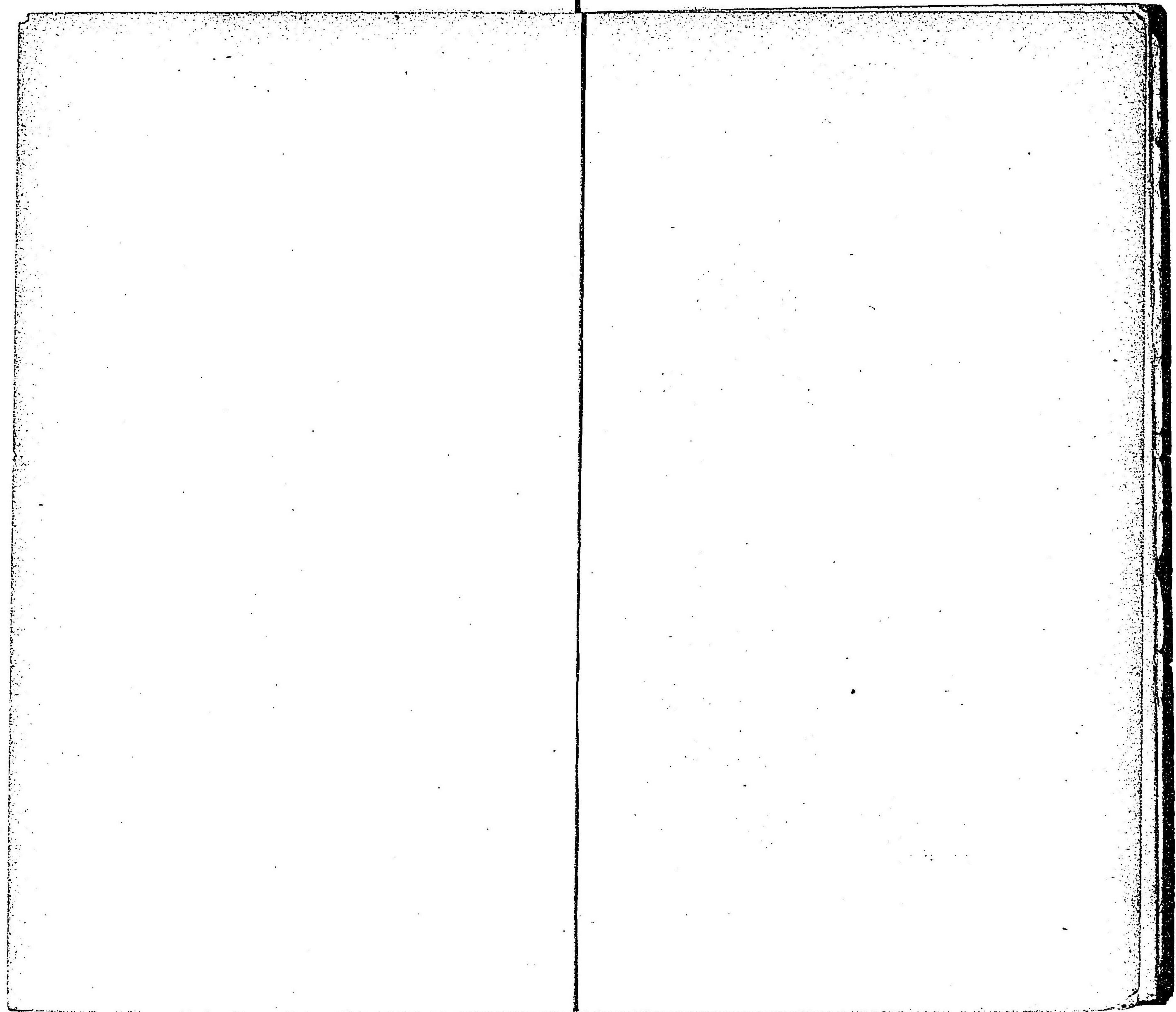
究

理

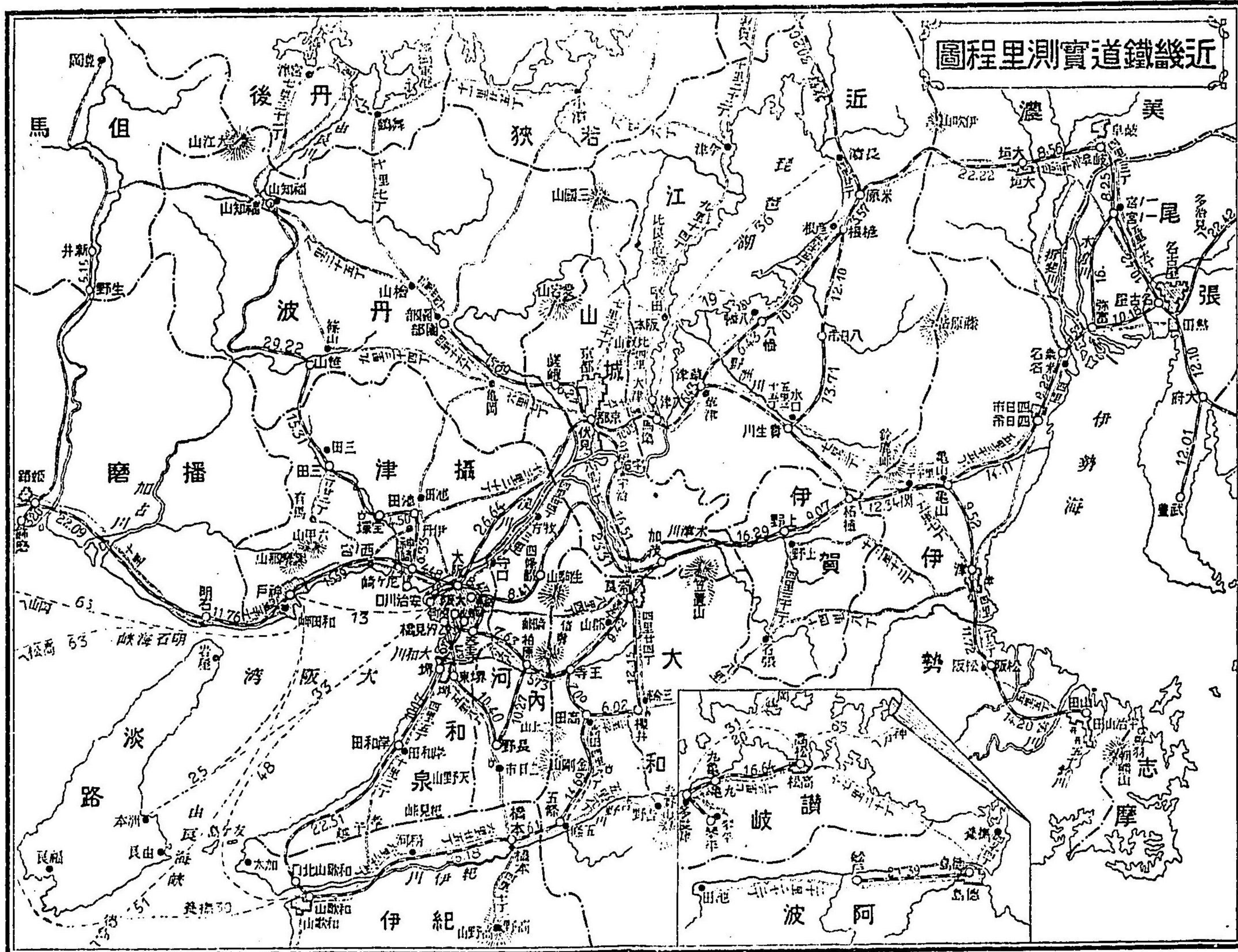
九

泉





近畿鐵道實測里程圖



京阪名所案内目次

大阪

○大阪城圖	四頁
○四天王寺圖	四頁
○南の御堂圖	六頁
○北の御堂圖	六頁
○生魂神社圖	一〇頁
○茶臼山圖	一〇頁
○大阪清水寺圖	一六頁
○高津の宮圖	一六頁
○櫻の宮圖	一八頁
○天満橋圖	一八頁
○天満宮圖	二二頁
○天神橋圖	二二頁
○大阪府廳圖	二四頁
○梅田停車場圖	二四頁
○箕面公園圖	四二頁
○小楠公社圖	四二頁

二頁

京都

○舊御所圖	四六頁
○大極殿圖	四六頁
○東本願寺圖	六二頁
○東寺圖	六二頁
○西本願寺圖	六六頁
○(伏見)稻荷社圖	六六頁
○東福寺圖	七四頁
○三十三間堂圖	七四頁
○京都博物館圖	七六頁
○高臺寺圖	七六頁
○豐公廟圖	七八頁
○京都清水寺圖	七八頁
○智恩院圖	八四頁
○丸山公園圖	八四頁
○祇園八坂神社圖	八八頁
○四條橋圖	八八頁
○黒谷寺圖	九二頁
○銀閣寺圖	九二頁
○吉田社圖	九四頁
○眞如堂圖	九四頁
○下加茂圖	一〇〇頁

四四頁

○嵐山圖	一〇〇頁
○北野天満宮圖	一一〇頁
○金閣寺圖	一一〇頁
○上加茂圖	一一二頁
○建勳社圖	一一二頁
○宇治橋圖	一一〇頁
○平等院圖	一一〇頁
奈良	
○奈良大佛圖	一三六頁
○奈良博物館圖	一三六頁
○奈良春日社圖	一三八頁
○三笠山圖	一三八頁
○猿澤の池圖	一四〇頁
○興福寺圖	一四〇頁
吉野	
○吉野の櫻圖	一四八頁
○竹林院圖	一四八頁
○金峰山圖	一五二頁
○如意輪堂圖	一五二頁
○畝傍山圖	一五六頁

○法隆寺圖	一五六頁
○月の瀬圖	一五八頁
○笠置山圖	一五八頁
堺	
○堺妙國寺圖	一六二頁
○住吉社圖	一六二頁
○堺大瀧圖	一六六頁
○濱寺圖	一六六頁
神戸	
○神戸港景圖	一七八頁
○西の宮蛭子社圖	一七八頁
○楠公社圖	一八二頁
○清盛塔圖	一八二頁
○舞子ノ瀧圖	一八六頁
○須磨圖	一八六頁
○布引之瀧圖	一八八頁
○有馬温泉圖	一八八頁
○商業的大阪	一九五頁
○工業的大阪	二一八頁
○結論	二二二頁

京阪名所案内

第一章

京阪名所案内

京阪の地由來名勝に富む、京都は千年の帝都にして風光明媚、多言を須ひず、大阪に至りては人の之を商業地として知るも、未だ以て名所として知る者無し、何を料らんとせん、川、一區、眼底映ずる處勝景ならざるは無く、脚痕印する地歴史ならざるは無し、其他奈良の如き、吉野の如き、堺の如き、神戸の如き、名勝古蹟、陸續來去殆んど應接に遑あらず、殊に況んや大阪は商業の中心、内外の要樞、明治の初年維新の功臣大久保利通、都を此地に遷さんとせし者蓋し故なきにあらざるなり、曩に臺灣の皇土と爲りしより、其實益々顯る、今や王師露に勝ち、帝國の新版圖益々擴張せんとす、戦後經濟の中心として、此地が如何なる價值を有せんかは、今日に於て想像するに難からず、志ある者一たび此地を見、其形勝を察せずして可ならんや、而して京都に遊び、奈良に遊び、吉野に遊び、大阪神戸の名勝と併せて其心を娛します、また大國民の一樂事能く遊ぶの民にして始めて能く勉むるの民たるを得可き也。

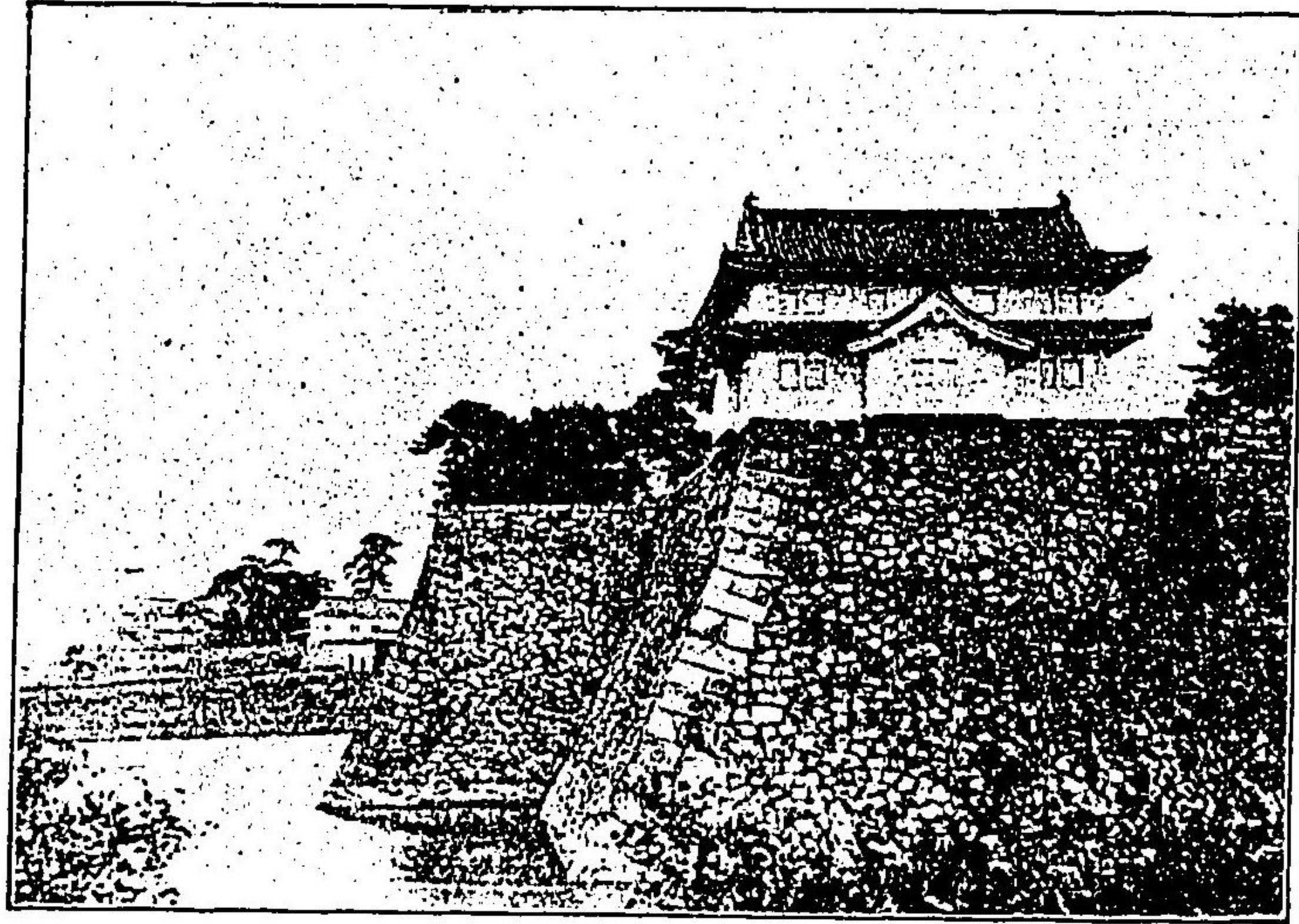
大阪

(11)

攝津の大阪、日本三府の一、兒童走卒も之を知る、しかも上古に於ては大阪の稱を聞かず、一に稱して浪華といへり、大阪の字の初めて歴史上に見えたるは、明應七年十一月、今より四百年許以前に在り、抑々當國攝州東成郡生玉の庄内大阪と云ふ在所云々とあり、大江阪の略稱ならんともいふ、而して其舊名浪華は誰も知る浪速の字より起源せり、難波など皆海の縁語より、いつとはなく書きならはせし文字なり、人皇一代神武天皇、東征の時龍舟を此地に泊す、潮流の甚だ急なるを御覽じ、浪速の御命名あり、十六代仁德天皇、都を此地に遷し玉ひ、皇居を高津宮と號す、溝渠を堀り、道路を修し玉ひしとなん、欽明天皇より推古天皇に至るの間は、所謂佛法渡來の頃にて、外國より朝貢せしことも甚だ多かりしが、其際外交官をして外客を引き應接せしめられしは實に此大阪の地なり、佛像を難波の堀江に投ぜられし騒ぎ、四天王寺のこゝに創建せられたる事、思ひ合はすれば轉々歴史上の興味を感ずるならん、大化革新の孝德天皇、佛法興隆の聖武天皇、いづれも一時此地に都を遷し賜ひしことあり、其縁にてもあるまじけれど、下つて足利氏天下の武將となり、覇圖漸く衰えんとする、後土御門天皇の明應五年、一向宗中興の法主蓮如上人、本願寺別院を此地

の石山に置く、四方の信徒雲合霧集して、忽ち一の市街を爲せり、正親町天皇、天正十一年、豊臣秀吉の城を別院跡の石山に築くや、堺伏見の豪商を此地に移し、大阪城の天下の名城たる如く、大阪は天下の名區となれり、後水尾天皇の元和元年、大阪落城、天下は全く徳川氏の有となるや、松平下總守一時此地に封せられしが、同五年に至り、徳川氏の直轄と爲り、大阪城代を置き、諸侯をして倉屋敷を此に設けしめ、物買の交易を奨励し、一方には以て諸侯活殺の權を一手に收めんとせり、徳川氏亡び、維新の聖世となりしより、こゝに第五回勸業博覽會の開かるゝまでは、普ねく人の知る所にして、この短章中に喋々の必要なし。

大阪城 以上の歴史に關係ある點より、博覽會遊覽の客が、博覽會の見物を終り、さても大阪の名勝をと始めて眼を注ぐ者は、所謂天下無二の名城たる大阪城是なり、前記明應五年、蓮如上人の石山別院を創設せしは、非常の卓見にて、後に戰國の世となり、天文元年、十世の法主光教上人が江州の佐々木及び日蓮宗の連合軍の爲めに、其本山山城國山科の本願寺を焼討せられし時、走つて此地に來り、加州より城作りを招きて、伽藍を修し、城搆と爲し、本山と定めたり、されば細川木澤及日蓮宗の合軍とも戦ひ、織田信長の大軍をも引き受けて、一旦は勝利を得たり、天正二年、信長大



大 坂 城



四 天 王 寺

舉して攻め來るや、正親町天皇の御仲裁にて法主光佐上人は紀州雜賀に退ざり、織田兵入り來りて僧房伽藍を燒拂ひ、信長の子信孝暫らく此地に在りしが、信長亡び秀吉の世となるや、天正十一年西國諸侯に工事を課し、巨石大木を獻せしめ、殿宇壯麗、壘壘堅固の大城を建築せり、秀吉の薨去、大阪前後の役に於て其城地の崇高も、豊臣氏の覇業と共に衰亡の運に傾きしが、城地は依然として形勢雄大、大阪代に在りて徳川氏の覇業を補翼せり、城代時代には屢々再築或は修繕等の事ありて、其舊觀は存せしが、明治元年の火災の爲めに全く烏有に歸し終り、流石の堅城もあはれはかなきものとなり了りしが、大阪鎮臺を此に置かれ、今の第四師團司令部と爲るに及んで、依然關西形勢の地たり。

四天王寺　大阪城と相並びて大阪の二大名勝の目あるものは、四天王寺なり、殊に博覽會場の最も近き處にして、天王寺停車場より僅々一町の距離のみなれば、博覽會遊覽の客が、第一に杖を曳くは此處なるべし、いふもねろかや日本最初の大寺にして、聖德太子が物部守屋を亡ぼして其墟を以て寺と爲したりと言ひ傳ふ、最初の寺土地は玉造鷲の森に在りしと云ふ、昔は八宗兼學なりしも、今は天台宗に附屬せり、楠正成か宇都宮公綱と對陣せし事、未來記を披見せし事は、導者が觀光の客に

對して誇稱する所とす、屢々祝融の災に罹ると雖も、毎に修繕を加へ舊觀を保存するが爲め、今の如きなほ七堂伽藍の巍然として立つを見るなり、一千三百年前寺春入伽藍烟樹中の句は移して此古建築の形容詞に充つべし、南大門内に金堂あり、本尊は如意輪觀音にして、寶燈に佛舍利を藏せり、有名なる五重塔は其南に在りて、釋尊以下諸佛の像を安置せり、塔上に登つて千里の目を極むれば、大阪大都是申すに及はず、攝河泉の風光一眸の中に落つ、講堂には阿彌陀佛、虚空藏及び四天王の像を安置す、是れ四天王寺の名の起る所、寶藏には十一面觀音、聖德太子幼時御影、及其御守、閻浮檀金の彌陀三尊等あり、寶殿には太子四十九歳の像を安し、太子堂後の熊野權現は、其實當年の佛敵并に政敵たる物部守屋、中臣勝海を祭祀せりといふ、大阪府四公園の一にして、荒陵山四天王寺は其本號なれとも、難波大寺、法華園、堀江寺、荒陵寺等の名あり、明治三十六年の大阪に來りて、博覽會と、大阪城と、四天王寺を見ざるものは大阪を觀しものといふべからず、博覽會を機として大梵鐘を鑄、萬僧の供養を爲す事なれば、貴賤群衆、老幼雜踏、筆にすべからず、舌にすべからず

高津宮趾　聖德太子の四天王寺、豊臣秀吉の大阪城を觀る者、何ぞ仁德天皇の御宮趾を拜覽せざる可けんや、東成郡宇小橋味原池の北方御殿谷と字せらるゝ所即

ち仁徳天皇の民の窳を望せ王ひし舊宮居なり、明治三十二年天皇の一千五百年祭に當り、其宮城の一部味原池の西方字大辻の地に、故小松宮御染筆の「高津宮趾」四字を鏤めて標石を建てられ小公園となれりけり、

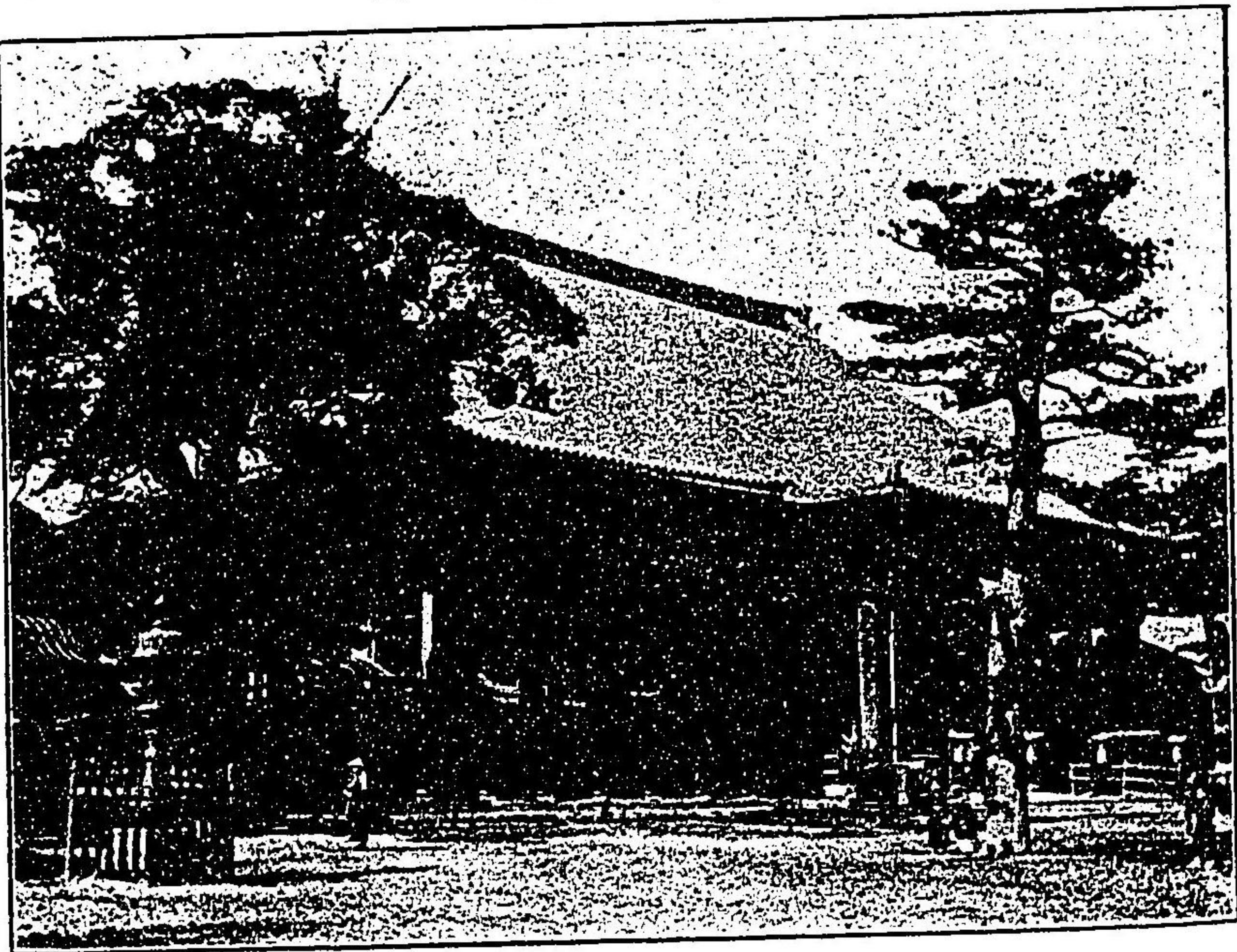
東西本願寺別院 東區御靈の南二丁に西本願寺別院あり、津村御堂又は北の御堂といふ、之を距る南に二丁にして東本願寺別院あり、難波御堂又は南の御堂といふ、兩別院共に境内廣濶殿宇宏壯なり、むかし石山の面影はありやなしや知らされと亦た大阪をして今日あらしめたる本願寺別院として、大阪市民は宗教信仰以外に尊敬の値を拂はざるべからず、

東區之部

森の宮 推古天皇六年夏四月、鵠二羽を難波の森に飼はしむ、よりてこれを鵠の森といふ、明應運如上人の時の本願寺別院はこゝに在り、鵠の森といへり、されば紀州雜賀へ落去の後同地に驚の森の名を移せり、宮は聖徳太子の御文用明天皇を祭る四天王寺の舊跡は此地なりともいへり、



南の御堂



北の御堂

器を造りしものゝ住居ひし所といふ、四天王寺に關係あることいふまでも無し、

高麗橋　大阪府下に於ける鐵橋の嚆矢にして、大阪府里程元標の所在地なり、昔大阪は外國通商の要津にして、朝鮮人の來りて住むもの多く、此あたりに家居せること、今の居留地の如きありさまなりし故橋にかゝる名を負はせけん、

八軒屋　天神橋の南詰を東に天滿橋に至る間の總稱にて、昔はこゝに旅宿八軒ありしを以て八軒屋と言ひ傳へたるものゝ由、封建時代には名にしれぬ淀川三十石船の上下の客にて繁昌せしが、今は川蒸氣の往來するを認むるのみ、上古の大江岸、大江浦は此邊なりしと識者は語れり、

眞田山　玉造の南に在る小丘なり、一名宰相山と稱す、大阪陣の時、眞田幸村こゝに出丸を築き、また加賀宰相の陣屋たり、蟻山神社は仁徳天皇を祭り、三光稻荷には明治十年役に戦死せし大阪鎮臺兵の墓所あり、

産湯の清水　産湯神社とて、俗に産湯の稻荷と稱する神社の境内に在り、卜部氏の祖雷大臣の子大小橋命の産湯に用ひしとして産湯の清水の名あり、清徹外に溢れて四時増減なし、生玉高津邊には水屋あり、毎朝數十荷汲み取り、寺町一圓に賣るといふ、

味原の池 産湯清水の北に在り、神代に天降れる比賣古曾神の御影地なりといふ。廣さ二丁餘、秋の最中の月を見るによし。

圓珠庵 東高津御差町に在り、國學中興の偉人契沖阿闍梨が隠栖の古跡たり、小堂に不動尊を安置し、傍に水戸黃門及契沖の位牌を祭る。門の入口に入幡宮あり、鎌入幡といふ。

近松門左衛門の墓 谷町五丁目寺町の法妙寺に在り、日本戯曲の泰斗巢林子の墓地。豈一束の生芻を手向けざるべけんや、寺の門へ入るとの所にして、碑面に「阿闍院稔矣日一具足居士」と彫せり。

井原西鶴の墓 上本町四丁目の誓願寺に在り、寺内には老俳宿儒の墓碑多し。西鶴の墓は本堂の前南側に在り、『仙厓西鶴』と題せる碑石是なり、一代の小説家、傍ら俳人として元祿の天地を文りしものなり。

中井三儒の墓 有名なる大阪の大儒中井贅庵、中井竹山、中井履軒の墓亦た同じく誓願寺に在り。

緒方塾の跡 内北濱三丁目緒方收二郎氏の宅是なり、緒方洪庵は維新前有名の大儒にして、長州の大軍畧家大村益次郎、慶應義塾の創立者福澤諭吉及び寺島宗則

大鳥圭介、長興專齋等此門に在りて苦學せし跡を見るべし。

芭蕉終焉地 俳諧の泰斗松尾芭蕉が、枯野の夢となりはてし終焉地は、南久太郎町御堂前東へ入南側花屋の裏なりといふ、而も今は花屋の後斷絶せり。

生國魂神社 高津生玉町に在り、生國魂を祭る。官幣大社にして、大阪上町一圓の氏神なり、元は大阪城の邊に在りしを秀吉今の地に移せるなりと、本社裏の舞臺に登りて四方を望眺すべし、門前に蓮池あり、其側に北向入幡宮あり。

朝日神社 神崎町に在り、天照大神を祭る、市内三神明の一なり、源平の戦の時、義經景時逆櫓の論ありし時、双方より祈願を籠めたりといふ、朱雀天皇の御宇、將門純友等を征討の時、勅祭ありて朝日神明社と稱せられし由緒あり。

猪飼野 大阪城の東北の地にして、鶴野といふ、木村長門守の奮戦せし地にして、大阪陣に名高き戰場なり。

難波神社 博勞町に在り、祭神素盞鳴尊、倉稻御魂、府社なり。

座摩神社 南渡邊町に在り、生井神、榮井神、津長井神、阿須波神、波比祗神の五座を祭る、神体は神功皇后三韓より凱陣の時、鎮め玉ひたる神璽なりと、府社なり。

御靈神社 御靈筋平野町に在り、祭神は中央天照太神、左八幡宮、右鎌倉權五郎な

り、御霊の字は五郎の字を神聖にしたるものならんか、境内に遊蔭興行の席多し
神農社 道修町一丁目に在り、祭神は少名彦命及び炎帝神農氏を祭る、此道修町
は藥種商軒を並ぶ、此商人等の尊崇する神なり、張子の虎を竹枝に附して諸人に與
ふ、

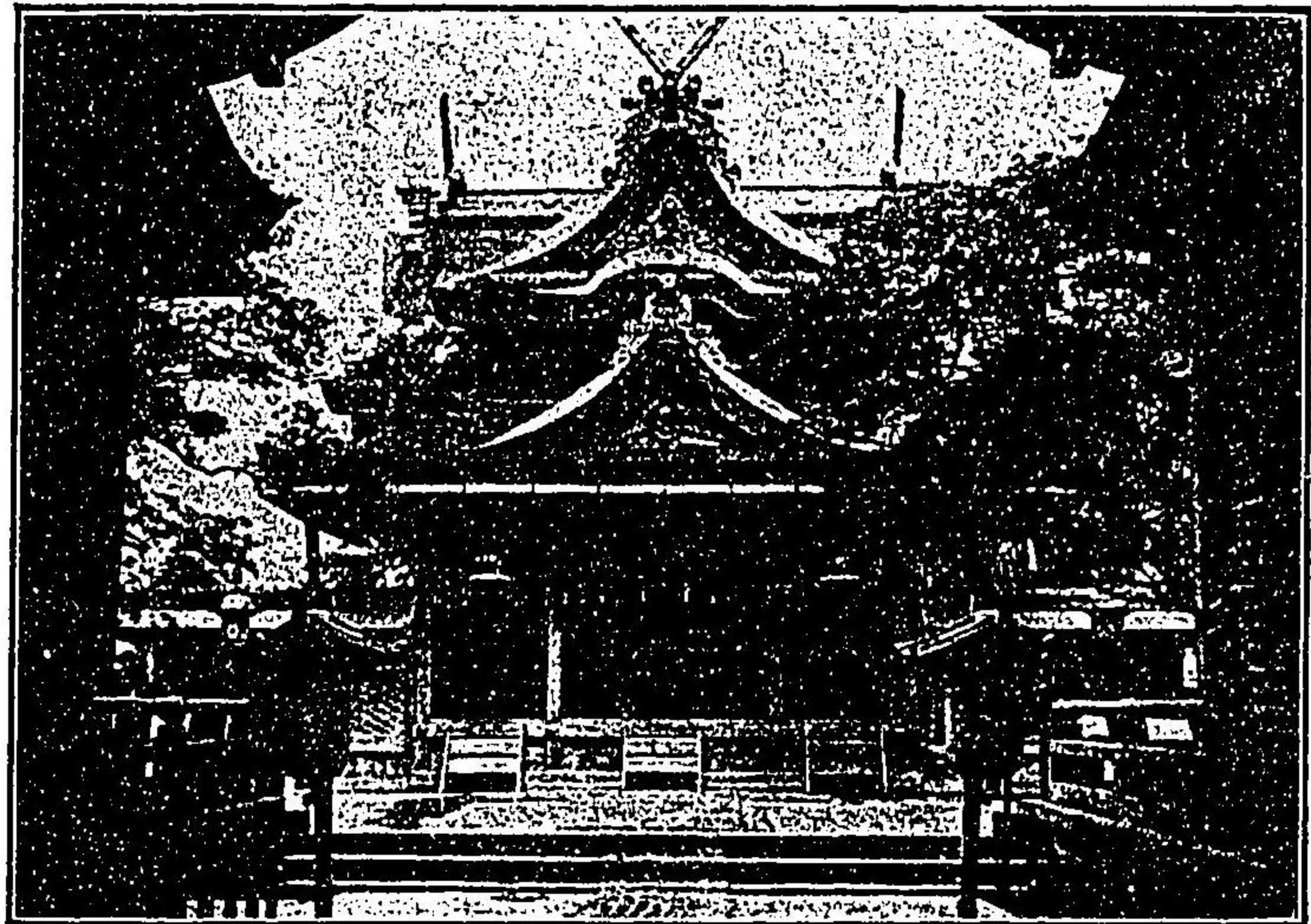
西區之部

八州軒 六軒屋川の西春日町に在り、享保年間飯野某の別荘として建築せしも
のにて、淡路紀伊、大和、河内、和泉、攝津、播磨、山城、八ヶ國の風景を望み得るを以て此名
あり、木材は伏見桃山城北殿より移したるもの、結搆善美、古代の名畫其他の美術品
を藏せり、

鞆 京町堀と阿波堀との間の地名なり、鹽魚乾魚商店軒を列す、『うつぼ』の名
は秀吉が商人の『やすく』と呼ぶを聞き、矢の巢ならば鞆なりと戯れしより、鞆の稱
はじまる、

瑞賢山 河村瑞賢が安治川を堀りし時、土砂を積み上げたる跡にて安治川の川
尻に在り、又波除山とも稱せり、

尻無川 安治川と木津川との間の川をいふなり、



社 神 魂 生



山 白 茶

阿彌陀が池 北堀江上通に在り、蓮智山智善院といへる寺あり、又和光寺ともいふ、本尊は金銅一光三尊の阿彌陀佛にして、阿彌陀池は此寺の本堂の北に在り、守屋が佛像を投せし浪速の堀江は此處にして、本田善光が佛像を得たるも此池なりとの傳あり、

九島禪院 本田通二丁目に在り、靈龜山と號し、三島郡慶福寺の開祖龍溪禪師閑居の寺なり、禪師は寛文十年八月二十三日暴風雨の時、一渴を遺して水定に入りたる人なり、毎年七月十八日安治川の中流に水灯會を行ふは、此事に起因するものなるべし

竹林寺 九條町に在り、起心山寶樹院と號し、淨土宗なり、本尊は惠心僧都の作り、境内に三股竹香の梅といふ奇樹あり、九條島を開きし香西哲雲の願により、教養上人の創建せる寺なり、

茨住吉神社 同じく九條町に在り、祭神は住吉神社と同体にて有名の祠なり、陶器神社 社地に地藏尊あり、七月の地藏會には附近の各町に陶器を以て百般の造物を爲す、

四ッ橋 西横堀長堀兩川會合の處にて、東西南北に四つ橋を架したり、小西來山

の涼しさの俳句にて有名なり、

天保山 安治川口の南岸、天保二年幕府安治川を浚渫する時、其土砂を積み船舶出入の目標と爲せしものにて、一岡阜に過ぎず、砲臺あり、不動白色光達距離十裡燈臺あり

明樂座其他 明樂座は堀江に在り大隅一座の人形淨瑠璃の常小屋にして文樂と並び稱せらる其他西區にて屈指の劇場寄席は同じく堀江の堀江座(壯士劇々場) 賑江亭(三友派の寄席)新町の瓢亭桂派の落語席而して松島の八千代座は、大阪劇場第一の建築なりしが三十四年二月火災にて之を失ひたりしも半年ならずして更に美麗なる劇場を建て興行しつゝあり

南區之部

十萬堂の蹟 俳人小西來山の住みし十萬堂の蹟にして、今宮に在り、其愛せし女人形今傳はりてなにがしの家に在りといふ『花咲いて死にともないが病かな』の人を訪ひ來るも亦た一興、

夕日が岡 夕陽岡ともいふ新清水寺より東北に續きたる高地をいふ、岡上に藤原家隆の墳墓あり、近來の好漢陸奥宗光亦た此岡上に怪骨を埋む、

合那が辻 逢坂清水西の辻なり、合那の辻は學校の辻の誤りなりとか、(學校は天王寺の學林なるべし)閻魔堂ありて名高し、淨瑠璃の玉手御前俊徳丸の話、デブッ子の呻なる所なり、

吉助牡丹 高津阪の下に在る植木屋を吉助といふ、數百年の舊家にして庭園廣し、四時の花卉多くして、春夏秋冬客足絶えず、最も牡丹を以て名あり、

翫菊庵 高津梅か辻に在り、菊作りにて有名なり、花時人群集す、東京の團子坂に等しく菊人形の見世物を爲す、

桃山 小橋寺町の南に在る桃園にして、桃の名所なり、此あたりは東區の産湯味原猪飼野などの名所に近く、雅人の杖を曳く所なれども、今は紅塵堆の俗地となれり、併し乍ら朝早く起きて此山に散歩すればいふばかりなく超凡の感ありと、河内の諸山を望みて風景絶佳、

梅屋敷 生玉と高津との間に在るものを舊梅屋敷といひ、高津の東に在るを新梅屋敷といふ、舊梅屋敷は平坦なれども老木多く、新梅屋敷は地に高低ありて興味多し、

ドンブリ池 井の字をドンブリに用ゆ、鹽町心齋橋東へ入る處に昔時有名なる

浪華の藥師あり、其池の境内に在るもの此ドンブリ池にして片葉の蘆を生ぜしと今は井池筋なる町名、芦池小學校、芦池幼稚園と共に残れり。

心齋橋 大阪第一繁華の地にして、昔時新羅、百濟の互市場たりしより新濟の二字をシンサイとして橋の名に残せしなりといふ、或は何の心齋といふ人始めて此橋を架したりともいふ。

茶臼山 茶臼山といふ名は全國到る處に在り、蓋し古代貴人の墳墓を作るには必ず山を築きしものにて其形の似たるより、これを茶臼山と稱せしなり、大阪の茶臼山亦た仁徳天皇以前より荒陵の名あり、大阪冬陣の時家康の本營たり、夏陣には大阪の軍師真田幸村が戦死せし處にして、今は豪富住友の別荘あり、山の南の邦福寺は俗に雲水といふ精進料理を以て名高し。

法善寺 千日前の北に在り、寺中に金毘羅ありて、蕨人等の信仰する所たり、寺内に落語義太夫の寄席あり、料理屋あり、雑踏を極む。

壽法寺 天王寺東門の北半町許に在り、俗に紅葉寺といふ、古楓數十株、夏秋の遊に適す。

國分寺 國分町に在り、諸國に在るものと同じく聖武天皇の勅願所なり、昔は一

尺六寸の黄金佛を安置されしといふ、今は亡し、今の本堂は秀吉の桃山御殿の一部を移して建築せしものなりと、椽側の天井に血痕の如きものあり、俗に血天井といふ俗に佐々成政の切腹せし時腹を天井に投げ上げし痕なりなど云ふといへども是れ牽強附會の説なり。

月江寺 天王寺町に在り、淨土宗の尼寺にして、光明山林照院と號す、永祿十年の創立なり、本尊は惠心作の阿彌陀佛にして、蟲谷は蟲の名所なり、寺内に三味線塚あり。

吉祥寺 萬松寺といふ昔赤穂城主淺野長矩の歸依寺にて、寺門の遍額は長矩の机面に書きし字を其儘用ひしものなりと、一覽の價值はあり、寺内に四十七士の木像あり。

南京寺 天王寺勝山通一丁目に白駒山清壽院といふ寺あり、創立年月詳ならずれども古き寺にて、中興の開山は支那僧大成和尚といへり、(明和頃の人)其本堂に關羽の像あり、維新以來支那人の歸依するもの多く、寄附金して本堂拜殿等を改築せり、よりてこれを南京寺と唱ふる者あるに至る。

關帝廟 天王寺東門の東一町に在り、法王山龜林寺といふ、心越禪師の開基にて

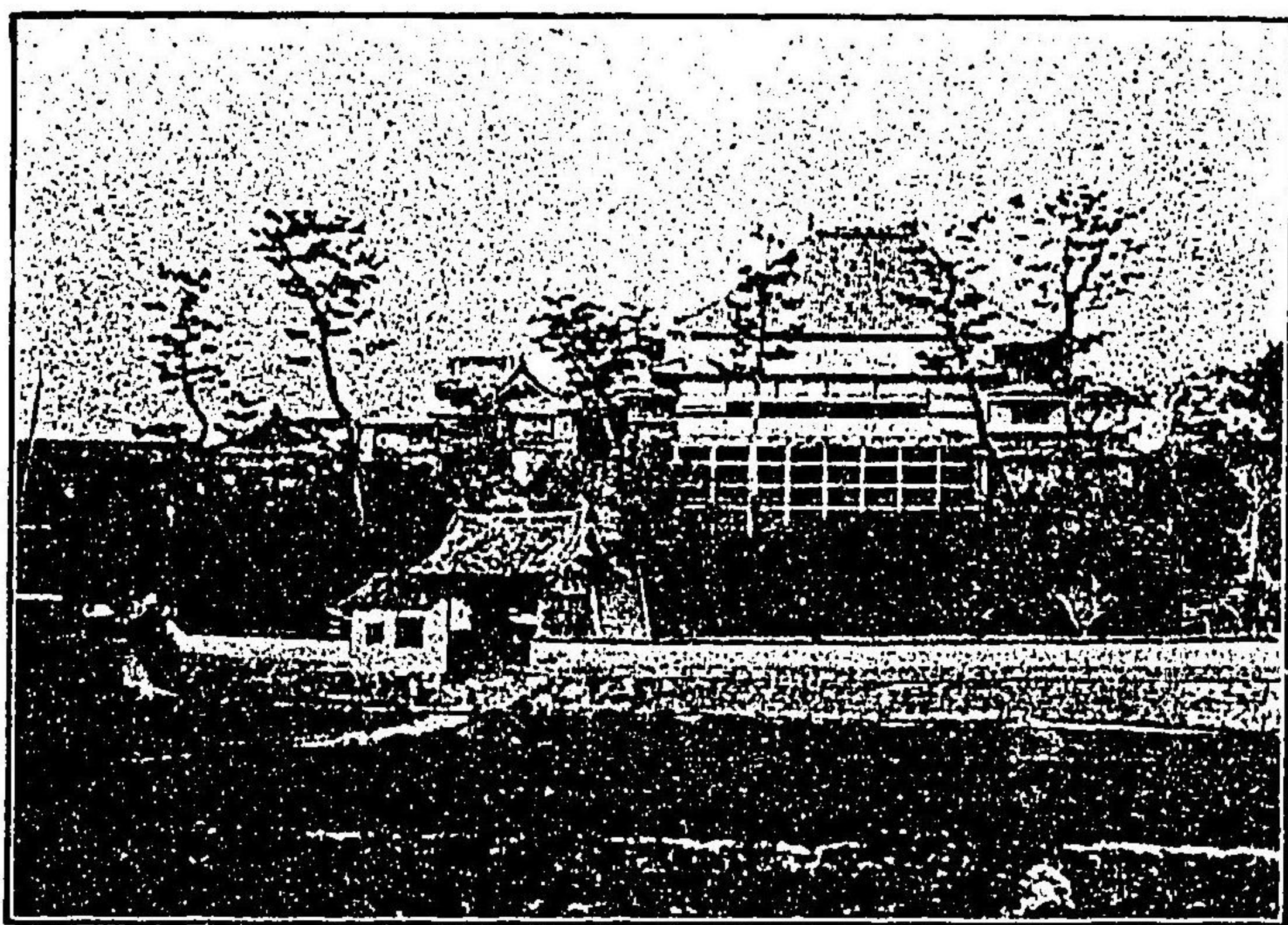
延寶五年の建立なり、禪師明國より持ち來れる關羽の像を以て其本像とせり、よりて俗に關帝廟と稱す、萩の名所なり、

逢阪清水 逢阪下之町に一心寺といふ淨土寺あり、圓光大師廿五箇所舊跡の一なり、文治元年慈鎮和尚が法然上人圓光大師を請じ、方四間の小庵を作りしより始まれり、後白河法皇駐蹕の故事を以て名あり、本尊は毘首羯摩天の作と稱する長三尺の阿彌陀佛あり、今の山門は大坂城玉造門を拜領したるものにして、境内に本多出雲守忠朝及其臣九名の墳墓あり、大坂陣に戦死したる人々なり、中興本譽上人の觀修堅固なるを家康殊の外感嘆して一心寺の名を命せしと、今は阪松山高岳院といへり、逢阪清水とは京都の清水に擬したる稱なり、

勝鬘院 勝鬘阪に在り、聖德太子勝鬘經を講せし舊跡にして、本尊は愛染明王なり

遊行寺 勝鬘阪に在り、一遍上人の舊跡にして、境内に芭蕉茶屋あり、俳人に縁故多し、

新清水寺 天王寺伶人町にあり、寛永十七年京都の清水寺に在りし聖德太子作千手觀音を移して本尊とせしより此名あり、前名有栖山寺懸崖の上に堂宇を構へ



大 阪 清 水 寺



高 津 ノ 宮

て眺望絶佳、南方紅葉、阪下に人工の音羽瀧あり、石階の測に油煙齋貞柳の碑あり、
油懸地藏 日本紀に見ゆる安曇寺の石地藏なり、有名なる石佛にして禮拜する
時佛身に油を灑ぐを以て此名あり、

鐵眼寺 本名を慈雲山瑞龍寺と稱し、難波元町二丁目に在り、本堂に藥師如來及
十二神將を、天王堂に彌勒菩薩及四天皇、韋陀天を安置せり、境内二千四百坪の黄檗
禪寺、蓋し大阪第一なるべし、寛文中鐵眼和尚の住職となりし頃、高德一世に輝きし
かば、隨て鐵眼寺の寺號を稱するに至れり、

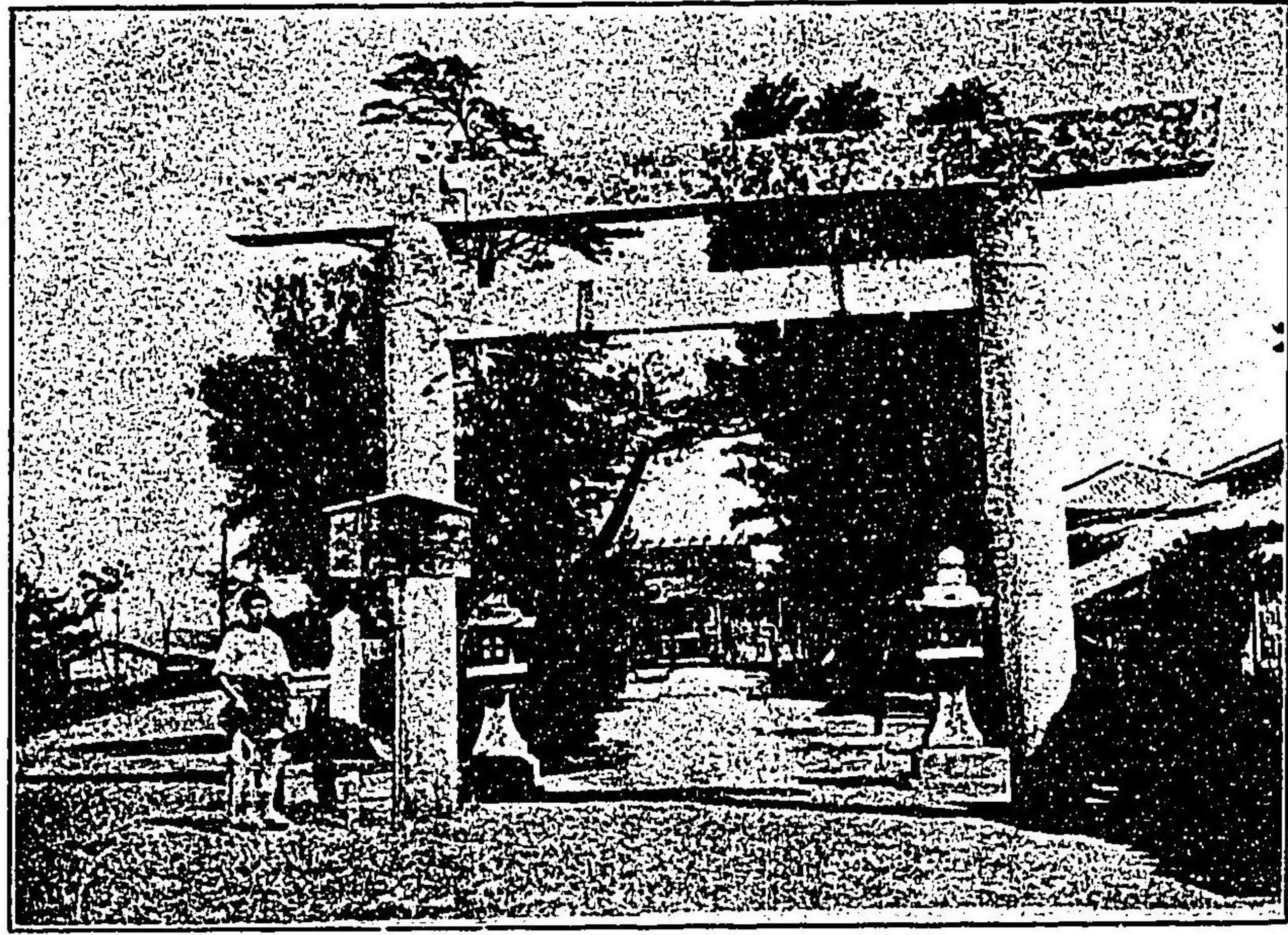
今宮 今宮惠美須三丁目に在り、俗に今宮の戎と稱して有名の祠あり、天照大神
を中央にし、左に蛭子命、大己貴命、右に月讀命、素盞命を奉祀す、昔は天王寺の鎮守、
境内一千坪、大阪市民の福神として崇敬する所なり、毎年一月十日の祭日、即ち十日
戎には貴賤群集、老若肩摩、殆んど附近の通路を杜絶するに至る

三津八幡宮 心齋橋の南五町許、八幡筋、佐野屋橋の角に在り、祭神は應神天皇

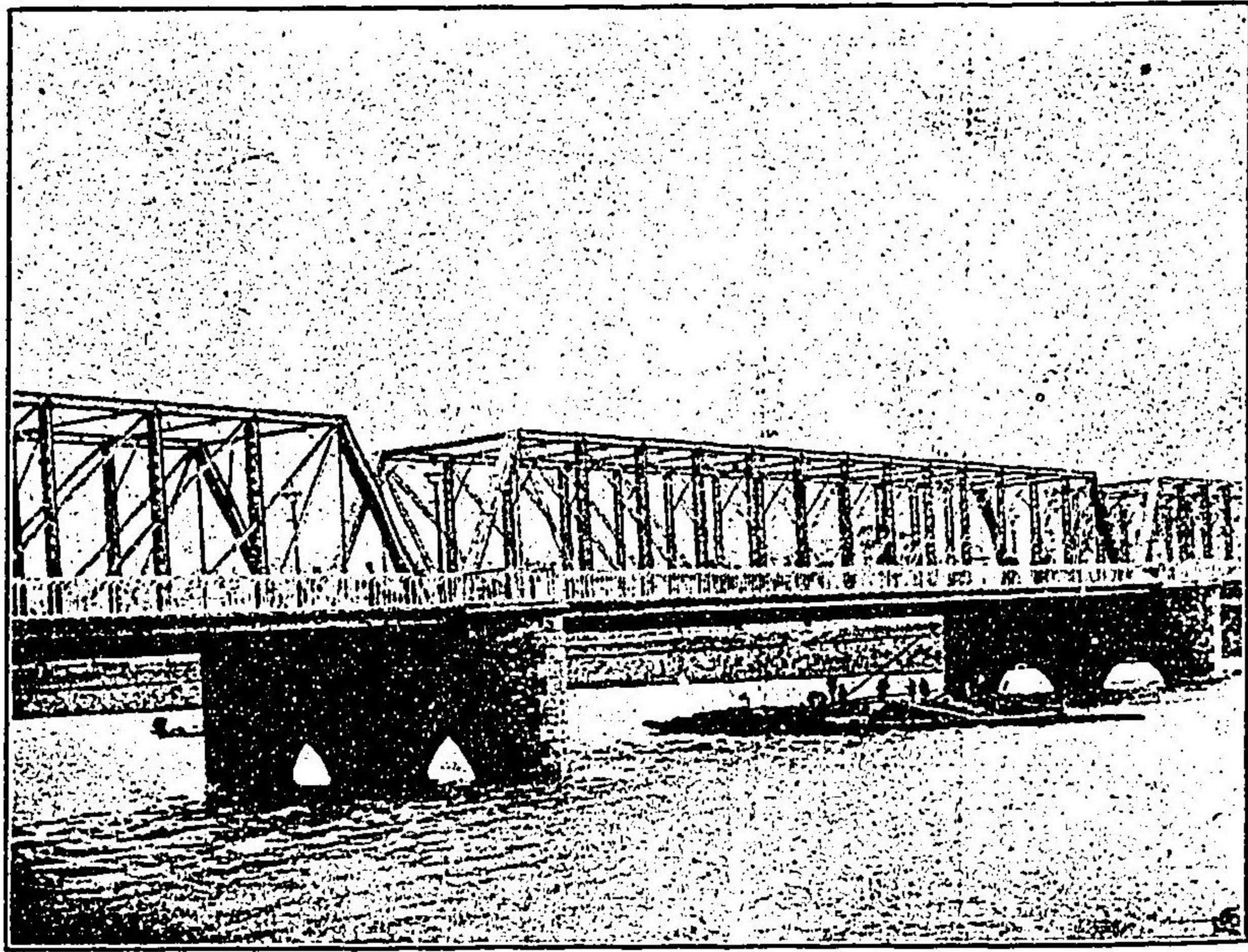
難波八阪神社 京都の八阪神社と団体にして、素盞雄命にして、本社末社亦た

京都に準ず、

廣田神社 今宮の廣田町に在り、天照太神の荒魂を祭る、



宮の櫻



橋満天

安井天神 天王寺逢阪上の町に在り、菅公左遷の途次此に休息せる山緒なり、社頭に安井といへる井戸あり、芝原祭といふ祭禮あり、

高津神社 仁徳天皇仲哀天皇應神天皇履仲天皇神后皇后葦姬皇后を祭祀す、いと古き大社にして、寶物には祭祀憲錄同寫本、足利時代後柏原後陽成後水尾後櫻町四天皇の御宸翰、徳川秀忠祈願書、其他古書、刀劍具足等數十點あり、社地は市内に稀なる高地にして、西南の眺望極めて佳なり、東京の愛宕に類せり、境内に古くより名高き湯豆腐屋あり、遊覽者の一酌を催す所なり、昔時は神田五十町を領したりといふ

北區之部

櫻の宮 大阪を知りて櫻の宮を知らざるは、殆んど堂島米市場を知らざるが如し、といふ程でもなければ、一面川に臨み一面田野を控へ、近年まで櫻樹多かりし爲め、東都の墨堤其儘にして、花時に人の群集すること無數なりしが、造幣局設立の爲め、西岸の櫻を伐られ、其後洪水ありて東岸の老櫻を失ひ、大に風致を害したり、たゞ東郊の菜の花の時に彌生の人足を牽くのみ、櫻宮の名は天照大神の祠あるが爲なり、

西山宗因の墓 俳諧談林の泰斗にして一代の奇句なほ人耳に喧しき梅翁西山
宗因の墓は天満寺町西福寺に在り、俳人を以て自ら任するもの必ず之に賽せざる
可からず、

福澤諭吉の誕生地 堂島女學校敷地内に在り

淀屋橋 堂島米市場の元祖淀屋个齋の初めて架けたる橋にして淀屋辰五郎の
驕奢幕府の嚴責を蒙むりしことは人口に膾炙する所なり

王仁の墳 應神天皇の御代朝鮮より來朝して菟道稚郎子、及び仁徳天皇の師た
りし王仁の墳は浦江の東舊大仁村に在るもの、それなりと言ひ傳ふ

證如上人の舊蹟 本願寺十代の法主證如上人が山科の御堂を日蓮宗徒に焼討
せられし時、此地をのがれ來りしに敵なほ追及して上人の命危かりしを門徒の忠
戰によりて助かりしとの口牌を傳ふ、野田村に在り

大鹽平八郎の墓 王陽明派の碩學革命の急先鋒として天保八年貧民救恤の旗
押し立て、大阪市内の富豪を襲ひ、竟に幕兵の爲に破られ自殺せる大鹽平八郎及
ひ其子格之助の墓は、天満寺町橋東詰成正内に在り、志士一縷の香を焼くを怠るな
かれ、

天満橋、天神橋、天満橋は大阪最初の長橋なり、明治十八年の洪水に天神橋と共に流失せしを今の鐵橋に改めしなり、

中之島公園 浪花橋以西、淀屋橋以東を中之島公園となす、甚だ廣からずと雖、雙方川に臨んで風景絶佳なり、博覽會の爲め新に建築したる大阪公會堂あり、且つ住友氏寄附の圖書館も遠からず落成する筈なり、豊公銅像も建立せらるへしといふ、大阪の上野ならんかし、

田箕橋 謠曲蟬丸に見えし田箕島の舊跡は、浦江大仁の邊ならんか、或は佃島の事ならんともいふ、

網島 巢林子の戯曲に有名なる天の網島は、寐屋川に架せる備前島橋を渡り、淀川に沿へる街にして網島の名を存す、所謂大長寺もこゝに在り、紙屋治兵衛の墓及び鯉塚あり、櫻の宮に遊ぶ時、見んと思はゞ見るべし、網島停車場も遠からざるに、源八渡 櫻の宮より天満源八町へ渡る舟渡しなれど、架橋の後は其名のみ残り、墨田川の竹屋の渡の如きもの、

逆櫓松 義經と梶原の故事人の知る所にして、其松は枯れ朽ちて根幹はなほ福島橋詰町に存す、杉本といへる人の所有に屬せり、

野田の下り藤 輕業師の口上にも引かる、野田の下り藤は、西野田玉川町春日神社の境内に在り、足利二代將軍義詮及び豊太閤いづれも此藤を遊覽ありしとなり、

兎餓野 仁徳天皇の皇后と共に鹿鳴を聞き玉ひし兎餓野の跡は、北野より天満に至る平地にて、今は床の尾といふところ、是れ其轉訛せるものなりしといふ、

凌雲閣 北野茶屋町に在り、九層の眺望、

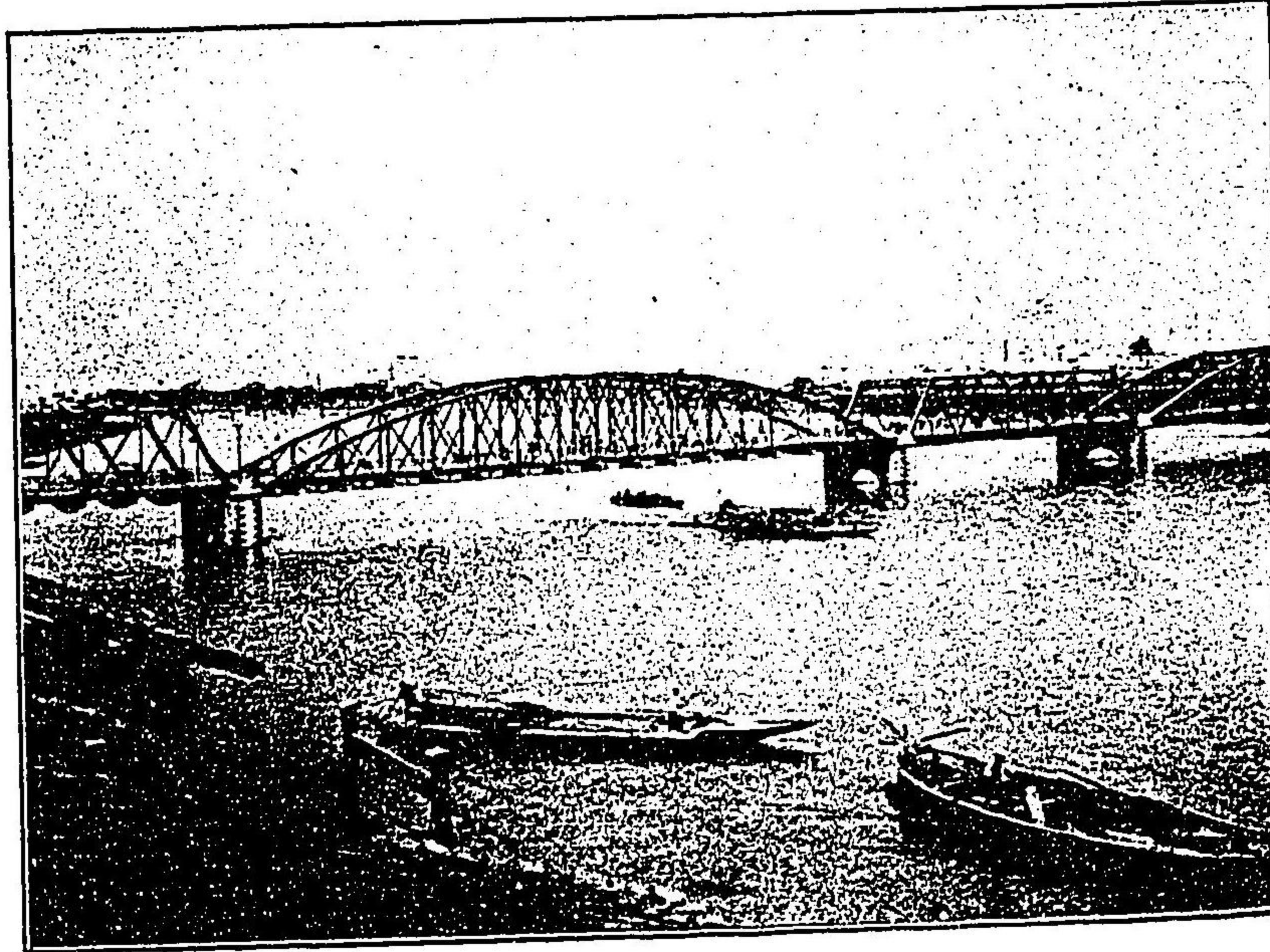
國分寺 南區天王寺の國分寺と同時に建てられたる滅罪寺の迹ならんなり、

太融寺 北野太融寺町に在り、古義眞言宗なり、弘仁年中弘法大師行脚して此に來り、樹林中に香木あるを見、手づから佛像を彫みて此等を建られたりと言ひ傳ふ、山號を桂木山といふはこれなんめり、後に河原左大臣源融仁海上人をして大伽藍を建立せしむ、太融寺の名はこれより出てしならんか、元弘建武頃までは儼然たる巨刹なりしも、頽廢して昔の面影はかりに存するのみとなれり、中將姫が逆絲を以て縫ひしてふ四天王像、所謂曼陀羅あり、有名の藤棚あり、

淀君の墓 太融寺に在り、大阪城中の楊太眞、香魂今何の處にか宿す、高さ一間餘の九重の石塔なり、



大 浦 宮



天 神 橋

妙徳寺 上福島中三丁目に在り、俗に五百羅漢寺といふ、本尊は釋迦如來にして其周圍に五百羅漢を安置す、千年以上の古寺、禪宗黃檗派也。

日限地藏 北野法住寺に在り、賽者多し。

寒山寺 支那の寒山寺を模したるものにて、『姑蘇名刹』の額あり、梵鐘また有名なり

母恩寺 濱上江町に在り、後白河法皇御母の御菩提の爲めに建て玉ふといふ由

緒の寺なり、蓮花の名所、

源光寺 南濱に在り、清淨瑠璃山三昧院といふ、淨土宗の寺にして本尊は天竺阿彌陀如來、聖武天皇の天平勝寶年中行基菩薩が三昧火坑を始めし處といふ。

興正寺天満別院 天満河内町一丁目に在り、天満郷中最古の寺にして、一に産寺

といふ、昔は天台宗なりしも後に眞言宗と改まれり、幕府時代は宗旨の如何に關せず、天満郷中の人民は皆な米錢を奉納し、必ず宮参りに來る習慣ありたり、一に産寺といふ。

夕日神明 老松町の北に在り、市内三神明の一にして古社なり、祭神は天照大神、豊受太神なり、河原左大臣の勸請せしものにして、文治中源義經、平家追討の時、大風

浪に船を出さんとして當社へ願書を奉納せりと、後醍醐天皇の勅願所たり、今は荒廢して見る影も無し、

露の天神 曾根崎蜺橋の北數町の處に在り、菅公左遷の時「露とちる」の和歌を詠せし古跡にして、俗にも初天神といふは、彼巢林子の傑作たる「曾根崎心中」を見て之を詳かにすべし、

福島天神 上福島、中福島、下福島の三ヶ所に在り、菅公左遷の時船泊りして此地は何といふかとなづねしに、里人餓鬼島といふと答ふしかば、不詳の名なり福島と改めよと命名せし古迹なりとかや、

網敷天神 北野に在り、菅公左遷の時網を敷きて坐し風光を賞せられし舊蹟なりと、

天満天神 天満大工町に在り、世に聞こえし大社にして、末社に地主神、大將軍祠、靈符神、蛭子祠、菅相眞筆の像、紅梅殿、老松祠、白太夫、神明、八幡、住吉、松尾等あり、境内廣くして庭園美なり、寄席、見世物等ありて四民群集す、七月の鉾流しの神事の如きは頗る盛觀なり、社記によれば、昔此あたり森林なりしに、天曆中林中に靈光顯はれ里人への神託に菅公の靈は難波の梅を愛すとありし故、朝廷に奏せしに菅公の崇あ

りと信ぜし當時なれば直ちに許可ありて壯大なる神祠を建築されしとなん、

大阪控訴院 大江橋北詰東へ一丁目、洋風構造にして市内屈指の建物なり、

誠忠記念碑 浪華橋より中之島に渡れば石の鳥居立てり、其傍に木村長門守誠

忠記念碑あり、

豊國神社 中の島公園に在り、別格官幣社にして明治十二年の創建なり、祭神は

豊大閤及び秀頼合祀なり、英雄の峨廟千古金城と同じく存す、

大阪に於ける神社佛閣 名所舊跡、あまねく之を觀盡すの日は、又た觀るべきも

のなきか、否々大に之れ有り、

大阪府廳 江の子島に在り、明治七年七月の建築に係る、巍然たる洋館にて西は

正門東は裏門なり、其南に警察本部あり、南隅に在る煉瓦造の洋館は府會議事堂な

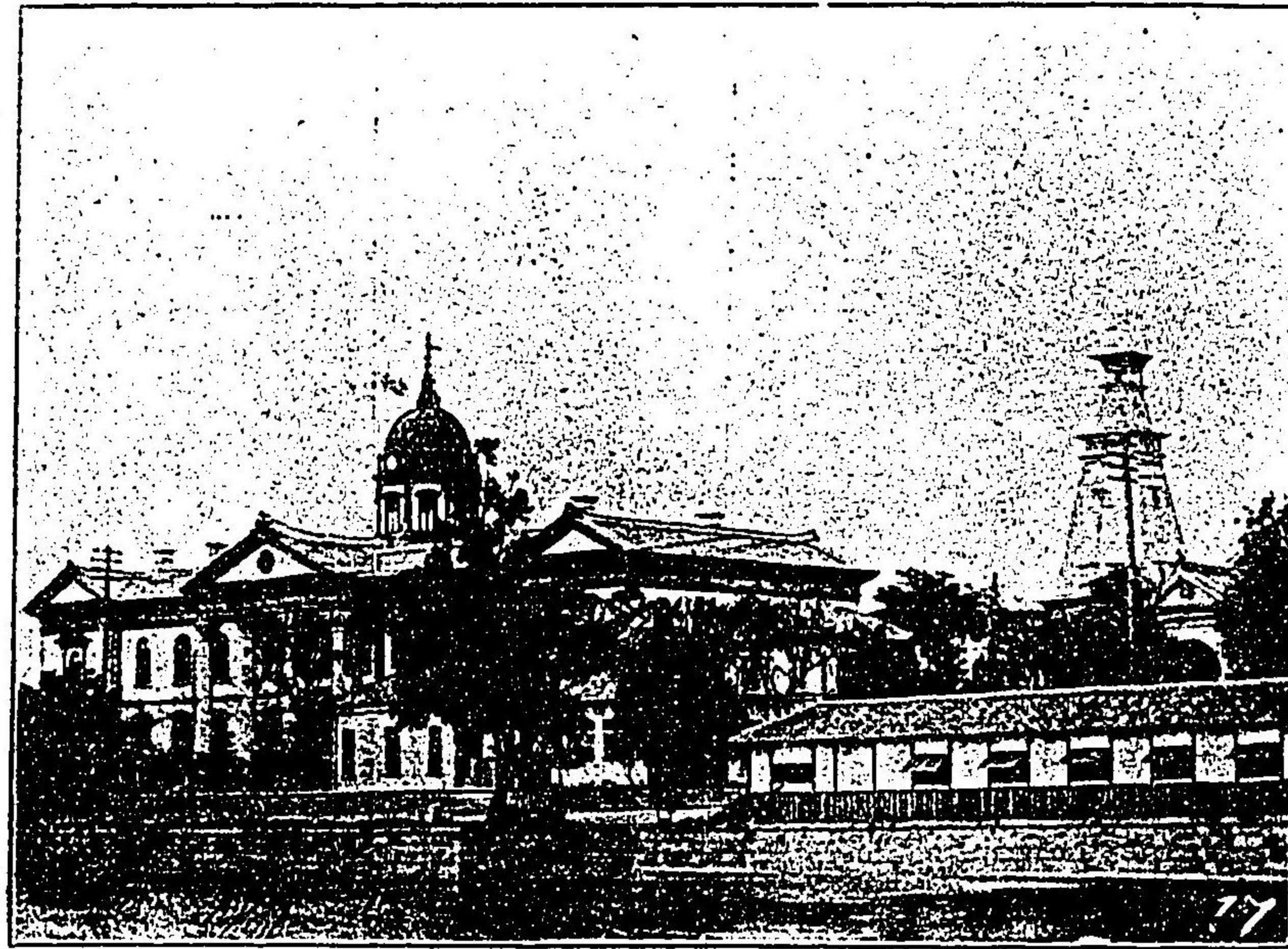
り、

大阪市役所 府廳に對して木津川橋の詰にあり、木造の假構造にて建築はアマ

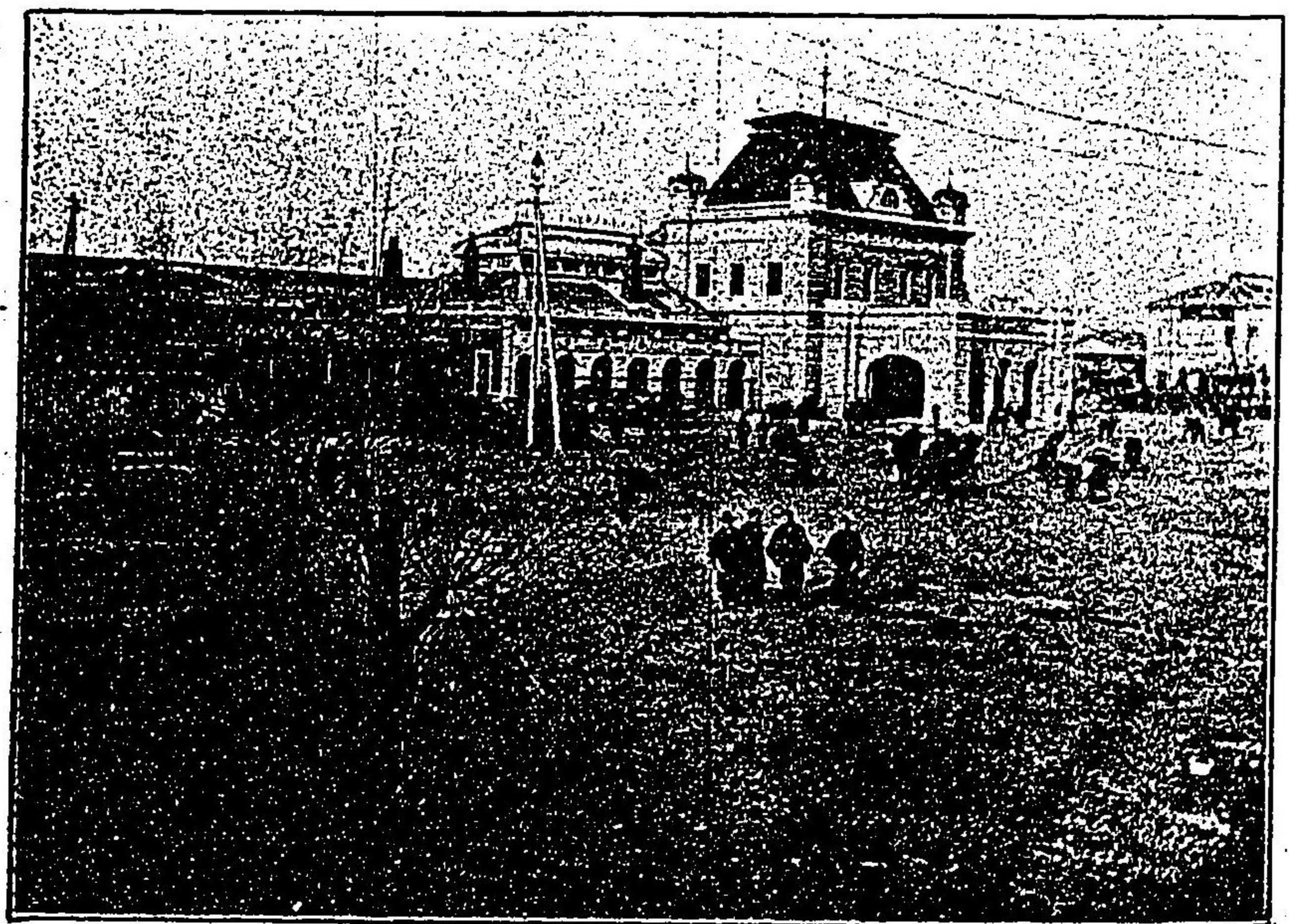
リ立派ならず、

米穀取引所 堂島濱通一丁目に在り、天正年間淀屋三郎左衛門初めて堂島に米

穀市場を創建し、豊太閤に軍糧を納むるの便を計りしより、以來舊幕時代には諸藩



大阪府廳



梅田停車場

の藏屋敷ありて隆盛を極め、維新以後に至りても依然全國米穀取引所の大王として關西に雄視せり

株式取引所 東區北濱二丁目に在る宏壯なる建物にして、明治十一年の創立なり、

大阪商業會議所 堂島に在り、

大阪商品陳列所 大阪に来る者の必ず見物せざるべからざるものたり、商品部調査部圖書部工業試験部の四部に分ち、商工業の擴張改良を圖る爲め内外國の重要物産を陳列し又これに關する新聞雜誌圖書の類を蒐集して實業者の参考に供し兼ねて商工業上に必要なる諸般の調査及試験を行ふを以て事業とす、殆んど其完備を極めたり、午前九時より午後四時まで普ねく公衆の縦覧を許す、

造幣局 天滿川崎町に在り、日本最舊の洋式金工場にして、明治四年の創設に係れり、毎火曜日局員の紹介ある者、又は前日迄に直接願出づる者に切符を渡し溶解場、伸延場、極印場、彫刻場の觀覽を許さるゝなり、局の庭園に櫻樹多く花期は美觀云ふべからず、花期三日間特に公衆花門内に入りて花を觀るを禁ぜず、博覽會開會中は同局より何物をも出品せざる代りに、博覽會協賛會の請に應じ、毎週火、木、土の三

日を撰び、協賛會より紹介せるものに限り觀覽を許すと云ふ、

泉布觀 造幣局と同時に建築せられ、以前は同局に屬して應接所と稱せられしものにて、明治五年六月今上御西巡の際行在所に充てられ、泉布觀の稱を賜はりしなり、泉布の出所は史記貨殖傳の『寶貨之行如泉之布』とあるに基きしとぞ、今は美術協會大阪支部之を借り常に美術品を陳列して衆庶の觀覽に供す庭園亦美來觀者多し、

大阪博物場 東區本町橋東北角に在り、舊幕時代の奉行所にして、維新後一時府廳となり、府廳江の子島に移轉せし後、明治七年九月内務省より府立大阪博物場創立の認可を得、開場せしを始とし今は事務所、陳列所の外に動物檻あり、美術館あり（府下富豪の珍藏せる書畫の如きも亦た借り來られてこゝに公衆の觀覽に入る）、圖書閱覽室あり、賣品室あり、百疊敷の大廣間あり、能舞臺あり、能狂言、音樂、抹茶其他娛樂的會合は絶えず此館裡に催さるゝなり、庭園の美亦た四季の遊勝也、

大阪納涼臺 中之島劍先に在り、初め協賛會の計畫なりしが市民茨木某氏類似の計畫を爲し、を以て相談の上個人の計畫となし、ものなり、臺は船形にて長七十五間、幅十五間あり、長十五間、幅四間の棧橋によりて劍先に接続せり、台上には氷

店、ビヤホール、飲食店、新聞縱覽所、碁將碁所、盆栽陳列所等あり、昨年七月二十四日開業以來毎夜數千人の涼客あり、入場料大人三錢、小兒一錢五厘

築地 北濱の東端大川に臨みたる一廓なり、旅館料理亭多く、美人を携へて優遊するもの多し、

文樂座幾代亭 御靈社内の文樂座は日本一の越路太夫の美聲を聞くべく、稻荷社内の文樂座は之に劣らぬ大隅太夫の本據なりしも、今は劇場となれり、淡路町の幾代亭は桂派の落語寄席、平野町の此花館は三友派の落語寄席、

松島遊廓 西區に於て梅本橋を東へ渡れば松島遊廓にして、仲之町高砂町等或は三層四層の高樓に華美を競ふ、仲之町の中央に櫻を植ゆ、花時燈を點じ、美觀を極む、遊客の種類は劣れ共、花街としては大阪第一なり、松崎の名におへる松ヶ鼻の古松は川に垂れて蒼々鬱々、惜い哉、近時此邊に家屋を建増して舊來の風致を損せり

築港 設計の概略は安治川より南は八幡屋町、新池田町間の海邊より木津川口千本松の處まで埋立地となし、船渠七處を設け、其南を南突堤とし、四條渠の前を内港とし、港内航路中央の北を外港とし、安治川口の北部櫻島の西南を埋立て、船渠一處を設け、其西縁を北突堤とし、天保山の西南に當りて長二百五十間、幅十五間の棧

橋を作る、突堤の延長は南は基點より一千八百五十五間、北は一千四百九十二間に
して、兩突堤にて港を抱き其口百間の航路を成されあり、其工事は築港觀覽船にて
見ることを得べし、

堀江遊廓 問屋橋筋を東に宇和島橋筋あたりまで、北堀江上下兩通は貸座敷立
並び居れり、

新町遊廓 長堀川の北に在り、大阪最古の遊廓にして、昔は新町通に在りしが今
は新町通よりも越後町の方盛にして、歌舞宴樂の樂園なり、

道頓堀 大阪第一の繁盛の地と稱せらる、慶長の昔安井道頓の開鑿せし道頓堀
の附近の總稱也、浪花橋を渡りて戎橋に至るまでは九郎右衛門町の花街、青樓左右
に連り、橋より東は櫓町にして川竹五座の櫓並び立てり、其景氣目ざましなるとい
ふばがらなり、

五大劇場 道頓堀戎橋頭の西の端は浪花座にして舊大西と呼ばれ、其次なるは
中座なり、太左衛門橋の南詰なるは角座なり、こゝ千日前に曲がる角に當れば此名
あり、殊に賑ふ、相生橋の南詰なるは朝日座にして、其東にあるは辨天座なり、いづれ
も屈指の名優を集めて四季興行の絶る間なく、實に大阪の花なりけり、

千日前 角座を左折すれば播重、文明館の女太夫席あり、西洋輕業、仁輪加等さま
の見世物兩側に客を呼ぶ聲喧しき、之を大阪の千日前といふ、東京の淺草、京都
の新京極、神戸の楠公社と並び稱せらるゝ、貴賤歡業の場、其俗なるをいふこと勿れ
人間は此の如きことを好むものなり、

南地の五花街 道頓堀の河岸は芝居茶屋續きにて、宗右衛門町、九郎右衛門町、櫓
町、坂町、難波新地等あり、之を南地の五花街と稱す、藝娼妓の店各處に散在し、色情酒
慾の喜見城、妓の美にして艶なる、藝ありて粹なる、大阪遊廓の第一位に居る、

大阪の二大新聞 一を大阪朝日新聞社といひ、一を大阪毎日新聞社といふ、朝日
は村山上野兩氏の合資會社にして、明治十一年の創業當時は頗る微々たる新聞な
りしも、漸次業務を擴張して、今は日本國中最大の發行數を有する新聞となれり、毎
日も亦た合資會社なり、明治十六年の創刊にして、始は如何にも奮はざりしが、渡邊
治氏編輯を統轄するに至り、頗る勢力を作り、今は朝日と拮抗して記事の精密、紙面
の品位、發行高等敢て遜色無きの觀あり、之を大阪の二大新聞と爲す、別に大阪新報
なるものあり、創立日淺うして最初は單に惡口新聞を以て見られしが、近頃漸く隆
盛の運に向ふが如し、

大阪の學校 官立には大阪高等工業學校(中の島に在り)大阪地方幼年學校(東區大手町に在り)府立には大阪師範學校(桃山に在り)大阪醫學校(中之島に在り)北野中學校(北野に在り)天王寺中學校(天王寺に在り)市岡中學校(市岡に在り)清水谷高等女學校(清水谷に在り)堂島高等女學校(堂島に在り)等なり而して市立には大阪高等商業學校(堂島に在り)大阪第一の學校とも稱すべくして明治十三年の創立なり、東京高等商業學校と相對峙して、全國中最も完備せる商業學校の一なり、小學校數は東區市立十五、私立二、西區市立二十三、私立三、南區市立十九、北區市立二十一にして、幼稚園は市立三十六、私立二と稱せらる、實業補習學校は商業を教ふるもの十一、商業を併せ教ふるもの一、いづれも市立にて其他各種私立學校は八十七校に達すといふ、此に於ての教授科目は外國語、漢學、數學、醫學、修身、理化學、國語、裁縫、作文、習字、簿記、倫理、容儀、神學、宗教、航海、歴史、地理、動物、植物、礦物、産婆學、看護學、唱歌、体操、手藝、水泳、藥學、商業學等にて、就中著名なるは梅花女學校、相愛女學校、ウイルミナ女學校、大阪外國語學校、明星外國語學校、關西法律學校、大阪商業學校、大阪商工學校、大阪實業學館、泰西學館、大阪共立簿記學校、泊園書院、梅清處塾、大阪慈惠院、醫學校、關西醫學院、緒方病院、産婆教育所等なり、

大阪の病院 全科には大阪府立醫學校病院(北區常安町)緒方病院(西區立賣堀南四丁目)高安病院(同土佐堀通五丁目)井上病院(同南堀江上通一丁目)岡病院(同江戸堀南通二丁目)柳病院(同江戸堀北通四丁目)聖バルナバ病院(川口町深澤病院)南區末吉橋通三丁目)高安病院(桃山支院)同天王寺北山町)大阪慈惠病院(東區粉川町)菅沼病院(同道修町一丁目)城南病院(同寺山町)回生病院(北區絹笠町)長谷川病院(同下福島二丁目)眼科には岩崎眼科病院(南區心齋橋一丁目)高橋眼病院(東區島町一丁目)山縣眼科病院(同北濱三丁目)小林眼科病院(同横堀六丁目)精神病には大阪精神病院(南區逢阪上之町)脚氣病には脚氣病院(南區天王寺勝山通一丁目)花柳病には大阪府立難波病院(南區難波新川三丁目)傳染病には大阪市立桃山病院(南區天王寺筆ヶ崎町)私立傳染病研究所(同附屬精神病院)南區逢阪下之町)産科婦人科小兒科には緒方婦人科病院(東區今橋四丁目)大阪河野病院(東區北久太郎町一丁目)其外大阪癲狂院(北區本庄葉村町)獸病院(南區惠美須町三丁目)

大阪の銀行 『旅に疾みて』は芭蕉が不吉の句なれども、必ずしも死病ならざるにせよ、水換はり氣候の同じからざる時、病氣の處なきにあらず、故に著者は博覽會遊覧の客の爲めに大阪の病院を列舉して面白からざる半頁を費やしたりき而も此

の如き場合には先立つものは金銭にして旅費以外に不急の要なきにあらず、また多額の金子を旅中に携帯するは頗る劍呑なる次第なれば、暫時銀行に預け込みて之を金庫代用となすも妙ならずや、こゝに大阪の銀行を舉ぐれば、實に左の如きなり

浪速、三十四、百三十、山口第一、第三、住友、鴻池、三菱、三井、帝國商業、北濱、五十八、十二、十八、二十二、二十三、二十九、七十八、八十九、百四十七、近江、大阪實業、大阪三商、木原、川上、加島、谷村、虎屋、藤本、清水、富岡、大和積善同盟、尾州、大阪貯蓄、日本貯金、起業、土佐高知、平安、阿波商業、日本貿易、大和田、大阪工商、岡橋、天滿、旭、西六、津山、青莖、宇和島、

大阪の三大工事 水道、築港、淀川改修、之を大阪の三大工事といふ、水道は落成せしと雖、淀川改修及築港は今尙ほ事業の進行中なり、水道及び改修工事は地續きなれば何時にても見物を爲すことを得べく、築港は船の力を借らざるを得ざる場所なれば、天氣と時間とを見定めたる上にて出掛けざるべからず、最も築港事務所には公衆の便利を圖り、毎日時を定めて案内船を出し、港内港外を巡覽せしめつゝあり、且つ博覽會開會中は協賛會より特に觀覽の便を圖る筈なれば、之に依るを最も便利とす、

大坂町案内 此の如くにして著者は大阪に於ける名所舊跡其他博覽會見物の序てを以て見物すべきものは、荒増舉げて報導するの義務を果たせりすなはちこゝに一括して大阪町案内を爲し、彼名所舊跡を順覽するの便を與へざるべからず、大阪の町即ち大阪市なるものは、東西二里廿四丁、南北二里十九町にして、東は舊城の北、猫間川を境とし、西は延びて海面に及ぶ、南は今宮博覽會場の南端、關西鐵道の線路を境とす、北は大川及び官設鐵道を超へ、西成郡と犬牙相交る、東西南北の四區に分つ、而して大阪見物を爲さんとする者に、此四區内に於ける舊來の俗稱即ち大阪人士が口暮口に上しつゝある地名を記憶し置くの必要あるなり、たどれば東京に於ける赤阪區に、赤阪、青山、溜池等本郷區に於て本郷、駒込、湯島、片町、追分等其他の名稱あるが如きなり、大阪に在ては、東區には船場、上町、高津、玉造、清堀、西區には土佐堀、江戸堀、京町堀、靱阿波座、薩摩堀、立賣堀、新町、北堀、江、南堀、江、江の子島、松島、三軒屋、九條、西九條、櫻島、川口、四貫島、各新田、南區には天王寺、今宮、木津、西濱、難波、道頓堀、島の内、南船場、北區には安治川、野田、福島、梅田、會根崎、北野、天滿、堀川、西天滿、川崎、網島、都島、中之島、堂島の名を知らざるもの無きなり、大阪の町を早見せんには、大阪の習慣にて東西に通る町を『通』といひ、南北に通る町を『筋』といふを記憶すべきなり

見よ高麗橋は通にして、心齋橋は筋なり大阪見物の順序を高麗橋即ち里程元標の在る處より初めんとすれば、此邊の築地、淀屋橋邊を見物し御靈神社、兩本願寺別院に賽し、心齋橋筋より大商家軒を列ぬる本町を過ぎ、文樂座、大阪博物場、天神橋、八軒屋、天滿橋を渡り、大阪城、森の宮、高津宮趾、梅屋敷、生國魂神社に至るべし、土佐堀より大阪府廳、松島遊廓、築港、天保山等川口に添ひ更に堀口より四つ橋を渡り、新町の廓見物、明樂座に大隅太夫の淨瑠璃を聞くもよし、更に心齋橋筋に立歸り南地五花街、住友本邸、道頓堀千日前等を巡覽するも面白かるべし、茶臼山、四天王寺の見物も之よりなれど、博覽會見物の人は大阪全市を見物する前に先づ此あたりを見る可ければ委しき案内には及ぶまし、北區にては網島、櫻の宮等より造幣局、天滿神社、豊國神社、中之島公園等を経廻ぐりて梅田停車場に出て、以て更に名勝を大阪市以外に求むべきなり、

著書は此の如くにし略ぼ大阪市を盡せりき、なほ交通の事其他に於て録すべき事少なからずと雖、著者が斯要覽を草するは獨り大阪市をのみ記して任務終るにあらず、廣く幾内の名勝を紹介するに在れば漏れたる所は後章に譲り、更に身を鐵路に寄せて大阪附近の勝を探り、漸く目先きを改めしめよ、

歴史上の偉人

大阪に於ける歴史上の偉人、こゝに其二三を擧ぐる者、行客をして其山河に俯仰し懷古の感を起さしめんか爲めに外ならず、年代の前後、功業の大小は暫らく之を恕せ、著者はたゞ偉人を擧げて諸君に示せば、すなはち足る、

仁徳天皇

人皇十六代の聖主、仁を以て蒼生に臨み、徳を以て天下を治め王ふ、

聖徳太子

馬子の大臣を恕し賜ひしは、近江朝の大勇猛、ねはさぬが爲めなれど

も其大智慧に至りては、實に我國をして東洋中の古文明國たらしめし恩人として其名は歴史に飾らるべく残り、

豊臣秀吉

赫々の大名、宇宙に存ず、天下何人か公を知らざらん、

細川忠興夫人

日本の歴史に表はれたる唯一の聖教徒的烈女、十字架下の安身

立命者、

真田幸村

日本の諸葛亮、前に楠あり後に真田あり、獨り神機妙算の兵法に於て

然るにあらず、其忠孝節義の點に於て、亦た然り、

木村重成

日本武士道の權化にして其美、其烈火の如く、花の如く、凝つて百鍊の

鐵の如く、散じて千段の霞の如し、

西山宗因 一十七字、諧謔飄逸、談林の祖、

近松巢林子 日本の沙翁、戯曲の大家、

井原西鶴 稗史第一、俳諧第二、無學にして能く元祿の文壇を濶歩す、

大鹽平八郎 幕末の陳勝、吳廣、しかも其心事は殷湯周發、洗心洞の親玉、陽明學の

泰斗、

浪華の詩歌、

著者の記憶中より不順序に探り出して隨録するのみ、佳篇を逸して凡作を撰ぶの
言は我れ敢て受けず焉、

送人遊浪華

服 元 喬

浪花千里冠南遊、送爾遙思澗水流、地比金陵餘王氣、天分玉帳衛皇州、吳中桃葉因歌
豔、江上梅花入笛愁、更是停撓風月夜、鎮西應遇謝公舟、

大阪

頼 千 秋

客自西東至、相遇豈偶然、故人曾下榻、舊社復開筵、橘柚斜陽外、雁鴻殘雨邊、莫噴尚酒
嘆、一夢憶青年、

舟到浪花港作

阪 井 虎 山

高城遙指浪華洲、浦上風烟入暮愁、秦政當年亡二世、倚陶今日富諸侯、雲間塔聳東西
寺、港口帆飛南北舟、蓬底經旬心已厭、明朝又沂澗川流、

其二

攝府金湯墜自天、豐王雄略憶當年、分流不盡琵琶水、巨壑今無博樂淵、哲婦傾城歎
妾、佞臣誤國笑劉禪、誰知餘勢歸豪華、物價低昂海內權、

浪花城春望

篠 崎 小 竹

突兀城樓俯海灣、春空縱目一登攀、千帆白映洋中島、萬樹青圍幾內山、賣酒店連平野
盡、看花船自上流還、老晴天氣難多得、凝望斜陽未沒間、

發天保山

成 島 柳 北

晨發天保山、直入播淡間、山色翠且紫、海容曲又彎、噫我結髮三十年、頭有冠冕腰佩環、
榮枯一夢乾坤變、青鬢白筮身始閑、江山明媚天付我、唯應漫遊探仙寰、縱令故園日相
望、片帆未夢容易還、

○

浪花津に咲くやこの花冬こもり今を春へと咲くやこの花 王 仁
昔ころなにはるなかといはれけめ今はみやことろなはりにけ

みつの崎なみをかしこみこもりえの船こく君かゆくか野鳥に
久方の天のさく女か磐舟のはてし高津はあせにけるかも
津の國のなにはねもはす山しろのとはに逢ひ見んことをのみ
こそ

宇合
人磨

難波女かころもほすとてかりてなく蘆火の烟たぬ日ぞなき
雨による田蓑の鳥をけふ行けとなるはかくれぬ物にぞありけ
り

讀人不知
貫之

露とちる涙に袖は朽ちにけり都の事を思ひ出づれば

貫之

高どのにのぼりて見れば天の下四方にけぶりて今予富みぬる

道真

なには渦蘆間の月のねぼろ舟霞みてみゆる春のあけぼの

時平

なには人蘆火たく屋に宿かりてすゝろに袖のしほたるゝかな

讀人不知

契あれば難波の里に移り来て浪の入日を拜みけるかな

俊成
家隆

なこの浦のかすみの間より見わたせは入日を洗ふ沖津白浪

津の國のなにはの春は夢なれや葦の枯葉に風わたるなり

露と置き露と消ぬぬる我身かななにはのことは夢の世の中
もしほやくなにはの浦の八重がすみひとへは海士のしわざなり
けり

秀吉
契沖

○

浪花津にさくやの雨や梅の花

宗因

涼しさに四つ橋を四つ渡りけり

來山

今宮は虫どころなり髯なり

全

難波津や田螺の蓋も冬こもり

芭蕉

夕暮は鮎の腹見る川瀬かな

鬼貫

梅の香や湯立のあとの炭の切

丈艸

蘆刈りのうらを喰はせて砧かな

其角

花の御能過ぎて夜を泣く浪花人

蕪村

霜百里舟中に我月を領す

全

藪入や浪花を出て、長柄川

全

いつはあれと水見る夏の都かな

大江丸

吉田屋の蚊に喰れけり伊左衛門

にこり江のこゝろ遣ひも蓮かな

舍利拾ふたもとは玉の風かほる

浅つまに鯛の取をあひせけり

立ち並ふ木も古ひけり梅の花

大阪や見ぬ夜の夏の五十年

大阪と鐵道

大阪に向て來去するものは、最も鐵路の便を感ずべし、海上にて關西同盟汽船、日本郵船會社、東洋汽船會社に依るが如く、陸上にて官設鐵道、山陽鐵道、關西鐵道、南海鐵道、高野鐵道を利用するなり。

官設鐵道

所謂東海道線なるもの、東京より名古屋、京都、大阪を経て神戸に到るものと、富山より金澤、福井を経て米原に至り、東海道線に合する北陸線なるものなり、大阪にては梅田の停車場より乗り込むなり。

山陽鐵道

是れ下關より神戸に至り、官線に連絡するものにして、梅田停車場より官線に乗り込み、神戸に至りて乗り替へ、下關に至れば海峽を渡りて門司より九

大江丸

全

全

全

全

蝶

羅

夢

州鐵道に乗り替るとをも得るなり

關西鐵道

大阪より河内、大和、伊賀、伊勢を経て名古屋に至るの線路にして、大阪にては淡町若くは網島停車場より乗り込むなり、博覽會開設中は天王寺停車場より線路を延長して、博覽會停車場を設けたり。

南海鐵道

大阪より泉州堺を経て紀州和歌山に至る線路なり、大阪よりするに難波停車場より乗り込むなり、博覽會開設中は今宮に臨時停車場を設く。

高野鐵道

大阪より河内の長野に至る線路なり、大阪は汐見橋停車場を以て起點とす。

西成鐵道

是は大阪安治川口の小鐵道のみ、他に出づるが爲めに用ふるものにあらず。

阪鶴鐵道

是は官線梅田停車場より乗り込み、神崎より分岐して池田、有馬、三田を経て篠山に至り、遂ひには舞鶴軍港に至る線路なり。

著者は此間に於て大阪附近の郡部の名勝、鐵道便を利用して赴くべきもの、或は人車徒歩にて探り得べきものとを併せて紹介すべし。

鶴滿寺

關西鐵道天滿驛より下りて七丁余東北に在り、本尊は慈覺大師の阿彌

陀佛にして、觀音堂に百躰觀音を安置す、古梵鐘ありて古雅愛すべし、境内の糸櫻は有名の者なり、

長柄 同じく關西鐵道線路を利用すべくして、淀川の支流中津川は古への長柄川にして、その南豊崎村の邊を總稱して長柄といふなり、長柄長者の古跡、長柄の橋跡、齋塚等あり、孝徳天皇の皇居たりし豊崎宮の舊趾は川の南岸に在り

崇禪寺 長柄の北なる北中島に在り、禪宗曹洞派にして本尊は行基僧正釋迦

佛なり、彼有名なる崇禪寺馬場の敵討は此處にての出來事にて遠城兄弟が生田傳八郎に返討せられし場所なり、兄弟の遺物は寺に藏して諸人の觀覽を許す、

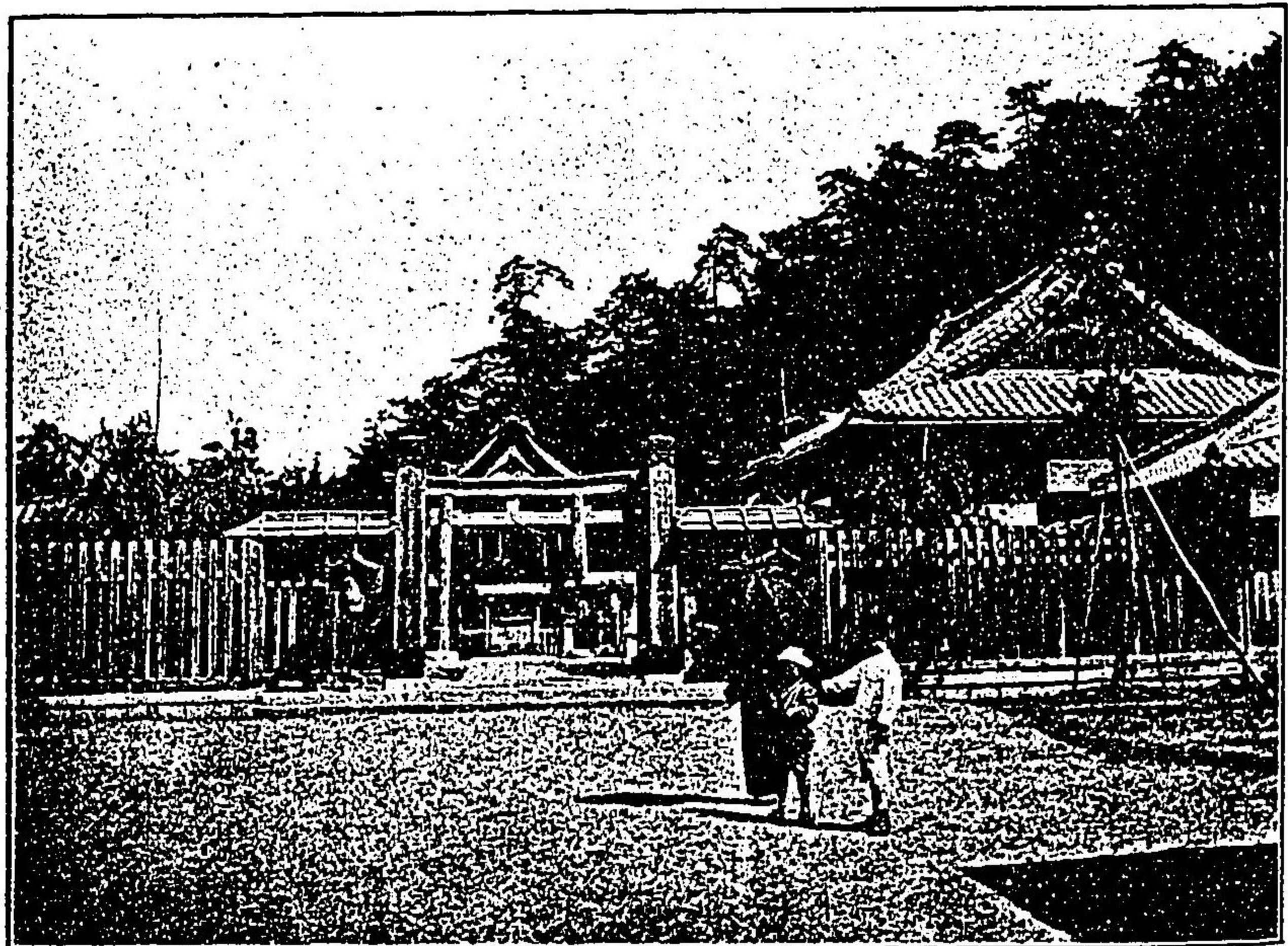
水無瀬宮 人車及び徒歩にて至るべし、三島郡の東隅島本村大字廣瀬に在り、官幣中社にして後鳥羽、土御門、順徳三帝を合祀す、社地は後鳥羽天皇離宮の跡にして水無瀬の里と古歌に残るは此處なんめり、

櫻井驛 廣瀬の西にあり、太平記に於て有名なる楠公父子訣別の地にして、天下の名所なり、明治十年時の大阪府知事渡邊昇及び當時の英國公使パークスの撰ひたる碑銘を建てたり、

能因塚 古會部焼を以て名ある古會部に在り、能因法師幽棲の古跡なり、



園 公 面 箕



社 公 楠 小

本山寺 三島郡原村の北に在り、天台宗にして役の小角の開基たり、本堂の後五町許の山奥に瀧あり、五色の瀧といふ、日光に映じて瀑布の五色を呈するを以てなり
箕面瀧 大阪より凡そ六里、阪鶴線池田停車場より四十町余に箕面山有り、山中の寺を瀧安寺と呼ぶ、瀑布あり高さ十一丈余、楓樹多くして紅葉時の絶景いふばかりなし、夏より秋にかけて來遊する客最も多し、大阪公園の一なり。

梅田停車場 瀧車は將に發せんとす、東せんか、西せんか、願くは東して先づ舊王城の地に至らん、

吹田 梅田停車場を發して瀧車東に向ふ、第一の停車場なり、有名なる朝日ビールの製造所あり、此近傍の山に桃樹多し、花時の遊覽亦た可なり、

茨木 吹田の次の停車場にして、茨木町は戸口多く、郡役所、警察、中學校等あり、片桐且元が苦忠寸功なく、悄然として大阪城を退き、其領分なるを以て此に居れり、
高槻 茨木の次の停車場なり、高槻町は永井氏の舊領地にして、城趾尙ほ存せり、

驛の北に芥川といへる小市街あり、櫻井驛は此停車場を降りて赴くも可なり、

山崎 高槻の次の停車場にして、天王山は此地に在り、秀吉光秀が天下分け目の大戦争を試みし所にして、近くは元治甲子の役、長州陣所の在りし山なり、真木和泉

守等此に自殺す、寶寺は其山腹に在り、離宮八幡は其麓に在り、このあたりの名所は京都の條に譲る可し、

向日町 山崎の次の停車場にして、向日神社、眞經寺等の名所あり、同じく京都の條に譲る、この次は則ち京都にして、列車は四條停車場に停る、

○京都

王畿を日本の伊太利なりとすれば、京都は日本の羅馬なり、山城國の中央平安城、山河襟帶自然の城廓を爲す、初め桓武天皇の平安京を經營せしめ、玉ふや、南北一千七百五十三丈、東西一千五百丈、大内裏其北位に在りて、南面し、皇宮百司其中に在り、街衢の東西に通するもの三十八、之を九坊に分ち、一條より九條に至り、南北に通するもの三十二、朱雀大路を中にして、左右を分ち、左を左京といひ、右を右京といふ、朱雀大路を正面に羅城門ありて、之を王城の正門とし、街衢整然、規模宏大、今日の比にあらずしが、後三百年にして、右京は荒廢し、勢東北に集り、白川一帯には、宮殿、巨刹相連なり、白川、鳥羽の兩朝一時其盛なるを見、一條以北も此頃までは、巨室、勢家の住地にて、足利氏、覇府を室町に開くに及びては、諸將の邸其間に充ち、京中第一と呼ばれしが、應仁の亂に至り、非常の荒殘を極め、殆んど京都をして昔ながらの志賀の都たらしめんとしたりしを、幸にして、天正十八年、豊臣秀吉、京都の封疆を定め、東は京極、西は朱雀、及紙屋川、北は紫野、南は九條までと定めしより、舊觀漸く維持せられ、其後に至り、七條以南は田圃に化し、が依然王城の地として存在し、明治維新に至り、東京遷都の事ありしが、依然京都の名を存じ、京極、以東、鴨川を越て、幾多繁華の市街を造り、中古に所謂京、白川の地も、市部に編入せらるゝに至りて、再び往日の盛を見んとす

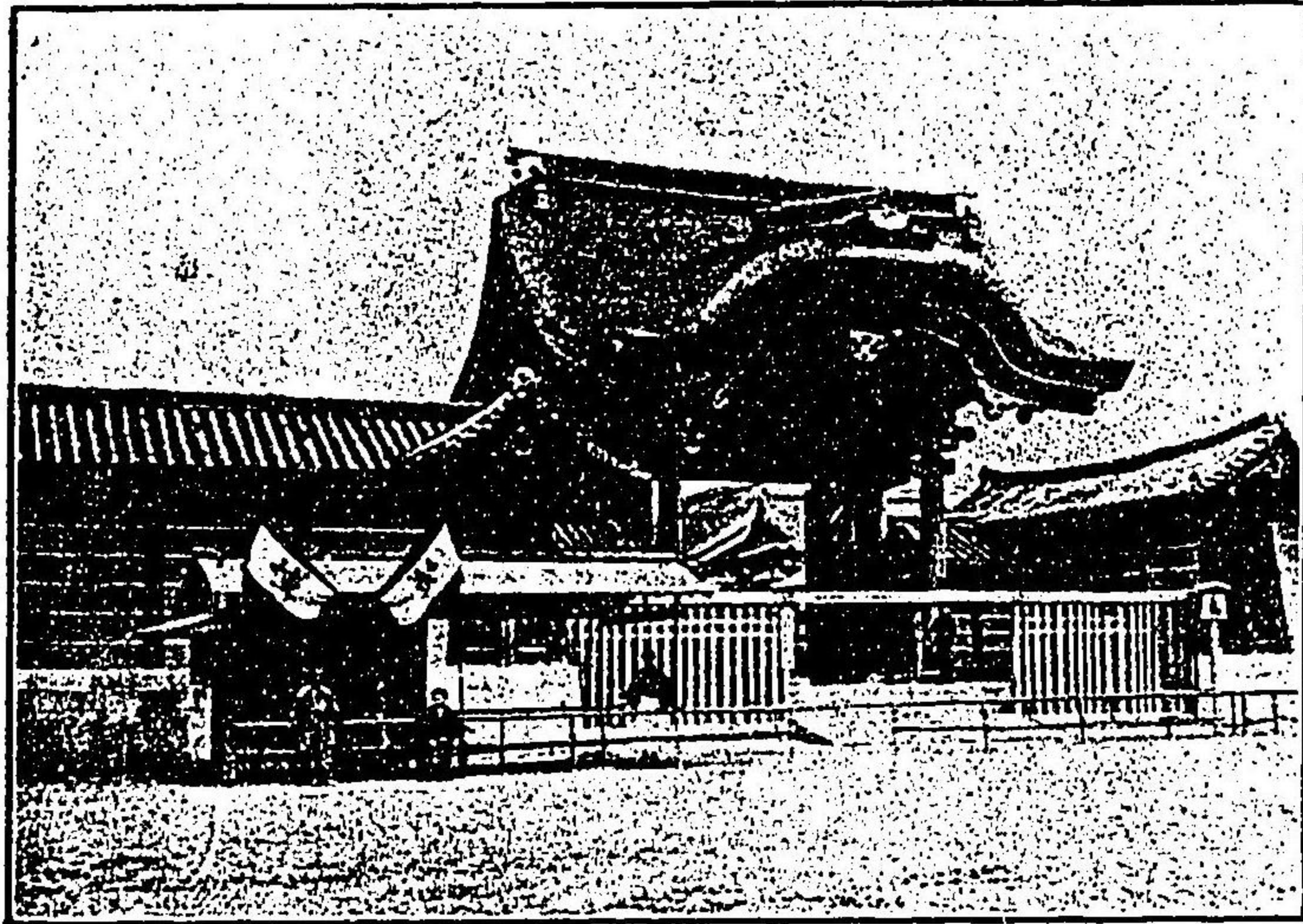
京都の歴史は吾人が喋々を要せざる所にして、史家ならざるも、遍ねく之を知る、天智天皇以來の大皇帝たる桓武天皇の御偉業は實に此地に於て行はれたるものなり、藤原氏の全盛時代、王朝文學の錦とみだれ花と句ひしも、此都にての事なり、けり、藤時平、菅相公の黨、派争ひも、此地にてなり、藤原氏の權勢衰えて、院政一時盛なりしは、幸か不幸か、却て武家跳梁の媒となり、源平兩家の争は、端無く、花の都の平安城をして、修羅鬪争の巷と爲さしめ、依然皇位は此地に存在せしも、天下の政權は移つて關東に轉じにき、後鳥羽院の御思召儘ならずして、後醍醐天皇の建武の中興、暫時にして、夢と消え、政權亦た武門に移りしも、其政治の棟梁たる足利將軍は、室町に覇府を構えしが、是れ亦た有名無實となり、應仁の亂の大荒廢より、信長、秀吉の勃興も皆

此地を以て運動の中心と爲し、なり、故に名勝舊跡の夥たゞしきこと京都附近に若くもの無く、殊に亞細亞の一大宗教たる佛教の本山多く此地に在ることなれば名山巨刹に藏する所の寶物少なからずして、山水の明媚相映じ、鬱然として美術工藝の淵藪となれり、文人墨客多く此に居り、内外觀光の客遊履を此地に入るゝもの日に多きを加ふ、

京都御所 車駕東京に幸せしまで、天子のまはしませし所にして、外郭は東は寺町より西は烏丸まで南は丸太町より北は今出川に至り、面積二十五萬坪あり、其中央の内郭を禁闕と爲す、禁闕の正門は南門にして、別に唐門、日之御門、公家門あり、紫宸殿は更に宮垣を遶らし、承明、日花、月花の三門より、其階下に通ず、殿前に左近櫻あり、右近橘あり、清涼殿、清所常御殿其他の宮殿連比して森嚴壯重なり、

御苑地 御所の外郭にして維新以前は諸親王を始め、縉紳の邸第あり、俗に公卿屋敷と唱へし所なりしが明治十一年夏之を開いて御苑地と爲す、仙洞御所、久邇宮邸、桂宮邸、主殿寮出張所、京都博覽會場、京都測候所、白雲神社、宗像神社等皆な苑内に在り、

仙洞御所 往時上皇の宮居し玉ひし所にして、昔日の宮殿は大半廢墟と爲りた



所 御 舊



殿 極 大

れとも、林泉幽邃にして雅趣多し、

平安神宮　官幣大社にして祭神は桓武天皇、明治二十八年の建立なり、上京區岡崎町に在り、吉田黒谷聖護院の森其後を掩ひ、疏水運河は前を擁して流る境内一萬六百坪、本殿は南面にて檜皮葺なり、庭園には瀑布あり、池沿あり、花卉木石の布置、其妙趣を盡す、拜殿は去二十八年第四回勸業博覽會開設の際、紀念殿として模造せられたる大極殿なり、

大極殿　平安神宮の拜殿にして、大極殿に模擬し造營したるものなり、世之を紀念殿といふ、平安奠都の昔、桓武天皇が最も心をこめ玉ひし大極殿、金碧燦爛丹朱的燦の壯觀は之を歴史畫の上に見るより外なしと思ひしに、二十八年の奠都紀念祭協賛會が之を模擬して奉祝せんと企て、明治二十六年十一月を以て起工し、二十八年二月二十五日に至り竣功し、此美觀を探勝の客に見するに至りしに、美術上、歴史上、著者は京都人士に向て之を多とせざるを得ず、

三條大橋　天正十八年豊太閤小田原北條征伐の時、初めて之を架設せりと、なん欄干の擬寶珠はいづれも紫銅を用ひて、其數十八、今なほ之を襲用せり、昔の東海道筋にして、現に京都府元標の在る所なり、京都三大橋の一なり、

京都の精神ともいふべき古王城新神宮、京都に來遊するもの、第一に來拜すべく來觀すべきものは以上の如し、之より各部に就て所謂名所舊跡の案内を爲さざる可からず、

上京之部

矢田地藏 寺町三條北に在り、淨土宗にて金剛寺といふ本尊地藏は滿米上人の作なり、本堂の前に夕貌藥師を安置す、

天性寺 矢田地藏の北に在り、中將姫作の織姫觀音及び中將姫自作の像を安す、本能寺 天性寺の北に在り、日蓮宗にして開基は日像上人なり、初め六角の南浦

小路の東に在り、今其處を元本能寺町といふ、織田信長が明智光秀に弑せられたる地なり、寺内に織田信長の塔あり、又什寶に日蓮上人の題目曼陀羅あり、

妙滿寺 寺町二條南に在り、日蓮宗にして開基は日什上人なり、寺内に導成寺の鐘あり、安珍清姫の故事を傳ふ、此鐘元は紀州牟婁郡導成寺に在りしを、天正年中當寺に移せりとなり、

天主教會堂 河原町三條北に在り、洋風の建築宏壯、

木屋町 二條以南三條以北一帯の地をいふ、旅店席貸多く樓々鴨川に臨み、東山

對す、前は高瀬川の流あり、瀟洒の巷之に過くるはなし、

高瀬川 加茂川の分流にして、中世内裏修築の時材石運搬の爲め角倉了意が開鑿せし所の小運河なり、二條橋下より分れて木屋町筋を南下し、竹田に至りて再び加茂川に合し、又分れて伏見の西を流れ淀川に入る、其通船を高瀬舟といふ、伏見より京に達するには流水淺くして且つ急なるを以て、綱を船体に結び數人の舟夫陸上より之を曳く、其音調奇異、之を高瀬の曳船といふ、

本誓寺 高田御坊といふ、眞宗專修寺派の別院なり、河原町二條上る處に在り、堂は豐太閤の北政所高臺院殿の化粧殿にして、繪畫は狩野永徳の筆に成る、

革堂 寺町通竹屋町に在り、本尊十一面觀音は開祖行圓上人か靈夢の告により加茂の槻木を以て刻む所なり、上人常に革の服を着せしより、都人呼て革上人となし、此堂にも革堂の名を残せるなり、

下御靈社 革堂の北に在り、祭神は早良親王、伊豫親王、藤原吉子、文屋宮田麿、藤原廣嗣、吉備眞備、火雷神等にして、貞觀五年始めて祭祀せられたり、同時に建てられたる御靈社三個あり、上御靈社、中御靈社、下御靈社といふ、同一神體なり、中御靈社は寺町通廣小路に在りしが、明治の初年絶滅せり、

梨木神社 京都御所の東、寺町廣小路に在り、別格官幣社にして、贈右大臣三條實萬卿を祀れり。

盧山寺 天臺律、淨土、真言四宗兼帯にて、本尊藥師佛は聖德太子の作、開基は慈惠大師、中興は住心上人なり、什寶に法然上人自筆の撰擇集親鸞上人自筆の四句の文等あり。

清淨華院 淨土宗、鎮西派四大寺の一

本禪寺 日蓮宗、開基日陣上人、應永十三年の創立。

本満寺 日蓮宗、開基日秀上人、祖師堂に安する日蓮上人像は丹波芹生村より堀出したるもの。

佛陀寺 淨土宗、西山派、朱雀天皇御落飾の寺

十念寺 淨土宗、西山派、什寶に一休和尚自筆の佛鬼軍圖一卷及足利將軍家諸士念佛講の人名帳を藏せり

阿彌陀寺 淨土宗、織田信忠の憤及ひ本能寺に於て忠死の臣數名の墓あり、方丈に信長信忠の坐像を安せり。

天寧寺 寺町鞍馬口に在り、元和年中板倉勝重の建立にして、開基は祥山吉和尚

曹洞宗、京都三ツ寺の一なり。

上善寺 淨土宗、春谷盛信上人開基、本尊は行基作の阿彌陀佛、當寺に藏する善光寺如來畫影は化人の筆なりと傳へ、後柏原天皇御覽ありて、勅願所不斷念佛道場の宣旨を賜ふ。

閑臥庵 禪宗、境内に略櫻あり。

上御靈社 鞍馬に在り、下御靈社の條を參看すへし。

五所八幡上御靈の境内に在り、豊後の大分、肥前の千栗、肥後の藤崎、薩摩の新田、大隅の正八幡、以上之を五所の別宮と號す、遠く隔つるを以て、後柏原帝勅して此地に遷し玉ふ。

相國寺 今出川の北烏丸の東に在り、臨濟宗五山の第二にして、萬年山、相國、承天禪寺と號す、永徳三年、足利義滿勅を奉じて建立せり、法堂の無畏堂は豊臣秀頼の建立する所なり、本尊は釋迦佛にして、夢想國師の開基なり、方丈は後水尾天皇の廟殿なりしが、天明八年炎上し、文化四年其舊形を變せずして再建す、二層塔は承應二年、後水尾天皇の御旨を奉じ建立する所にして、其御念持佛大日如來并に御齒髮を納む、故に御齒髮塔といへり、寺域二萬六千坪、老松綠深ふして、境内禪味に富む、足利家

の塔所なり、義滿以下累代の牌を安せり、又東征戦亡の碑あり、戊辰の役に於ける薩藩五百二十四名の姓名を碑背に勒す、西郷南州の筆蹟なり、法然水、定家卿墓等の舊跡あり、

同志社 相國寺門前に在り、明治八年新島襄が基督教の傳道、教育擴張の目的を以て米國傳道會社保護の下に於て創立する所なり、公會堂、豫備學校、新榮館、久留久神學校、普通學校、同志社大會、女學校、看護婦學校、病院等を設け、専ら外教の布教に盡力せり、

妙顯寺 寺の内小河の上に在り、日蓮宗、開基は日像上人、後醍醐天皇の勅願所たりしが、天正年中今の地に移れり、此寺は洛陽に於て日蓮宗弘通最初の寺なり、什寶中黄金の釋迦佛立像、長三寸、蜀紅錦の曼羅陀及經一丸の曼陀羅は日蓮上人の揮毫なり、

妙覺寺 新町頭に在り、日蓮宗、日實上人の開基なり、昔日像上人が日蓮宗を京都に弘通するや、小野妙覺といふ者、宿を施し、此に宗旨を信仰し、居宅を以て寺と爲せり、妙覺寺の名あり、其地は衣棚二條南に在りしが、天正二十一年今の地に移りしなり、祖師堂には日蓮日朗日像三師の像を安ず、日蓮像の面貌は自作にして餘は日

像の作にて、林中に骨舍利を藏むといふ、十羅刹堂は飛禪匠の所造にて古へ博多盧山寺の一堂なりしといふ、香芳石塔は日蓮上人の所作なり、上人叡山に在りし時、横川香芳谷花光坊にて作り中に一穴を彫て一部一卷自書之法華經を收め、法華弘通を祈れり、久しく山門に在りしが後に當寺に移れり、收むる所の經長三寸許、狩野古法眼以下累代の墓は皆此寺に在り

本法寺 妙覺寺の西南に在り、日蓮宗、開基は日親上人、方丈の庭に日親說法石あり、

天應寺 天台眞言禪の兼學にして、妙覺寺の西に在り、悲田院の跡なりといふ、興聖寺 小川の北天神の辻に在り、開基は虛應和尚なり、此寺に安する達磨像は藤堂高虎の寄附にして、顔威妙相、世に比類なしと稱す、

瑞光院 堀川頭に在り、淺野幸長弟宅の舊趾にして、淺野内匠頭家臣の塔一基、大石良雄以下四十六人の姓名を刻すあり、什物に大石良雄の畫像、辭世の詩歌及び書翰等あり、

七野社 大宮通の北端に在り、染殿皇后の祈願に依り、奈良の春日明神を勧請したるものにして、爾后伊勢、石清水、稻荷、加茂、松尾、平野の六神を合祀し、紫野、蓮台野、北

野平野、内野、神明野、上野の地社頭なりしを以て七野社の名あり、

報恩寺 小河の西上立賣の北に在り、知恩院末寺なり、明應中立の初めに天台淨土兩宗兼學にて法恩寺と稱せしが後淨土宗に改めたり、

妙蓮寺 報恩寺の北に在り、日蓮宗開基日像上人、洛陽に於て當宗寺院最初の道場なり、日像上人初め往來の衢に立て宗義を説く、爰に西洞院五條北に柳屋といふ酒屋あり、法を聽きて感信し宅の後園に庵室を作り上人を住ましむ、世人之を柳寺といふ、法義漸く流布し寺院を増益し改めて妙法蓮華寺と號せり、後世大宮通四條南に移り、妙蓮寺と改む、柳寺の舊縁を取り、山號を卯木山といふ、後又再轉して今の地に移れり、什物に日蓮上人筆の法華曼陀羅あり、祈雨の本尊と稱す、

白峰神社 官弊中社にして今出川飛鳥井町に在り、崇徳、淳仁の兩帝を祀れり、崇徳天皇の靈は明治元年九月此地に社殿を新營して讚岐國より遷坐し奉り、同六年十月に至り淳仁天皇淡路廢帝を合祀し奉る、

本隆寺 智惠光院五辻の北に在り、開基は日眞上人なり、祖師堂の前に日像上人筆の法華題目の石塔あり、

西陣 京都北西部落の總稱にして、堀川以西一條以北の地をいふ、應仁の亂、山名

宗全の陣所たりしより起りし名なり、日本第一の織物産地、工藝の淵藪、富國の根源、

千本閻魔堂 引接寺といふ、千本通の北端に在る寺の本尊にして、本尊は定朝作の閻魔大王なり、大念佛は文永年中如輪上人の始むる所にして、壬生狂言と一對の觀あり、

釋迦堂 閻魔堂の西、大報恩寺といふ寺、

慈眼寺 曹洞宗京都三ヶ寺の一、慶長年中佐々成政の建立、大雲永瑞和尚の開基なり、出水七本松の東に在り、

淨福寺 一條通千本に在り、淨土宗にて、本尊阿彌陀佛は弘法の作、

清和院 七本松通一條の地に在り、感應寺といふ、本尊二体、一は弘法作の觀音、一は一演作の地藏、

轉法輪寺 淨土宗にて一條の西七本松に在り、櫻町帝の御宇宮中より命ありて建立、

立本寺 七本松通、正親町の西に在り、日蓮宗開基は日像上人、祖師堂に安置する日蓮上人の像を冑の御影といふ、縁起ある靈像なり、庫裏に藏むる寶塔は天竺傳來

と稱して有名なり、

五番町 遊廓なり、

内野 上古大内裏の時、皇城の内なるを以て名づく、其實は大内野なり、一番町より七番町まであり、

晴明神社 葭屋町一條上る處に在り、有名なる陰陽博士阿部晴明を祭る、

一條戻橋 一條通堀川に架する橋にて、渡邊綱の鬼神に遭ひしといふ古來有名の橋なり、

護玉神社 烏丸通中長者町に在り、別格官幣社、和氣清麿を祭る、此社は當初護法善明神と稱し、高雄神護寺に屬せしが、維新以後社格及神號を賜はりたり、

二條離宮 即ち二條城なり、永祿十二年織田信長の築く所、明智光秀之を燒きしが、慶長七年徳川氏再び之を築けり、維新後は京都府廳となりしを明治九年宮内省附屬と爲し、二條離宮と稱せらる、規模宏大ならざるも莊麗無双、

神泉苑 二條離宮の南に在り、桓武以來天子御遊の仙地なりしが、荒廢に歸して舊蹟絶滅せんとしたるを、元和年中筑前の僧覺雅なるもの官に請ふて其一部を修補し、眞言宗の靈場を開けり、今の神泉苑即ち是なり、池あり之を法成就池といふ、池

中に三島あり一は善女龍王を祭り、二は二重塔を築き、一は辨財天を祭れり、小野小町和歌を咏じて雨を祈り、靜御前舞を奏して源豫州にねもひ初められたる、皆此苑にての出來事なり、

下京之部

瑞泉寺 三條小橋東に在り、開基は三空桂叔和尚にして、豊臣秀次の母堂瑞龍院が秀次追福の爲建立せし所なり、

畜生塚 瑞泉寺境内本堂の前に在り、文祿年間秀次高野山に於て自殺するや、秀吉其首を三條河原に梟け、其前にて幼子並に三十四人の侍女を斬りて同穴に埋めたるもの、之を惡道塚又は畜生塚といふ、側に石を建てて侍女の法名を刻めり、

先斗町 鴨河と高瀬川に挟まれ、三條南一丁目より四條に通ずる遊廓なり、寶曆年中川端夷川に吉祥院といへる寺あり、其境内に十數軒の茶店を設けて茶汲女を置き、陰然遊廓の姿をなせしが、一旦嚴禁の後寛政十二年十二月遊廓を免許せられ島原より茶店一軒に遊女二名宛を移し、二條新地と稱せり、二條新地は第三高等中學校設置の際立退を命せられ、今は無し、其後天保十三年官命に依り島原に移り、嘉永四年十二月十二日許されて再び遊廓となり、鴨河西岸に出店を設け、遊女三分の

一を移したるは即ち此地なり、

新京極 寺町の東二十歩許三條通より四條通まで南北に通じたる一帯の地に
して、横村正直府尹たりし明治初年開通せし所なり、當時一坪の地價些に五十錢に
て買収し後ち價格を定め人民に拂下げ特に奉還士族には半額を以て拂下げたり、
其後種々計畫する所ありて終に繁華の地となれり、現今は一坪の地價二百圓に上
るといふ、東京の淺草、大坂の千日前と同じく京都第一熱鬧の地なり、百の貨物あつ
まり、諸の興行來り、飲食店備はり、觀光客群がる、塵の交はる人は、いつそ此の如き地
をアラ／＼々歩行くも妙なるべし、

誓願寺 新京極に在り、淨土宗西山派なり、本尊阿彌陀佛は天智帝の勅願にて作
る所といふ、春日明神の作など、言傳ふ、

誠心院 俗に和泉式部といふ

蛸薬師 新京極圓福寺境内に在り、本尊は石彫の薬師にて傳教大師の作なりと
いふ、養和年間叡山北谷より二條室町に遷せしが、後又今の地に移れり、蛸薬師の縁
起はむかし寺内の僧に老母に仕へて至孝なるものあり、老母病て蛸を食せんこと
を求む、僧已むを得ず、蛸を求め之を箱にして持ち來らしめ、母に薦めんとして箱を

開けば、蛸にあらすして薬師なり、而して母の病は藥を用ゐずして直ちに癒はたり
之より蛸薬師と崇むといふ、

安養寺 蛸薬師の南に在り、惠心僧都の妹安養尼の建立にて淨土宗西山派なり
本尊阿彌陀佛は春日の作にして華臺八葉の蓮花を倒まにす、是れ即ち女人胸中の
蓮華は倒まに在り、之を表示して女人引接の相を現はし玉ふといふ、難有話、寺僧に
よりにて、説かるゝなり、

錦天神 新京極に在りて熱鬧の中央なれば賽人市を爲す、むかしは時宗の一寺
院なりしを維新後神佛分離の爲め佛寺の所屬を脱したり、古は河原左大臣を祭り
しが、中古より菅公を勸請せり、

金蓮寺 新京極に在り、時宗、四條道場といふ、當寺に安する親鸞の稻荷は名佛師
運慶の作なり、鳥部山に在りしを中古こゝに移せしと、

大雲院 寺町四條南に在り、淨土宗西山派、開基は貞安上人、織田信忠追福の爲め
之を建立せしものなる故、信忠の回向塔あり、大雲院は信忠の法號なり、寺内に石川
五右衛門の墓あり、

淨教寺 大雲院の南に在り、淨土宗鎮西派、始め東山に在り、燈籠臺と號し、平重盛

の草創なり、後世東洞院高辻南に移し、又今の地に移せり、佛壇内外の畫圖は惠心僧都の筆、

聖光寺 寺町綾小路南に在り、開基は良阿上人

五條大橋 今の五條通は古の六條坊門にして、今の松原通は、古の五條通なり、五條大橋は昔は今の松原橋の處に架したりしと、豊太閤大佛建立の時今の處に移してより、六條坊門を五條橋通といひしが、終に五條通といふに至れり、欄干には紫銅の擬寶珠左右に十六本、牛若辨慶の話童話に傳はる、

七條新地 五條の南、高瀬川の兩岸に沿ふ遊廓なり、寛政二年十二月島原より出店せしは今の地にあらず、七條二の宮町、三の宮町にして、當時大に繁昌せしが、天保十三年十二月卅日島原へ立退を命せられ、嘉永四年十二月再び遊廓となるも、往時の盛大を見ず、是に於て河内屋、尾張屋、笹鶴屋等同業者に卒先し、女藝者八十名、娼妓七十名を率ひて高瀬五條下る東岸岩瀧町、波止土濃町、八ッ橋町、聖眞寺町へ移轉し、尙ほ宮川町へ出店を設けたり、これより續々此地に移りて、其地五條に接近せるも、猶ほ七條新地と稱し、西岸平居町、南京極町は之を橋下と呼び、全然區域を異にせしが、明治十八年八月合併して七條新地を總稱せり、

御影堂 新善光寺といふ、安する所の本尊信州善光寺本尊模形なるか故なり、其

本尊今は寺家善光院に安せり、御影堂と稱す、初め眞言宗なりしを時宗に改めしは一逼上人の徒弟王阿上人當時の住寺に因みあるを以て寺内に寓居せしか、王阿の智徳兼備なりし爲め寺家歸敬して改宗したるなりと、又當寺の徒か扇を折て業とすることあり、これは平教盛の室尼となりてこの寺に住し、之を始めたりといふ院本源平咲分躑躅の扇屋熊谷はこれを作りしものなり、

本覺寺 御影堂の西に在り、開基は玉翁上人本尊を如法佛と號す、佛工安阿彌の作、

來迎堂 淨土宗なり、本覺寺の南に在り、本尊阿彌陀佛は、崇峻天皇の御宇信州の人本田義助善光寺の本尊を模して新に鑄造せんとする事畏くも天聽に達し、百濟の濟明王へ勅書を賜ひ、異域に渡航し、閻浮檀金七斤を得て歸朝し、善光寺の堂前に於て鑄造したる靈佛なりといふ、すこしく時代が妙なれとも、口碑のまゝをかくならん、

逆光寺 來迎堂の南に在り、淨土宗、開基は江州西教寺の開山信盛上人なり、始め高野山の萱堂を移し、萱堂と號せり、中興は玉嬰和尚なり、本尊阿彌陀佛は安阿彌の

作にて、負別如來といふ、地藏堂は堂の東に在り、弘法大師の石地藏を安す、此所は平家より足利氏初世に至るまでの刑場なり、即ち六條河原といふ是なり、

長講堂 逆光寺の南に在り、淨土宗、後白河法皇の創始にて近くは御菩提の爲め

遠くは十方群生の爲め、叡聞に觸るゝものは尊卑を論せず亡魂の名帖を藏め、御回

向あらんとの御願にての建立なり、堂の西南に安するを花方觀音といふ、平家物語

にいふ花方御所の持尊なり、又渡流觀音ともいふ縁起あり、

白毫寺 逆光寺の前に在り、律宗、太子堂と稱し、本尊は聖德太子自作の像なり、當

時は始め今の知恩院の總門内に在り、同院開境の際此地に移れり、此邊は河原左大

臣の邸なりし有名な六條河原院の在りし所なりといふ、

金光寺 逆光寺の東南に在り、時宗、開基は空也上人、むかし大内裏の時諸品を商

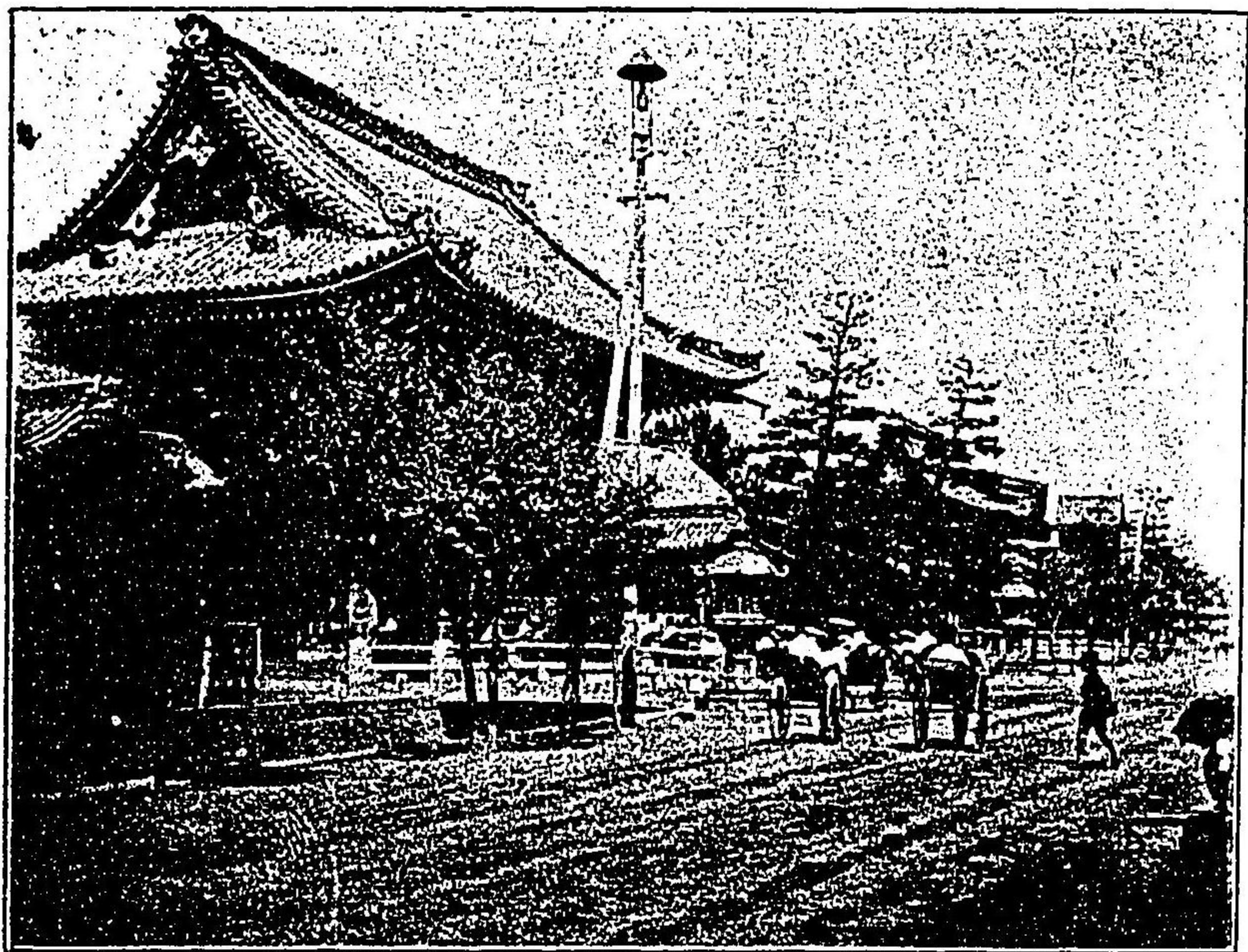
ふ大市場なりしとの因を以て市中山といふ山號殘れり

市姫神社 同所に鎮座す、祭神は筑前の宗像神社に同じ、

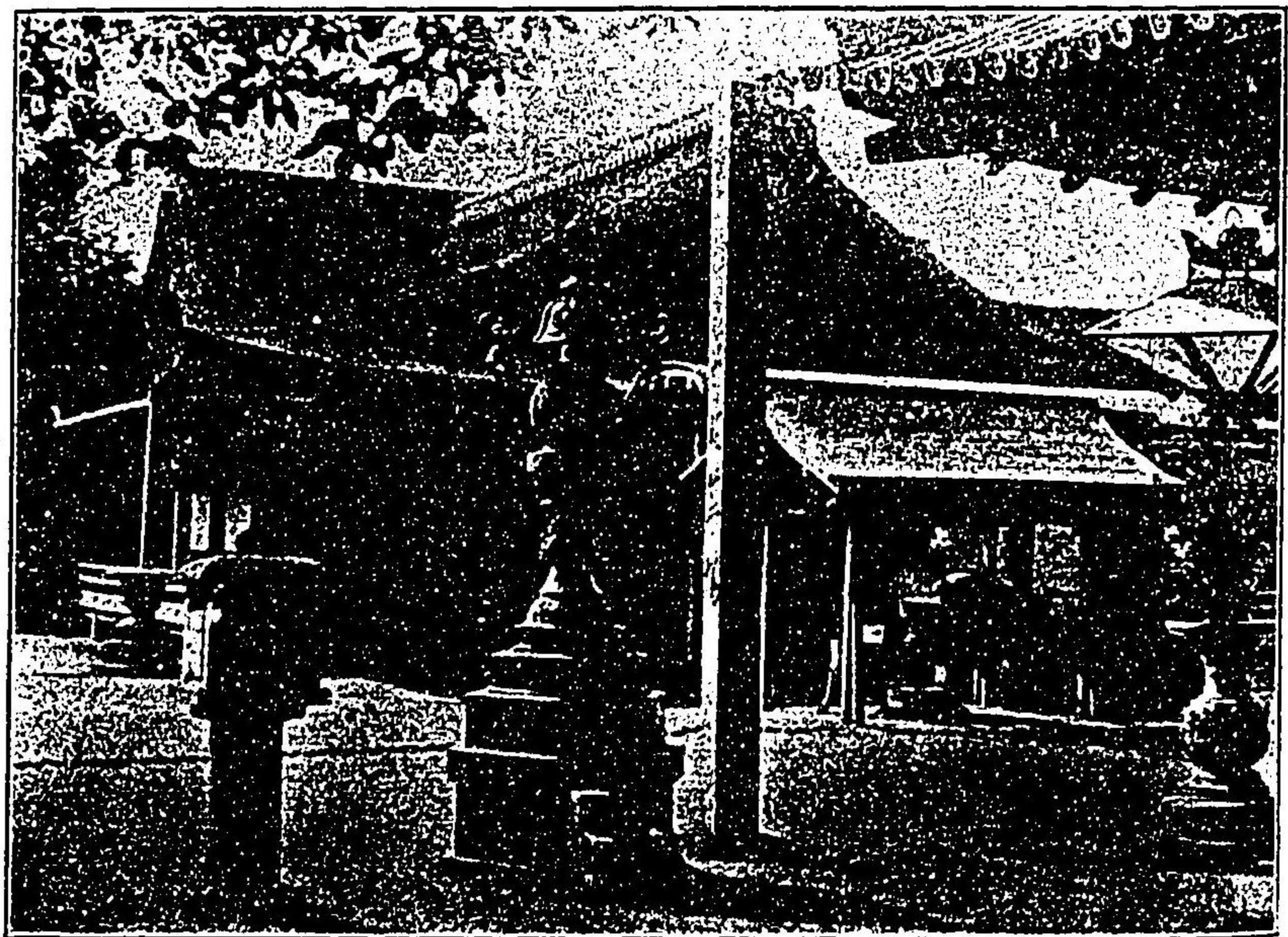
東本願寺 東六條に在り、眞宗大谷派の大本山にして、西六條の本派本願寺に對

し世に之を東本願寺と稱するなり、山緒沿革は西本願寺の條下を參看すへし、當時

草創は宗祖見眞大師より十一世顯如上人文祿元年十一月に遷化せらるゝや、嫡子



東 本 願 寺



東 寺

教如上人其職を嗣ぐ、同三年之を辭して舍弟准如上人を以て之に代らしむ、而して後園に坊を造りて退隱す、門弟之を敬して御裏と稱す、後慶長七年徳川將軍家康の命に依り、六町四方の地を賜ひ、新に當寺を今の地に建立し、上人をして再び開山十二世の血脉を相續せしむ、之を東本願寺といふ、二代將軍秀忠更に増地を賜ふ、即ち枳穀邸是なり、堂宇殿閣の莊嚴餘寺に超逸す、しかも火災に罹ることまた當寺の如く多きはあるまじと聞ゆ、天明八年、文政六年、安政五年いづれも火災の爲めに焼失し、元治元年甲子の後には本堂枳穀邸を併せて全焼す、しかも海内信徒偈仰の力にて、隨つて焼失すれば隨つて新築し、其都度一層の壯觀を加ふ、今の兩堂再建工事は海の内外に涉りて有名なる大建築なり、京都第一は申すに及ばず、恐らくは日本第一なるべし、特に當時の噴水工事の如きは琵琶湖の疏水を利用したるものにして十數萬圓の工費を要せしといふ、大師堂の本尊親鸞上人の像は自作にして初め上州麻橋の妙安寺に安せしを家康命して當寺に移さしめしものなり、枳穀邸は東殿と稱し、河原院の舊跡にして池水は高瀬川より流れ、臨地殿の庭は小堀出雲守の好匠に出つるといふ、風趣幽邃、西本願寺の滴翠園と共に有名なり、

七條道場　　黃臺山金光寺といふ、此地は佛工定朝が宅なりしを、一遍上人に寄附

して寺となしたるものなり、

東寺 西八條に在り、眞言宗、八幡山教平護國寺といふ、開祖は弘法大師なり、始め桓武帝羅城門の東西に伽藍を建立し、東寺西寺といふ、嵯峨天皇の御宇、西寺は之を南都の僧守敏に賜ひ、東寺は之を弘法大師に賜ふ、今の地即ち是なりと、又云ふ、遷都の初め大宮の東西に玄蕃寮を置く、弘仁以來東鴻臚を東寺となして、弘法大師に賜ひ、西鴻臚を西寺となして、守敏に賜ふと、鴻臚館とは外國より來朝する賓客を止住し、饗應せしむる所、玄蕃寮は其司官の勤仕する殿舎なり、寺域凡三萬餘坪、門に南大門、樓門、蓮華門、西慶賀門、東四足門、北等あり、南大門を入りて、金堂、講堂、食堂あり、食堂に安置する丈六の千手觀音開眼の日には、宇多法皇の行幸あり、又同所に安する毘沙門天は、元羅城門の樓上に在りしものなりといふ、有名なる五重の塔は、金堂の東南に在り、塔の北に瓢箪池あり、燕子花の名所なり、西院は大師堂といふ、法眼康勝作の弘法大師像を安置す、毎月二十一日の縁日には、世に之を東寺の弘法といひ、遠近より參詣するもの實に無數なり、

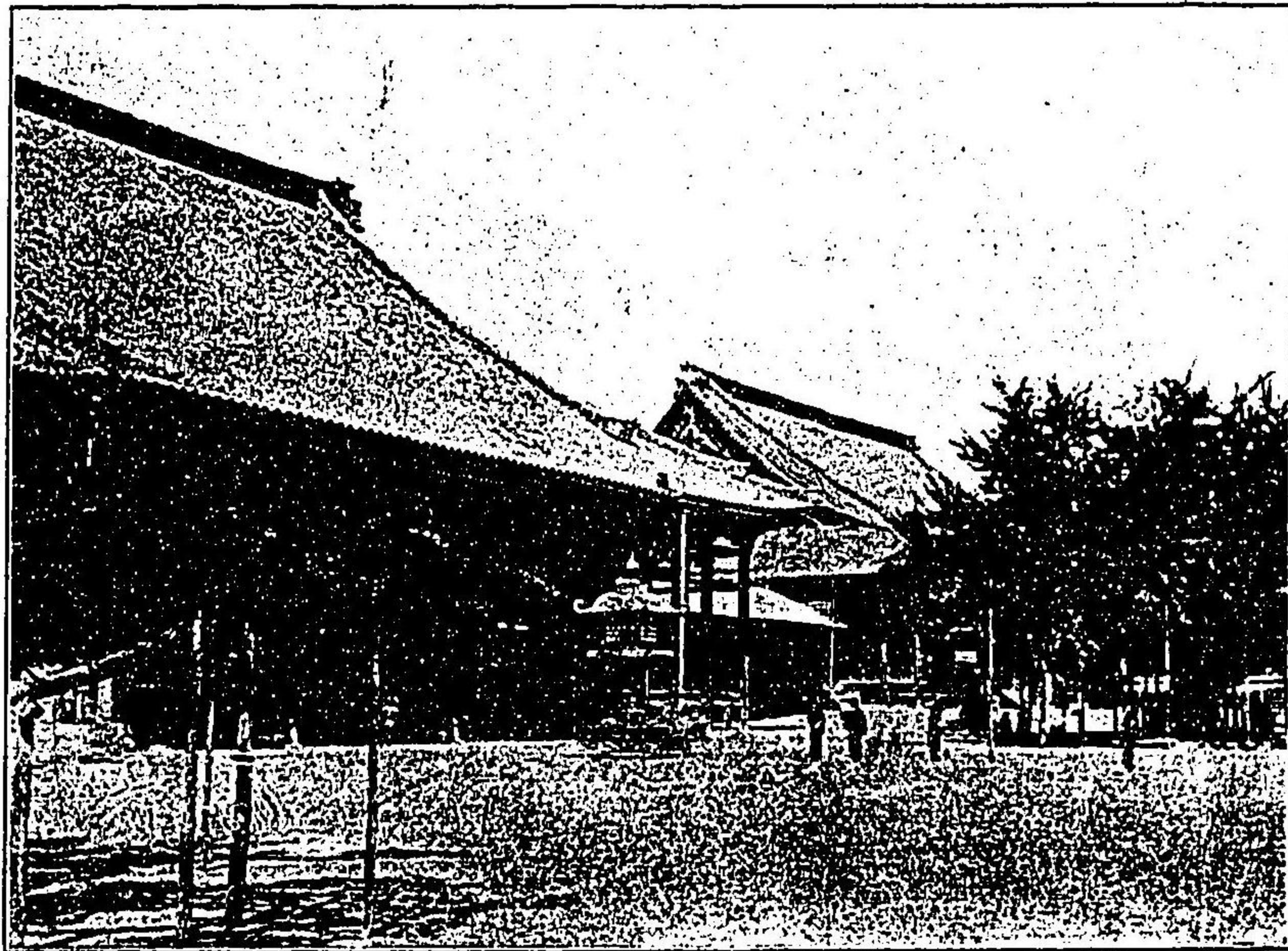
羅城門の舊跡 東寺の内にありといふは、非なり、千本通四塚に在り、大内裏の南面にして、外郭の總門なり、近頃大佛の崩門を茲に移して、其舊趾を表せり、

六孫王社 清和源氏の祖神にして、六孫王經基を祭れり、東路より西北數町、維新以前神佛混合の際は、大通寺照心院に屬せり、此地は經基邸宅の地にして、薨後靈廟を建て、六孫王權現と崇めしが、後鎌倉右大臣實朝の後室三位禪尼大檀越と爲り、眞空律師を請して開山とし、戒律三論眞言兼學の梵刹となしたり、

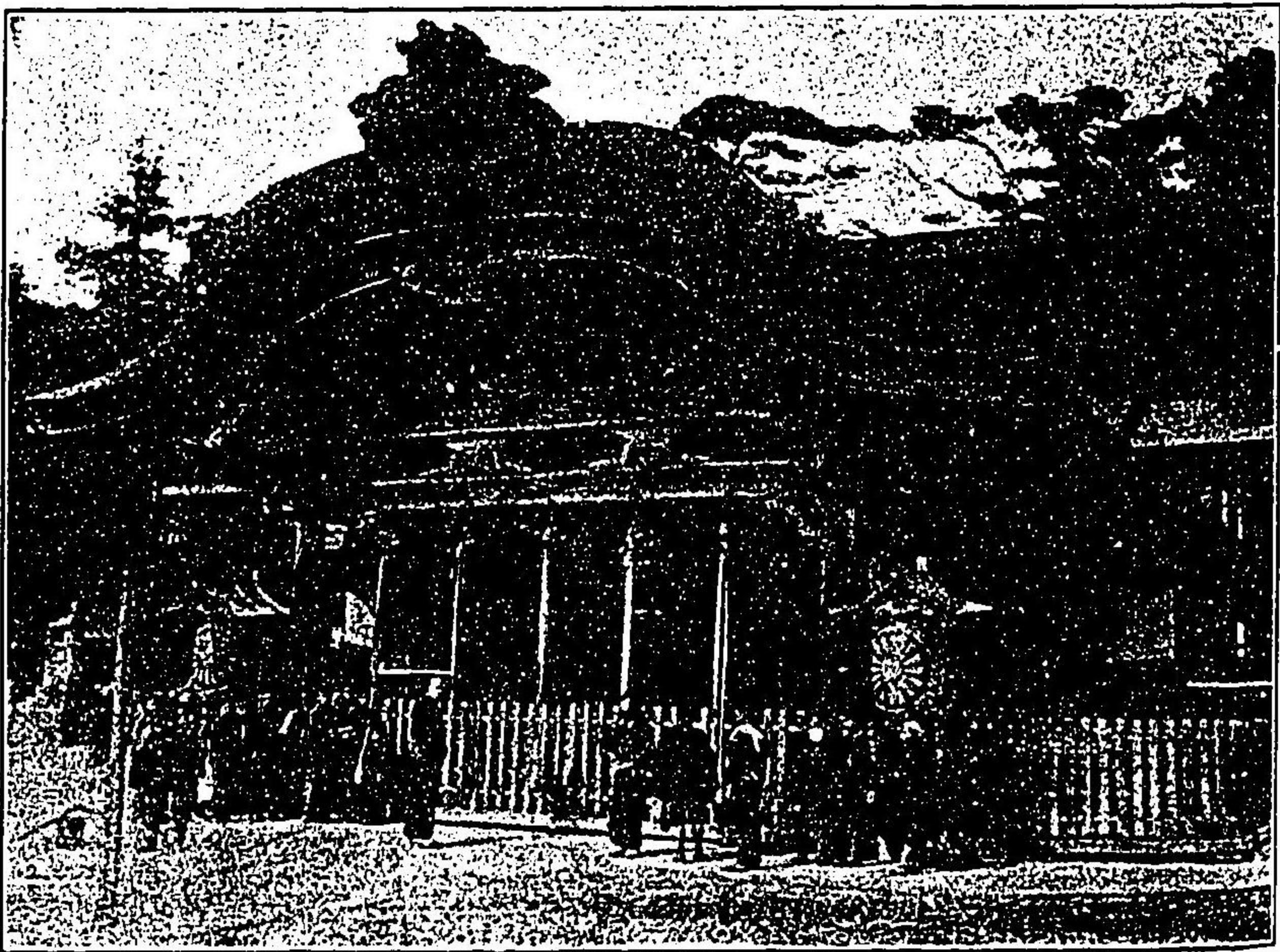
島原 日本最初の遊廓なり、四畔郊野にして、朱雀野と號す、上古は鴻臚館の地なり、上の町、中の町、中堂寺町、太夫町、揚屋町、下の町の六町あり、大門を設けて一廓を成す、此地を遊廓としたる起因は、足利義滿の將軍たりし、應永年間浪士原三郎左衛門(上の町西南角桔梗屋の祖林又一郎、大阪新町扇屋の祖)の願に依て、九條村に於て傾城町を免許せられ、之を九條の里と呼び、又た西新屋敷と稱す、是れ實に遊廓の嚆矢なり、後ち其現況を目撃して、大に取締の必用を感じ、大永八年六月二日、目附役竹内新二郎を以て、廓中取締傾城別當に補任し、以來廓内の面目を一洗す、爰に百九十餘年を経て、天正十七年五月北は夷川、南は押小路、西は柳馬場、東は寺町を限りて、替地を賜はり、移轉後これを柳町と唱へたり、此地王城に接近せるを以て、慶長七年十一月東は室町、西は西洞院、南は魚棚、北は五條を限り、移轉を命せらる、之を六條新町と稱す、こゝに在ること數十年にして、徳川三代將軍家光市内に遊廓の存するは、武道

廢類の因なりとし、寛永十七年七月十二日葛野郡朱雀野村に於て新地所一萬三千四百五十九坪五合を下賜し、直ちに移轉を命じぬ、是れ即ち現今の地なり、其翌十八年天草一揆肥前の島原に起り其楯籠る所に一門を構ふ、恰かも此廓の之に似たりとて戯れに命名せしが、いつしか本名となして島原とのみ唱ふるに至れり、時に姪賣婦なるもの市中に續出し其弊害いふべからず、明和五年十一月十六日之を驅捕し、一時入牢申し付けしが、其處分に困む、寛政二年六月廓中の下婢として姪賣婦一千三百名を下渡し、衣食料として銀十五貫目を下賜あり、廓内も亦た之か處分に困難し、度々歎願の末同年十二月、祇園二條、北野(今の上七軒)七條の四新地へ貸座敷二十軒、娼妓十五名宛を置き、天保七年下河原へも出店を許されたり、かくてある事六年にして天保十三年十二月三十日各地遊廓を嚴禁せられ、嘉永四年十二月十二日再ひ之を許されたるも、以來漸く衰へ舊時の全盛を見る能はず、明治十九年に至り殆んど廢絶に瀕せり、各地の同業者大に之を惜み廓内營業者に力を協せ頗る挽回に努めしかば、近時漸く回復の途につき、今や將に絶へなんとせし絃歌艶曲を再ひ耳にするに至れり、毎年四月二十一日太夫の道中を催す等の古風を有す、

西本願寺 西六條に在り、眞宗、本派本願寺派の大本山なり、東六條の大谷派本願



西本願寺



稻荷社 (見伏)

寺に對し之れを西本願寺といふ、龜山天皇の御宇文永九年宗祖親鸞上人の季女覺信尼公、勅に依り東山大谷に上人の廟堂を建立す、此年勅して久遠成實阿彌陀本願寺の號を賜ひ、勅願所と爲る、開山の嫡孫如信上人別當職たり、而れとも上人常に陸奥大綱に住せられしを以て覺惠上人を大谷の看職とす、其後伏見、光嚴、稱光三帝の勅願所となり、延て御歴代の勅願所たり、後土後門天皇の寛正六年山門の衆徒蜂起して當寺を破却す、文明元年中興の祖蓮如上人三井寺衆徒に倚り、大津近松に祖影を安置す、文明十二年山科卿に影堂を新建して之を移す、天文元年六角定頼、山門三井の衆徒を語らひ、當時の佛閣を燒く、證如上人眞影を攝津難波に移す、石山本願寺是なり、(大阪の條に詳なり)天正八年顯如上人紀州鷲の森に移し、同十一年泉州貝塚に居り、同十三年攝州中島天滿に移り、同十九年八月五日今の地に移れり、元和二年十二月回祿に罹る、同四年之を再建す、當寺門跡號は、御柏原帝明應九年十月に踐祚し給ひ、大永元年三月御即位の料を奉進す、此勸賞として實如上人に紅衣を賜ひ、其後證如上人を權僧正に任じ、正親町帝の御宇顯如上人の在世に始めて門跡の號を勅許し給ふ、本堂に安置する祖影を骨肉の御影といふ、此像は親鸞上人の在世に彫刻して覺信尼公に授與せられし所にして上人滅後茶毘の遺骨を細抹して漆に和

し影を潤色せり、故に名つくとぞ、阿彌陀堂、集會所、轉法輪藏、鐘樓、大鼓樓等あり、大鼓は、大和西大寺の什物なり、鼓樓の太鼓は、太秦廣隆寺より移せしものにて、少納言信西の銘あり、唐門は古豊國社にありしものにて、人物走獸を彫刻し、莊嚴華美、近代の奇物なり、虎の間、浪の間、對面所、白書院、黒書院、其他關雎殿、綺春館、永安館、桃仙館等殿、舍高閣の夥だしき一々枚舉す可からず、滴翠園は集會所の東に在り、園内十景あり、高樓を飛雲閣といふ、昔時豊公聚樂の第にありしを移したるものなりと、閣上の畫は、霞の富士、中閣の畫は三十六歌仙にして、古法眼元信の筆なり、其他殿堂庭園善美を盡せり、東本願寺と共に諸國の信徒參拜するもの、喜捨するもの、堪えずして我國無雙の道場たり、

眞宗眞正寺派本山にして、西本願寺の南に在り、當寺の緣起は、大略佛光寺の條下に述べたる如し、佛光寺第十四世經豪上人山科本願寺蓮如上人に屬し、更に山科に於て一字を建立す、舊號を復して眞正寺といふ、こゝに於て經豪上人の化導海内に弘溢す、後天正十九年今の地に移れり、明治初年澤稱上人本願寺より分離し、更に獨立して本山となれり、當寺門跡號は正親町帝御宇第十七世顯尊上人に賜はりたるものなり、

本國寺　松原の南、堀川の西に在り、日蓮宗の大本山にして、日蓮上人相州鎌倉松葉谷に草庵を結び、之を法華堂と名つけ、盛に法華經を弘め、題目を稱揚す、是れ開宗發軔の道場にて、法華精舍の濫觴なり、文應元年諸宗の道俗に破却せられ、上人暫く下總に蟄居す、弘長元年三月再び歸り、法華堂を修復し、宗風を弘む、同五月伊豆に謫せらる、赦免の後、同三年七月又法華堂を修復し、宗風を弘む、同五月伊豆に謫せらる、赦免の後、同三年七月又法華堂を再興し、改めて大光山本國寺と號す、文永八年北條時宗の爲めに滅却せられ、上人佐渡に謫せらる、同十一年佐渡より歸り、松葉谷の廢地を其嫡弟日朗に附し、甲州身延山に開居す、上人滅後、日朗松葉谷に移り、本國寺を修造す、徳治二年將軍久明親王四町四方の地を賜ひ、當寺を再建し、將軍家の祈願所とす、宗風日々に繁昌せり、嘉曆帝當時を以て勅願所とす、貞和元年光明帝の勅に依り、相州より帝都即ち今の地に移れり、或はいふ此寺地は昔の六條判官爲義の第址なりと、又義經の堀川館は是れなりとの説あり、本堂は元の大宮殿にして、本尊は中央に法華經、左に釋迦佛、右に多寶佛を安す、此建物は始め江州安土城に在りしを、大和中納言秀俊の館に移し、秀俊歿後、當寺に移せるなりと、妙法華院の横額の水戸光圀の筆にて、上段の間の畫圖は狩野永徳の筆なり、祖師堂には日蓮上人の影を

安し脇壇には日朗、日印、日靜、日傳の像を安す、祖影は上人存生中の脱齒三莖を藏むといふ、生御影堂は昔の小客殿なり、祖師の影を安す、弘安中日朗上人祖師の影を刻し開眼を請ふ、祖師開眼を修して我魂魄を留め置くと染筆し、且つ華押を据へらる故に生御影といふ、立像釋迦堂は黄金佛の立像釋迦を本尊とす、祖師の隨身佛にて常山三個の靈寶中第一の尊像なり、清正公堂は加藤清正を本尊とす、清正深く日蓮宗を信仰し、朝鮮征伐に赴かんとするや當寺の三十番神に祈る所あり、且つ時の山主より引導を受けて出發せりといふ、始め紀州侯頼宣の夫人(清正の女)が父母追薦の爲め石碑を建立せしが、今の堂は萬延年中に創立せしものにして、清正の遺髪を藏むといふ、信者の賽するもの最も多し、早禱堂は早禱天女を安す、天文五年叡山の衆徒當寺を焼く、日助上人靈寶を集め難を避けんとするも烟焰天に漲り咫尺を辨せず、時に天女庭前の石上に出現して之を守護したりと、夫より茲に之を安したり、鬼子母神堂、一切經藏三光堂等其他の建物境内に羅列す、鎮守堂は紀貫之作の柿本人麿を安せり、此所は人麿塚の在りし所なりといふ、庭前に月桂梅、うたゝ寝の洗水鉢、堀川御所の沓脱石、鳥帽子石等あり、境内東西二丁南北六丁塔頭三十有餘、洛中有數の巨刹なり、

壬生寺 鳥原遊廓より北十丁許、本尊は地藏尊なり、世に有名なる壬生狂言は恐痴蒙昧の輩を菩提の道に入らしめんとするの方便にて、圓覺上人之を創始したるものにて、毎年五月十四日より同二十四日まで種々の猿樂をなす、壬生の大念佛ともいふ、

五條天神 松原通西洞院に在り、少彦名命を祭る、醫道の祖神なり、天使社と稱す、桓武天皇遷都の初平安城鎮衛の爲め造營し給ふ所なり、菅公を祭るものにあらず、

菅大臣社 西洞院に在り、菅公の父菅原是善の館址なり、菅公誕生の地なりと云空也堂 蛸薬師堀川東に在り、壬生寺より七八丁を隔つ、天祿三年の草創にして開基は空也上人なり、當寺にも踊躍念佛あり、俗に之を空也念佛といふ、

因幡薬師 平等寺と號す、松原通鳥丸東に在り、眞言宗なり、本尊薬師像は立像六尺二寸、往昔橘行平勅により、因幡國一宮に參詣し、靈夢に感して海底より光明赫奕たる薬師佛を得たり、其地に堂を作りて豆葉寺と稱す、又座光寺と改む、行平歸洛するに及びて薬師佛も入來したる等種々の奇瑞をいひ傳へり、

佛光寺 佛光寺通高倉に在り、眞宗佛光寺派の本山なり、順徳天皇御宇建暦二年

宗祖親鸞上人山科に一寺を創立し、興正寺と號す。上人を其上足眞佛上人に附與せらる。後醍醐天皇の御宇、元應元年當寺を澁谷に移す。當寺阿彌陀佛の奇瑞に叡感あり、勅して興正寺と改め佛光寺となさしむ。又當寺を以て一向專修の棟梁たるべき給旨を賜ふ。然るに文明年中當寺十四世經豪上人山科本願寺蓮如上人に屬す。此時塔頭四十八坊ありて四十二坊は之に隨順し、山科に於て新一宇を草創し舊號に復して興正寺と稱せり。今の興正寺派興正寺是なり。是れより他の六坊經豪上人の舍弟經譽上人を立て、當寺第十四世の血脈とす。其後豊太閤大佛殿建立に就て當寺を今の地に移せり。當時の門跡號は御土御門天皇御宇、寛正六年十三世光教上人の勅許を被る所なり。本堂には親鸞上人自作の影を安す。阿彌陀堂の本尊阿彌陀佛は慈覺大師の作にして、親鸞上人の安置所なりといふ。

六角堂　六角通鳥丸東に在り、聖德太子の開基にして天台宗に屬せり。頂法寺と稱す。本尊如意輪觀音は淡路國岩屋浦の海中にて獲たる一寸八分の金銅像なり。太子七生の持尊佛なりと傳ふ。太子奇夢に感して此地に堂宇を造營し之を安置す。堂の形六角なるを以て六角堂といふ。東門入口に圓形凹狀の石あり、之を臍石といふ。往時京都の中心を測りてこれを設けしといふ。現今の石は近年据付し物なり。

洛東之部

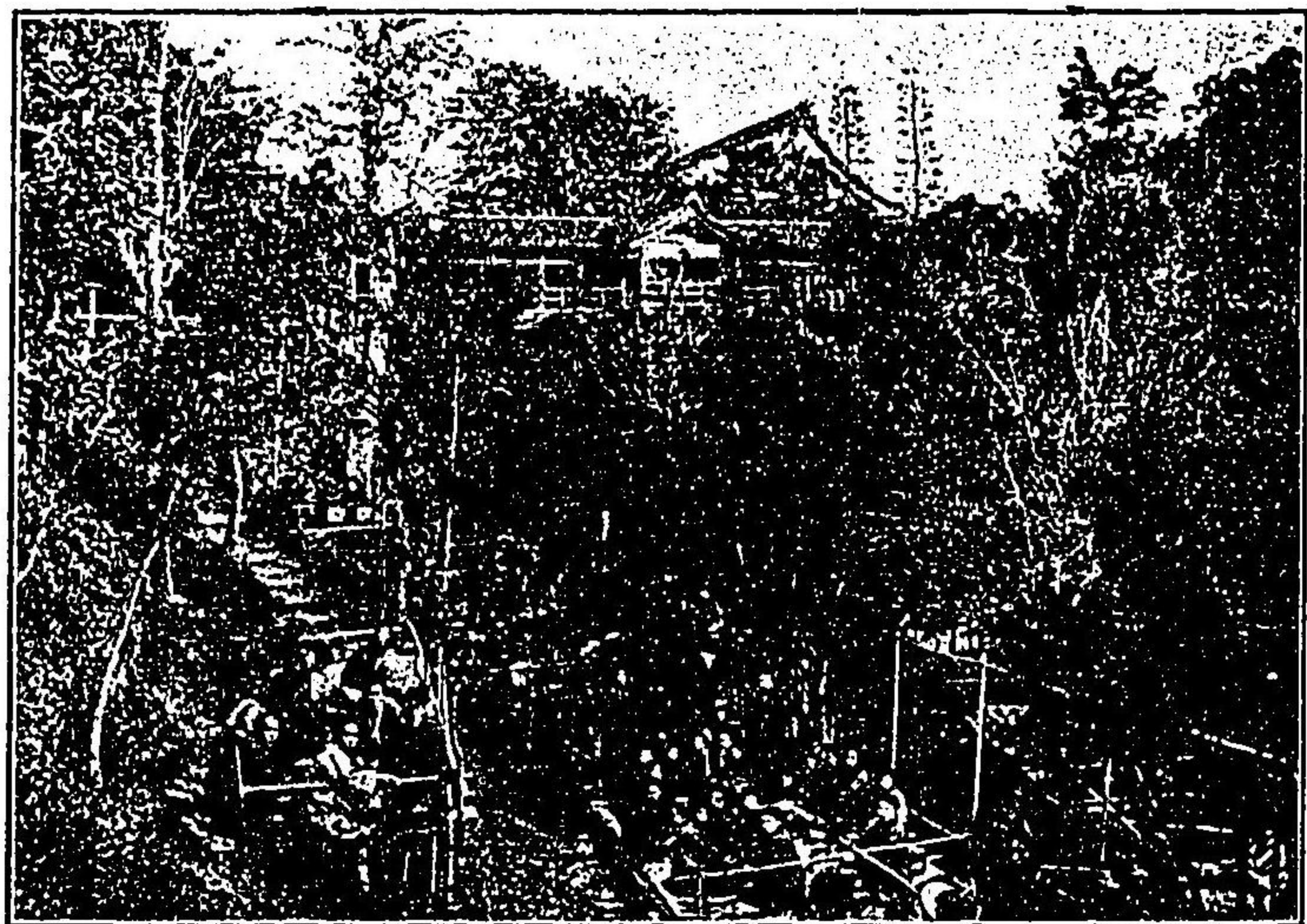
稻荷神社　官幣大社、東福寺の南に在り。祭神は倉稻魂命、素盞鳴命、大市比賣命の三神なり。元明帝の御宇、和銅元年二月午の日、倉稻魂命始めて稻荷山三の峯に垂跡し給ふて其所に鎮坐ありしが、延喜八年藤原時平社殿を修造せり。永享十年足利義教山上三の峯より今の地に還座し奉れり。境内廣瀾神殿壯麗にして世に之を伏見の稻荷と稱し、四方の賽人日夜絶ゆることなし。社の後山を稻荷山といふ。攝末社は峯巒溪谷の間に在り、之を順拜すること里一里餘俗に之を御山巡りといふ。二月初午の日は貴賤の參詣するもの夥たしく、臨時瀝車を發する。至る當日は當社の神影現の日なるが故なりといふ。

東福寺　臨濟宗五山の一、北は泉涌寺、南は稻荷に接せり。南北二門あり、北門は伏見街道二橋の南にして南門は三橋の傍に在り。開基は聖一國師にして願主は關白九條道家なり。建長七年の建立に係れり。供基を南都の東大寺に亞き、盛業を同しく興福寺に取るの意を以て東福寺と名づく。地域五萬九千餘坪、堂塗伽藍は巍々として域内に連なりしも、明治初年の失火に佛殿、方丈其大半を焼失したるは惜しむべきなり。左れと有天なる通天橋は幸に其災を免かるゝを得たり。橋は南北に架す。橋

上に廊あり、額は普明國師の筆なり、梁の文に「大檀越太閤大相國秀吉公、莖州安國惠
瑜晰建慶長二丁酉三月日」とあり、其西橋を臥雲橋といふ、橋下を洗玉澗と名づく、紅
葉の勝地を以て名高し、所謂通天の紅葉とは是れなり、常樂庵は開山の昭堂にして
普明院と號し、通天の北に在り、其庫裡に秘藏する黄金の寶塔は奇代の名品とて天
下に聞ゆ。

泉涌寺 伏見街道一橋の北に在り、禪、真言、天台、律の四宗兼學にして、最初の開基
は弘法大師にして法輪寺と號せしが、文徳天皇の御宇、齊衡三年左大臣藤原緒嗣神
修上人の爲め再建し、宗を改めて仙遊寺と號す、順徳天皇の御宇、建保六年俊齋律師
之を中興して四宗兼學となし、泉涌寺と改めたり、當寺は泉山御陵とて、四條天皇を
權輿とし、御土御門天皇以來御歴代の帝陵皆な其後山に在り、故に帝室の御待遇他
に異なるもの多し、地域四萬四千五百餘坪、東北に山を負ひ、老松翠深ふして俗塵を
絶ち、中門に掲る東山の額は張即之の筆、佛殿には彌勒、釋迦、阿彌陀の三佛を安す、其
に運慶の作なり、釋迦堂は後水尾天皇の御建立にて、今の本尊は黄檗山隱元が彼土
より持ち來りし佛像なり、之を三平の釋迦と稱するは三平山の檜木を以て造れる
か、故なりと、觀音堂の本尊は唐玄宗皇帝の作にて、楊貴妃追福の爲め其容貌を摸し

(七四)



寺 福 東



堂 間 三 十 三

て作りしものにて洛陽三十三番の一なり、舍利殿の本尊は佛牙の舍利にして二重の金塔に安せり、開山堂には俊齋律師の像を安す、掲る所の泉涌寺の額は張即之の筆なり、靈明殿には四條天皇の宸影及び御歴代の尊牌を安す、其額は後西院天皇の宸翰なり、

新熊野觀世音 本尊は弘法大師の作にして、西國十五番の札所なり、

即成就院 新熊野觀音堂内に雜居す、元は伏見御香宮の近傍に在り、桃山城築造の時藤の森の北三丁の處に移り、再轉して今の處に移れり、那須與一宗高の建立せし所にして、本尊阿彌陀佛は悪心僧都の作なり、

劍の宮 新熊野より泉涌寺に至る路傍に在り、祭神は白山權現なり、

新熊野神社 紀州熊野權現を祭る、後白河法皇の勸請なり、

三十三間堂 天台宗にて蓮華王院と號す、始め鳥羽上皇此地に三十三間堂を建て得長壽院と名つけ、一千一鉢の觀音を安し給ひしに、後後白河上皇又三十三間堂を建て一千一鉢の觀音を安じて蓮華王院と號せり、深草天皇の寶治二年兩寺とも回祿に罹り、後ち龜山天皇の文永二年再建なり、其際二寺を合併して一寺となし、獨り蓮華王院を有せしなり、今の三十三間堂は是なり、堂は南北六十六間あり、二間毎

に一柱を建てたるを以て三十三間堂といふ、本尊は千手観音八尺の坐像にして康慶の作、二十八部衆は同境上に、千手観音一千軀は堂内左右に安置せり、運慶湛慶の兩作、洛東隨一の古刹といふ可し、

養源院 天台宗にして、三十三間堂の前に在り、淺井長政菩提の爲め其男清泊僧正の建立する所なり、血天井は豊臣氏滅亡の紀念物として桃山より移せしものなり、今猶ほ血痕斑々、

智積院 養源院の東に在り、眞言宗なり、豊太閤の子息弁君早世にはき、寺を此地に建て、墓所寺とし、祥雲院と號せり、妙心寺南化和尙住職せり、後ち之を妙心寺に移し、其跡を智積院と稱す、是より先天正十三年秀吉紀州根來寺を滅し、眞言宗覺鑿派の斷絶せしより新義の徒愁訴す、よりて此地を賜ふて智積院とすと云ふ、本尊に不動明王、

京都 帝國博物館 豊國神社の南隣に在り、城内方百間、即ち一萬坪にして、建坪總數九百餘坪、古器物陳列室七、繪畫室九、彫刻室其他にして、善美宏大なる建築なり、工費豫算は十六万人千餘帝室費より御支辨ありたり

豊國神社 帝國博物館の北隣に在り、豊臣秀吉の靈を祭る、別格官幣社、始め慶長



京 都 博 物 館



高 臺 寺

四年、秀吉薨去の翌年、朝廷より豊國大明神の神號を下賜せられしを、徳川天下に及び家康之を毀ち一基の石塔婆を方廣寺に存するのみなりしを、明治十年に至り別格官幣社に列せられ、新たに今の社祠を營めるなり、社後の山即ち東山の峯嶺を阿彌陀ヶ峯といふ、大英雄の遺骸の眠りつゝある所なり、

大佛殿　方廣寺といふ、天台宗、天正六年、豊臣太閤の建立にて、當時は佛殿樓門頗る偉觀を極めしが、慶長七年回祿に罹り、同十五年、豊臣秀吉再建さる、本尊、盧舍那佛坐像六丈三尺、奈良の大佛と匹敵す、太閤創建の時は銅像なりしを、徳川氏に至り寛文二年之を毀ちて木像と爲し、其銅を以て錢を鑄る、所謂文錢なり、寛政十一年七月に至り雷火の爲めに大佛烏石に歸し、爾后大佛半像となれり、撞鐘堂の鐘は長一丈四尺、徑九尺二寸、厚一尺にして、豊臣秀頼の鑄造せしもの、家康が國家安康の句を言草とし、大阪陣を起したる、歴史上有名の鐘なり、門前巨石を疊み封境を築きたる結構の雄偉なるは、なほ太閤當時の偉業を追想せしむ、境内に萩花の園あり、

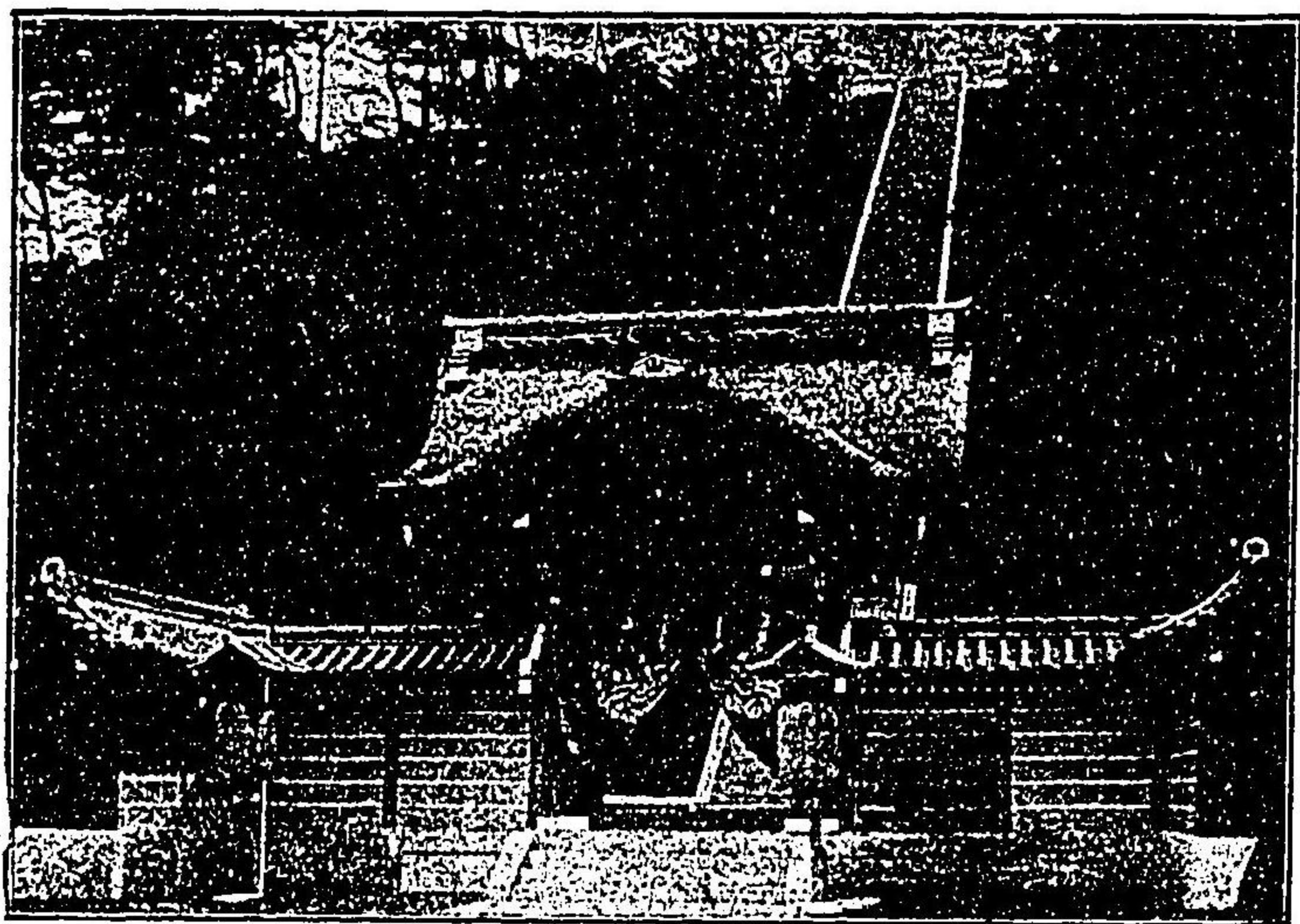
耳塚　豊國神社の門前に在り、豊太閤の朝鮮を征伐せし時、諸將が敵の首級を得るもの幾万、悉く之を保つべからざるを以て、其耳を取り、鹽藏して日本に送りたるを埋めし塚なり、

妙法院 俗に大佛妙法院といふ、叡山三千坊の一にして叡山に在りしが、法親王在住となるに及び八阪の地に移り、小阪殿又は綾小路宮と稱せり、豊太閤大佛殿建立に付き、妙法院親王其事務を管せられ、照高院法親王は之を避けられしより、其宮地に移りしものなりと、本堂には普賢菩薩を安置す、庫裏は院内第一の建物にて豊太閤の建立なり、千僧供養の跡なりといふ、大書院は梅の間と稱し、元和五年東福門院入内の時の御殿を下賜せられたるものなりと、其林泉は小堀遠江守の作にて、妙趣多く、殿舎の襖繪其他は狩野其他名家の筆に成れり、什寶は代々法親王在住ありしを以て重器甚だ多かりしも、維新の當時散逸したるもの少なからず、宸翰最も多く、豊太閤の遺物亦た六十餘種あり、宸殿は文久三年三條公等七卿都落の舊跡なりしが、維新後毀壞して存せず惜しむべき也、久阪玄瑞の舞曲に「朝な夕なに聞きなれし、妙法院の鐘の音も、何と今宵はあはれなり」とある、これを寓したるものなり、

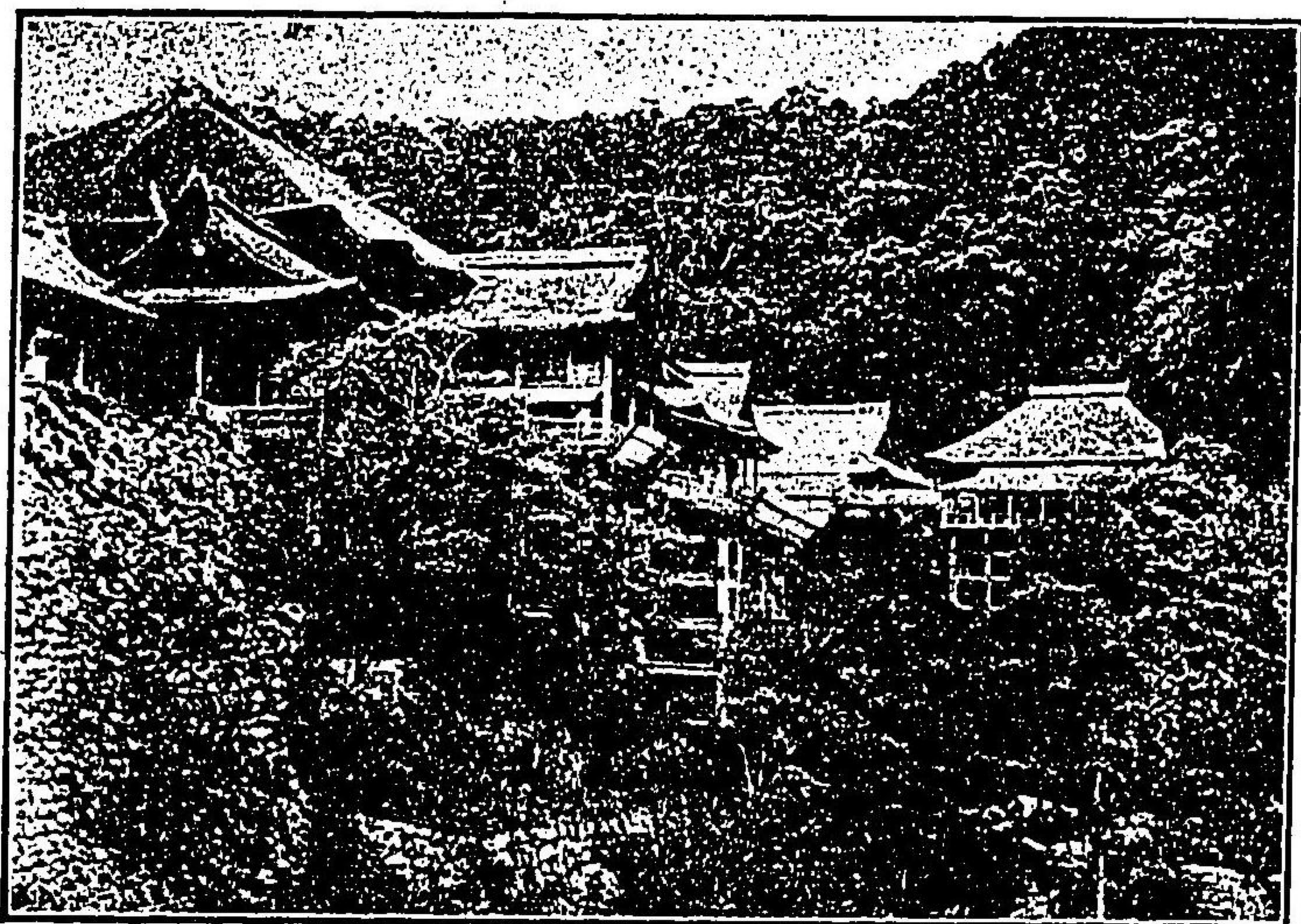
小松宮正林寺 馬町の東に在り、法然上人の舊跡なり、

西大谷 五條阪の上に在り、本派本願寺の廟所なり、慶長年中今の智恩院境内より此地に移したるものにて、舊地の號を取り大谷と稱せり、

清閑寺 眞言宗、延暦年中銘繼法師の草創にして、始めは天台宗なりしが、其後荒



豊公廟



京郡清水寺

廢したるを一條帝の御宇佐伯公行再興す、本尊は菅公作の千手觀音、高倉天皇の御塔及び其寵姫小督局の塔あり、歌の中山清閑寺といふはこれなり、地太だ幽邃なり、清水寺　清閑寺の東北に在りて、法相真言兩宗兼學の有名の靈場なり、當寺は往昔木津川の上流大和國に在りしが僧延鎮異人行寂居士に值遇し、之に代て其草庵に住すること五年の後、延曆二年阪上田村麿の奈良の京を出て、出獵するに會す、田村麿大に信心渴仰の思を爲し、翌年佛閣を造立せり、後桓武天皇の御宇延曆三年、帝都を長岡に移されたる時、靈夢により今の地に田村麿の居宅を移し、本尊を安して北觀音寺と號す、今の田村堂是れなり、延曆十二年長岡より平安城に遷都あり、田村麿に殿舎を賜ひ、敕して觀音堂を造營せしむ、又平城天皇の大同元年、田村麿に紫宸殿を賜ふて清水寺に移し、用ひ伽藍となさしむ、故に今に至るまで此堂の形は紫宸殿の摸形なり、本堂は懸崖に架して南面し、前に舞臺を設く、有名なる清水の舞臺なり、本尊十一面十臂千手千眼の觀音は化人の作なりと傳ふ、脇士は勝軍地藏及勝敵毘沙門天は延鎮の作、奥の千手堂は延鎮法師住房の跡、其傍の阿彌陀堂は法然上人念佛三昧開闢の處、その他釋迦堂、朝倉堂、田村堂、法華三昧堂、三重塔、桓武天皇御建立、隨求院、秀吉の建立は月照上人碑等なり、音羽の瀧名所、惡七兵衛の書簡、白爪形の

觀音什寶見るべし。

經書堂 來光院と號す、清水產寧阪に在り、聖德太子の草創、本尊太子は自作の像、

嬭堂 經書堂の前に地り運慶作の三途河の老婆を安す、

子安觀音 泰産寺と號す、光明皇后の草創なり、

六波羅窟寺 松原通に在り、本尊藥師如來は傳教大師の作、開基は慶俊僧都、中興は弘法大師、堂には小野篁の像を安し、閻魔堂には閻魔大王を祭る、迎鐘は聖靈迎の鐘といふを意味す、桓武天皇平安奠都の際の公同墓所なりとなり、

建仁寺 臨濟宗五山の一、大和大路四條南に在り、開祖は榮西千光國師、建仁二年源頼家當寺草創の爲め此地を寄附し、同三年土御門天皇勅して當寺を造營せしめ玉ふ、年號を取りて建仁寺といふ、佛殿は天文年中祝融の災に罹りしを、安國寺惠瓊東福寺の茶堂を移して本尊釋迦佛を安したるなり、方丈は安國寺より移せしものといふ、方丈の庭に經藏あり、所藏の一切經は榮西が唐土より持ち來りしもの鮮明無比と稱せり、開山の塔所を興禪護國院といふ、佛殿の西南に在り、華藏世界の額は韓客雪峰の筆、佛殿の東に二鐘樓あり、大鐘は往昔河原左大臣が六條河原の別莊を

佛閣とし河原院と號せしも、後荒廢せし時此鐘土中に埋もれしを、開山國師が當寺に移したるものなり、方丈の北方に安國寺塔あり、安國寺惠瓊の首を埋ひる所なりと當寺の南門は矢立門とて箭痕あるを以て名高し、南門の西の禪居庵は唐僧清拙和尚の開基にして、本尊摩利支天は和尚が唐土より持來の靈像にて、面貌白色、衣服彩色、全色七頭の猪に乗ず、靈驗ありとて香煙常に絶えず、

惠美須神社 建仁寺の門前に在り、祭神は蛭命、榮西國師の勸請にかかる、

宮川町 鴨河の東岸に沿ひ、四條の南一町目より五條までの地をいふ、嘉永四年に條新地の出店を許され、先年町と同時に遊廓となれり、近頃頗る好況にて漸次妓樓の増加を見る、

安井神社 祇園の南に在り、藤原鎌足此地を愛し、自ら紫色の藤を栽ゑ、家門の永久を祈りしに、漸次繁茂して花の寺と號するに至る、崇徳天皇之を愛し、屢々行幸あり、又宮殿を築き、寵姫阿波内侍を居らしむ、天皇讃岐に遷幸の後、御相好を鏡に寫して之を摸し、自ら束帶の尊影並に隨身二人の像を畫き、之を内侍に贈り給ふ、天皇讃岐に於て崩御の後、内侍は落飾せり、龜山天皇の御宇、眞言の僧大圓奏請して此地に佛閣を修造す、光明院と號し、尊靈を鎮め、歷代天子御造營あり、寺を勸勝寺と號せり

維新以後神佛分離の安井神社となれり、今尙ほ龜山天皇遺愛の藤殘株を存す、
八阪塔 法觀寺又は八阪寺といふ、聖德太子の建立、往古は立派なる寺なりしが
今はたゞ五重の塔を存するのみ、

庚申堂 日本三庚中の一、八阪塔の東南に在り、

東大谷 大谷派本願寺の祖廟なり、莊嚴肅麗、

雙林寺 東大谷の南に在り、開基は傳教大師、はじめは天臺宗たりしを、國阿上人
之を時宗に改む、西行庵は堂の西方に在り、西行法師此處に閑居し、建久二年二月十
五日歿す、西行塔あり、又平判官康頼此地の風景を愛し山莊を構ふ、治承年中鬼界島
に流され、赦免歸洛の日此に閑居し寶物集を作れり、又頓阿彌あり、頓阿は和歌四天
王の一人なり、此地に住せりと

女御田 雙林寺の西北隅にあり、白河法皇の寵姫祇園女御の館跡なりと、後世遊
葉院といふ寺ありし由なるが亡滅せり、方二間鋤鍬を入れざる叢あり、

高臺寺 雙林寺の南に在り、臨濟宗、此地は古へ雲居方丈なりしが、應仁の兵燹に
罹りて亡びぬ、慶長年中豊太閤の夫人北政所の造營せられし所なり、寺域一万七千
四百餘坪、流石に豊臣氏の經營、壯麗を極めしが、先年焼失して今は只だ開山堂及豊

臣氏の廟舎を存するのみ、廟舎は東西三間半、南北四間にて、竇形造なり、豊太閤の影
は唐冠白袍、政所の像は法體花帽子なり、此殿は北政所の館に在りしを此に移され
しものなりと、長押の上に三十六歌仙の額を掲ぐ、畫は土佐光信、和歌は八條智仁新
王の筆なり、時雨の亭及傘の亭は千利休の造る所なり、當寺の境内に萩あり、有名な
る高臺の萩なり、

靈山正法寺 時宗、俗に之を國阿寺と稱するは國阿上人の天台を時宗に改めし
寺なればなり、國阿堂の額は弘法大師の筆、本尊の阿彌陀佛は齒を見はすを以て、俗
に之を齒佛と稱す、

招魂社 靈山の半腹に在り、維新前後王事に死せしもの、靈を祭れり、

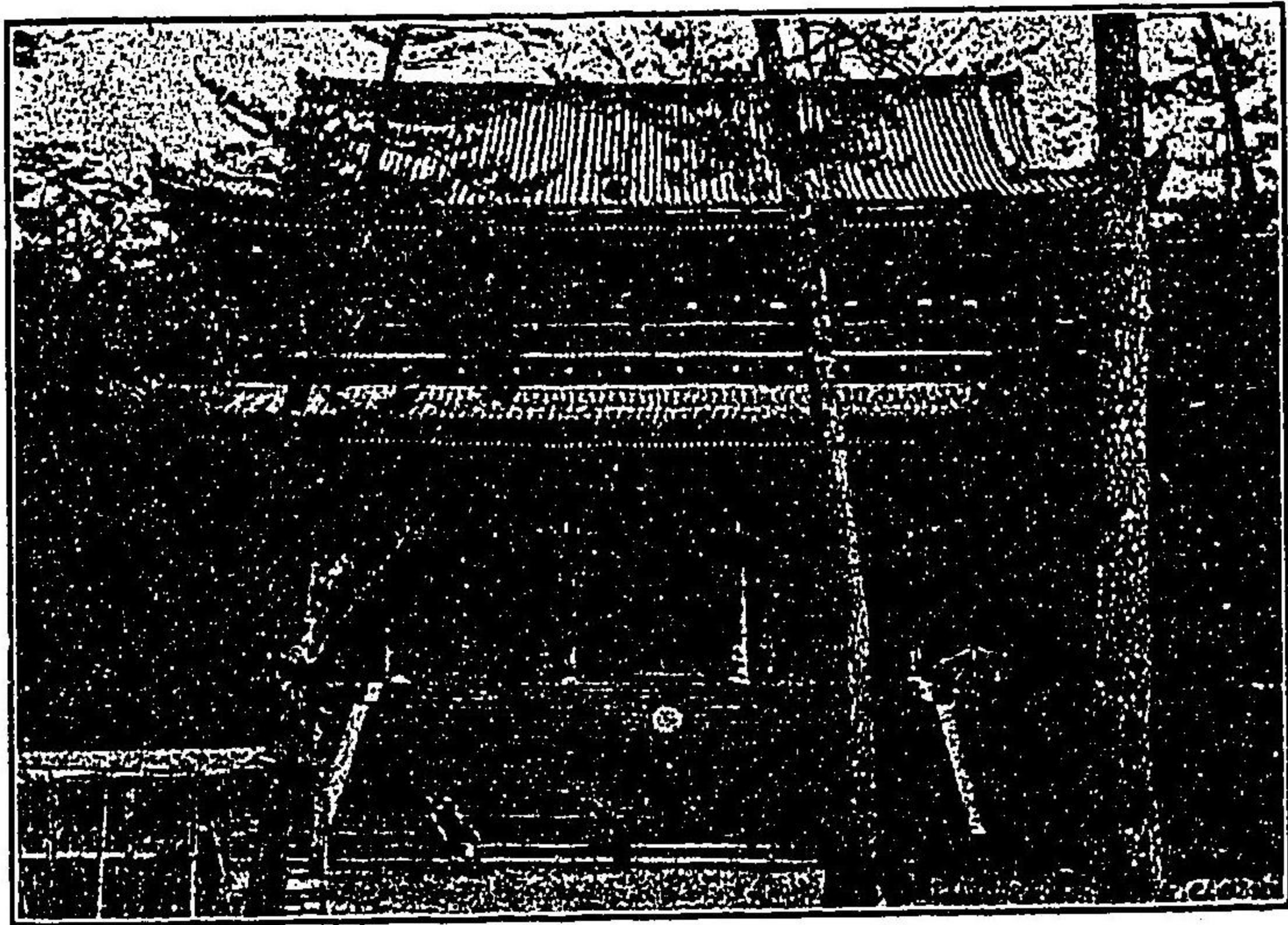
安養寺 圓山に在り、時宗、傳教大師の開基にて天台宗なりしが、國阿上人之を時
宗に改む、圓山の辨天は堂の下に在り、

長樂寺 安養寺の南に在り、延暦中桓武天皇の艸創傳教大師の開基天台宗なり
しが、國阿上人之を時宗に改む、此地東山に在りて風光最も佳絶、其景色は唐の長樂
寺に似たるを以てしかく名づけしと、四季名所に所謂「濡れて紅葉の、長樂寺」なるも
の、紅葉の名所なり、

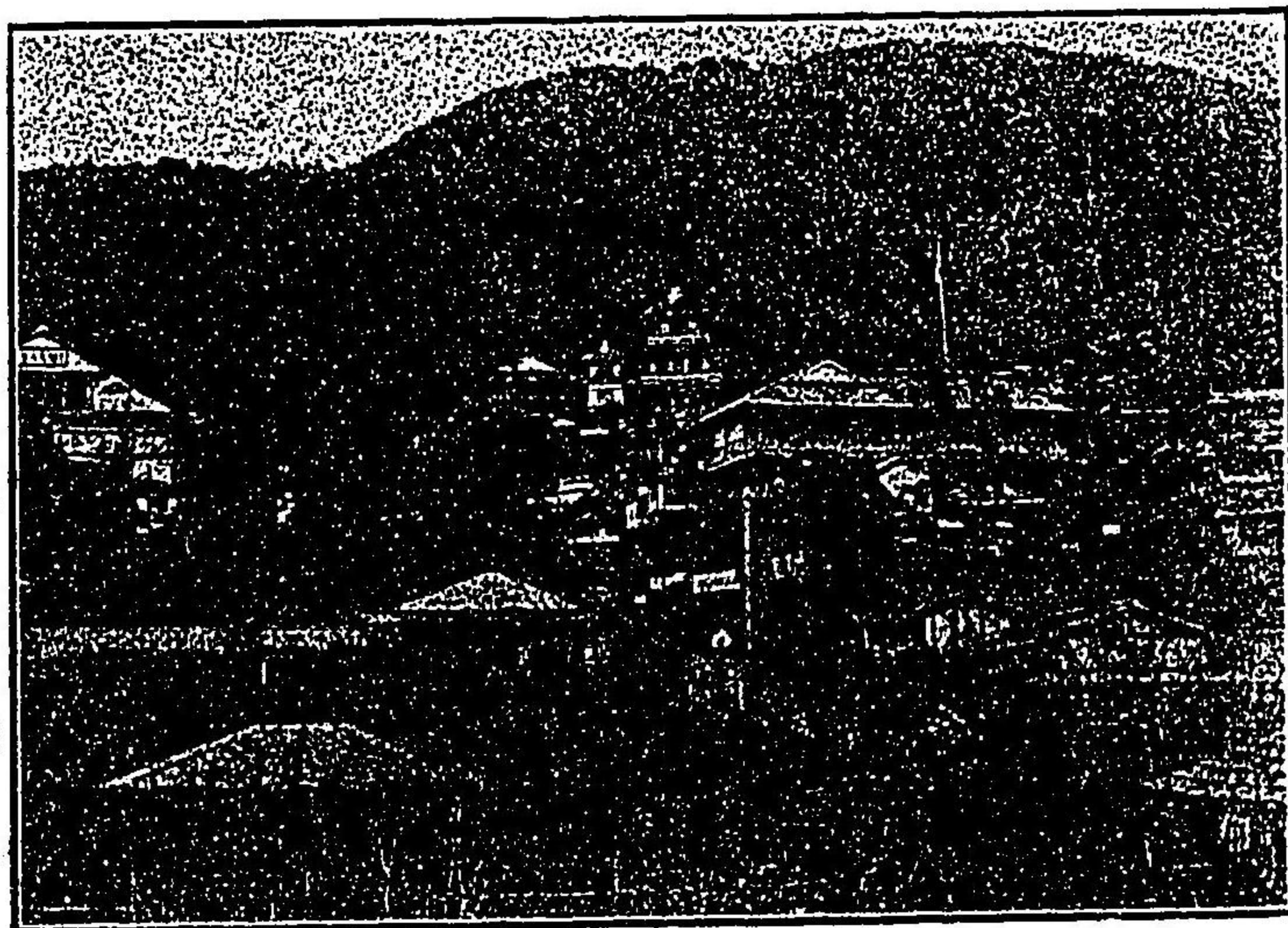
頼山陽墓 大家頼山陽の墓は長樂寺内に在り、三十六峯外史今や三十六峯最も絶佳なる處に眠る

木戸孝允墓 復古の元勳、維新三傑の一人たる木戸孝允は、明治十年を以て京都に薨ず、墓は招魂社に在り、

知恩院 洛東第一の大寺にして、淨土宗の總本山、高倉天皇の承安五年法然上人叡山を出て、東山吉水に草庵を結び、淨土宗を弘通せられしに、門弟次第に加はり、中之坊、東之新坊、西之本坊の一宇鼎足して、宗風大に盛なり、後ち上人遠流の沙汰あり、七年を経て、恩免歸洛せられたる時、三坊已に荒廢に屬せしかば、粟田青蓮院慈鎮和尚より南禪院に寄進せられたり、南禪院は永觀年中、天臺慈惠大師の開基、今の勢至堂の地なり、後ち改めて知恩院と號す、上人此地に於て入寂、後山徒の爲に堂宇を破却せられ、文曆元年、遺弟勢觀房四條天皇の勅により、殿堂を建立す、此時本殿には大谷寺勢至堂には知恩教院、總門には華頂山の勅額を賜ふ、星霜三百年、慶長八年に至りて、徳川家康山嶽を開拓し、規模を擴張して、大伽藍を改造し、鎮護國家の大道場となせり、寛永十年、大伽藍炎上、家光之を再建す、東山天皇元祿十年、勅使參向、法然上人に圓光大師の諡號を賜ひ、靈元天皇寶永八年、又勅使參向、宗祖五百年忌、更に東漸



智 恩 院



丸 山 公 園

大師の加謚を賜はる爾來五十年忌毎に勅使參向進謚の例にて先帝の時代に及びしは他に見さるの特典なり、後陽成天皇第八皇子恩知院宮門跡として御入寺ありしより代々相承して維新に至るまで親王在住なり、什寶中勅修御傳四十八卷を以て第一とす右は後伏見天皇の勅修にて、法然上人の行狀記なり、詞書は伏見後伏見後二條三帝の宸翰及び粟田尊圓親王三條實重姉小路濟氏世尊寺行尹三卿の助筆にして書は土佐吉光なり、每卷足利尊氏の花押あり、山門は徳川二代秀忠の建立にて華頂山の勅額、靈元天皇は御宸筆、本堂は徳川三代家光の建立、大谷寺の額は後奈良天皇御宸筆、圓光大師の像を安す、集會堂は千丈敷といふ、大小方丈は木曾麁香山の良材を用ひし、稀代の建物、各室の繪畫は狩野家諸名士の揮毫に成る、境内四萬坪、北は粟田青蓮院に連なり、南は岡山に接す、山門下數多の茶亭あり、四季名所に所謂『秋は色増す華頂山』なり

粟田青蓮院 知恩院の北に在り、粟田御所又東山御所とも稱し、三條白川の御殿ともいふなり、傳教大師の草劍、行玄大僧正之か開祖たり、美福門院の祈願所となり、仙洞に準せらる、天台三門跡の一なり、仁平三年鳥羽法皇殿宇を建立し給ひ、仙洞御所の祈願所として院の御所に準せらる、法皇第七の皇子覺快親王御入室以來三十

九世尊融法親王故久邇宮殿下)に至る迄七百餘年運聯として法號を繼かせ給ふ、世々天臺主に職せられ、宮廷の御縁故淺からず、天明八年には後櫻町天皇の假皇居となり、嘉永七年には皇女門院の假御所となれり、又慈鎮和尚の時見真大師得度の遺迹あるを以て爾來本願寺法主は歷代當院法親王に隨つて得度せらるゝの例なり、故に維新後年々四月兩本願寺の法主當院に參詣して得度會を修し、謝徳の意を表すること依然たり、當院第十七世の門主尊圓法親王入木道一流の筆法を起さる、世に粟田御家流といふもの是也、

粟田神社 青蓮院の東山腹に在り、素盞男尊を祭る、

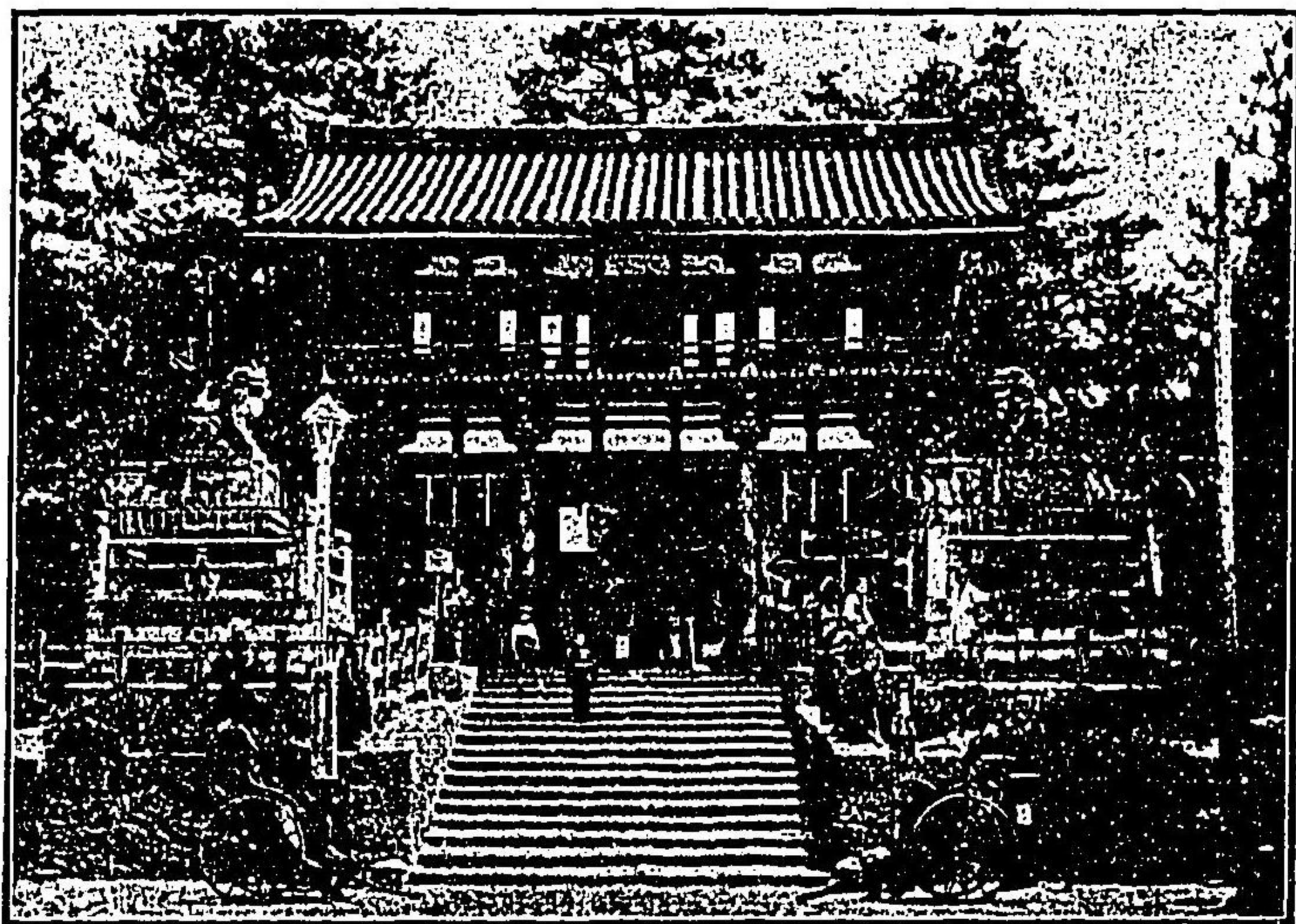
植髮御影堂 青蓮院の北に在り、本尊は阿彌陀佛、右方に親鸞上人植髮の像を安す、其像は上人九歳にして青蓮院慈鎮和尚に就き剃髮せし時、和尚は其童形を摸し、翠髮を剃り之を植えしものなりと、長三尺許小葵の直衣に薄紅梅の衣を着し龜甲形紫色の指貫を穿ちて雲網縁の褥に立てる像なり、

圓山公園 古の所謂真葛ヶ原にして、祇園林より知恩院境内の北、東大谷一帯の地なり、東山風光第一と稱す、一株の垂枝櫻あり、巨幹繁枝稀世の名木なり、開花爛熳の候には、花下遊人群をなし、夜に入れば篝火を燒て幽艶一層、夜に之を祇園の夜櫻

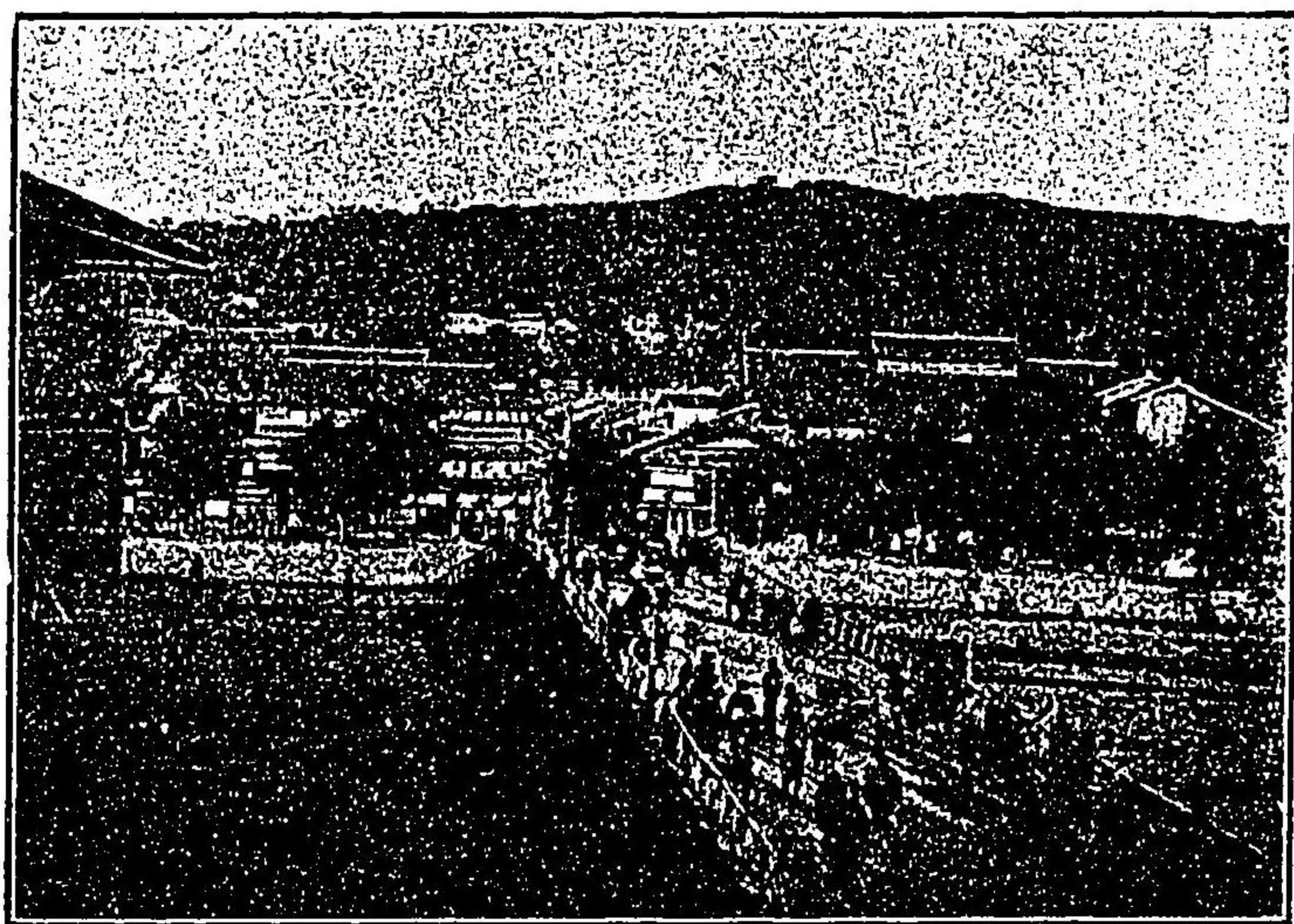
といふ、四季名所に『色香争ふ夜櫻や』といひ、『思ひぞつもる圓山に』といふ雪花の名所也

八阪神社 祇園町の東端に在り、所謂祇園にして、官弊中社素盞烏尊を祭る、稻田姫八王子を合祀す、中臣抜抄に曰く、清和天皇の貞觀十八年疫神崇を作し萬人病を發する事以ての外なり、養祖口良曆京中の男女を引ゐて六月七日十四日疫神を神泉に送る、其次の年又疫神崇るほどに百姓神輿を神泉院に送る、爾來年々六月七日は如此しつけて是を祇園會といふなり、其神輿を置く所は八阪感應院といふ寺なり、是に神殿なきほどに照宣公の御殿を參らせられて其を神殿とし、是を精舎といへるに因みて後人祇園の名を加へたり、然る故今に祇園は神社造にてはなきなり、云々、是れ當社の濫觴なり、境内攝末社多し、有名なる祇園會は毎年七月十七日廿四日を以て執行せられ、十七日には神輿本社を發して四條の御旅所に神幸あり、二十四日に還幸せらる、氏子町内よりは各種の山鉦を出だし、其盛觀海内無双、

祇園新地 四條大橋より東幾條の市坊を包括する一帯の地を祇園新地といふ之を甲乙の兩部に分ち、乙部は俗に膳所裏といひ、古來祇園新地と稱するものは今の祇園新地の甲部なり、寛政十二年十二月二條新地七條新地北野新地と同時に遊



証 園 八 阪 神 社



四 條 橋

廊を許されたるものにて、初め眞葛ヶ原の茶店に茶汲女を置きしより、嫖客の來遊するもの漸く多く、随つて茶店を増設するに至り、遂に鳥原の出店となりしが、天保十三年閣老水野越前守の改革令にて遊女は鳥原に立退かしめらる。是より先き文化十年を以て許されたる女藝者は大半樓婢となりて再兆の日を待ち居りしに、嘉永四年十二月更に十ヶ年の期限を定め再び遊廊を許可せられ、爾來次第に繁昌し、青樓妓院相接す。維新後に鳥原漸く衰へて此地益々繁華となり、所謂京都美人は一に此に集るに至り、楊州の明月杜陵の花千金を散じて傲遊を競ふの客、東より西より南より北よりこゝに來りて骨抜泥鰌とならぬは稀れなり。

四條大橋 東岸は祇園新地にして、西岸には先斗町の遊廊あり、京都唯一の鐵橋にて四條通に架するものなり。

四條河原 四條の納涼といへばその名天下にかくれなき、王城特色の一にして、夏の夜頃ともなりぬれば、沿岸の青樓亭席乃至料理屋、いづれも水に臨むの納涼座敷をしつらふ。三條大橋より四條大橋に至るまでの間の河原最も適當にして、河原に無數の床几を列ね、水を蜘蛛手に流し、かしここゝに飲食店の客を呼び、清風嬾々として三十六峯より吹き落るすを受けんとて、そゞろ歩行さする才子佳人(？)文に

も書にも及ばさるところなり、四季名所に所謂「御被」を夏は打述れて河原に「つどふ夕涼み」なるものはこゝろかし、

芝居 日本芝居の元祖地はこゝ四條の芝居なり、永祿年中名古屋三左衛門といへる浪人が出雲を國とかたらし、古刹名寺修繕の爲めに各寺の境内に女手躍を興行せしが最初にて、つひに男女立會の狂言を仕組み、之を歌舞妓と名づけ、北野の芝生、祇園の南林、五條以南の河原にて興行せしが初めにて、豊太閤伏見城より上洛の時其行列に妨げありとて之を四條碛に移されし歴史あり、むかしは此地に南座北座の二劇場ありしが、北座は近年西陣に移り南座のみ此地に残れり、京都の芝居は新京極の常盤座、阪井座、夷谷座、福井座、榮昇座、西陣の千本北座、當地北座の移りしもの、岩神座、中竹座其他夥多の劇場あり、皆是れ維新後に出來したるものにて、幕府時代には此地に南北二劇場ありしのみなりき、

聖護院 聖護院町に在り、天台宗、三井寺門主の一、維新以前迄は法親王住し給へり、修驗道を兼ね山伏を司管せり、

熊野神社 聖護院の森に在り、後白河法皇熊野より勸請す、

御猿堂 金藏寺といふ寺にて、本尊は米地藏とて傳教大師唐より持來の像なり

安置する三猿の像は傳教大師の作なり

妙傳寺 一に關西身延と稱す、日蓮宗十六本山の一なり

要法寺 孫橋通に在り、日蓮宗興門派の本山なり、開基は日尊上人、本堂に日蓮上人の影を安す、

頂法寺 仁王門通に在り、日蓮宗、運慶作の多門天、持國天、雨王天の像を安す、

法林寺 三條大橋の東北詰に在り、淨土宗、境内に主夜神祠あり、檀王法林寺の名あり、

南禪寺 臨濟宗五山の一、傳へ云ふ後龜山上皇の離宮、此地に在す、道智僧正の靈障得を爲して怪多し、東福寺の無關和尚、二十の禪侶を率ひて宮中に坐禪し、怪物跡を隠すに至りしより、敬威あり、つゝるに宮殿を改めて佛殿と爲し給ふとなり、六萬三千坪の大寺にして五鳳樓、南禪院、毘盧頂、龍淵室、天板庵、歸雲院等の建築、羊角嶺、獨秀峯、駒ヶ瀧、神仙佳境等の名勝あり、萩花の名所たること高臺寺と兄弟たり、頼山陽の『青松一帯路不迷』の句は此あたりの實況なり、

金地院 南禪寺の塔頭なる、德基禪宗、足利義滿の歸依によりて北山に金地院を創め、慶長年中、崇傳和尚當院の中興となり、天海僧正と共に徳川家康の參謀たり、結

搦の宏莊なるに徳川將軍の勢力を以て建てたるものなれば云ふも疎かなり、美術の妙を極む、東照宮の靈廟あり、

永觀堂 南禪寺の北に在り、淨土宗西山派、本尊を見返り本尊といふ、櫻楓の名所なるが、殊に紅葉に名あり、老楓岩垣紅葉見ざるべからず、俗曲に『秋は紅葉の永觀堂、冬圓山雪見酒』といへり、

若王子神社 永觀堂の北に在り、白河法皇の創造なり、那智神社を祭る、山中に若王子の瀧あり、京都に於ける避暑の名所、

鹿ヶ谷 法勝寺執行俊寛の別莊の在りし所にして、平家討亡の密議を凝らせし處、今は談合谷と稱す、眺望絶景、轉た登臨の客をして懐古の涙を催さしむ、

鈴虫松虫の古跡 鹿ヶ谷の住蓮山安樂寺といふ淨土宗の寺に在り、鈴虫松虫は共に後鳥羽天皇の宮女なり、こゝにて法然上人の教を聞き尼となる淨土宗の宗教史には一寸大事な頁なり、

法然院 安樂寺に接したる淨土宗なり、法然上人草庵の跡

靈鑑寺 鹿ヶ谷に在り、禪宗、開基は靈鑑院尼公、本尊不動明王は智證大師の作

光雲寺 東福門院の建立にして、禪宗、瑪瑙の手水鉢は同寺の什寶

黒谷光明寺 黒谷に在り、淨土宗、法然上人の閑棲の所なり、上人始め比叡山黒谷に在り、故に此地を新黒谷と稱す、昔は栗原の丘といへり、本尊彌陀に源信僧都の作、勢至堂は圓光大師の廟、熊谷堂は熊谷直實入道蓮生坊が居住の所、三重堂には日本三佛の一なる文殊菩薩を安し、觀音堂には吉備眞備が行基と心を合せて作れるて、ふ靈像を置く、熊谷鍮洗の池、熊谷鍮掛の松、敦盛塔、熊谷塔等あり、法然上人の一枚起請文は此寺第一の寶物なり。

眞如堂 鈴聲山眞正極樂寺といふ、戒算上人の開基、本堂方丈、經藏、善光寺如來堂、地藏堂、鐘樓、稻荷社等、白雲紅葉の間に散在して、詩趣いふ可からず、本尊阿彌陀佛は慈覺大師の作にして、はじめ叡山常行堂に在りしを、永觀中雲母坂地藏堂に移し、又元眞如堂、白河法皇女院の離宮に遷し、文明九年又今出川の寺に移り、足利義政亦た原寺に回し、それより幾多の星霜或は火に焼かれ、或は兵亂に逢ひ、つひに此に堂を造營して一萬五千餘坪の主人公となるに至りしものなり。

銀閣寺 鹿ヶ谷の北に在り、慈照寺と稱する禪宗にて、人も知る足利義政の別莊なり、東山殿といふ、室内一切の畫は古法眼元信の筆、義滿の金閣に擬して銀閣となせしものなれども、銀箔を鏤むるに及ばずして、義政薨ぜり、薨後遺命を以て寺とせ



黒谷寺



銀閣寺

り、二重層にして上層を心空殿と稱せしは下層を潮音閣といふ、庭園は茶道家相阿彌の造る所にして山水の布置、天下の珍となれり、今の方丈即ち義政の館趾なりと東求堂は義政の持佛堂にして觀世音を本尊となす、堂中に在る四疊半の茶湯の間は茶席の濫觴なり、

大文字山 俗稱にて、本名は如意ヶ嶽なり、往古淨土寺回祿の時其本尊飛て此山に至り光明を發したりとの故事により、毎年七月十六日火を山腹に點せしが、弘法寺はじめて火を大字形に燒きて、寂覽に供したり、其後久しく中絶せるを、足利義政の代相國寺の横川和尚及び芳賀掃部二人に命じ之を再興せしめ、繼續して今日に至る明治に至りて八月十六日となれり、

樓門の瀧 大文字山の山上に如意寺の舊跡あり、其樓門の側に在りし瀧なりとて、今に樓門の瀧といふ瀑布あり、

大興寺 禪宗、後鳥羽天皇の勅願所、本尊藥師如來は運慶の作、關羽像は足利尊氏の軍神にして宋より渡來せしものなりと

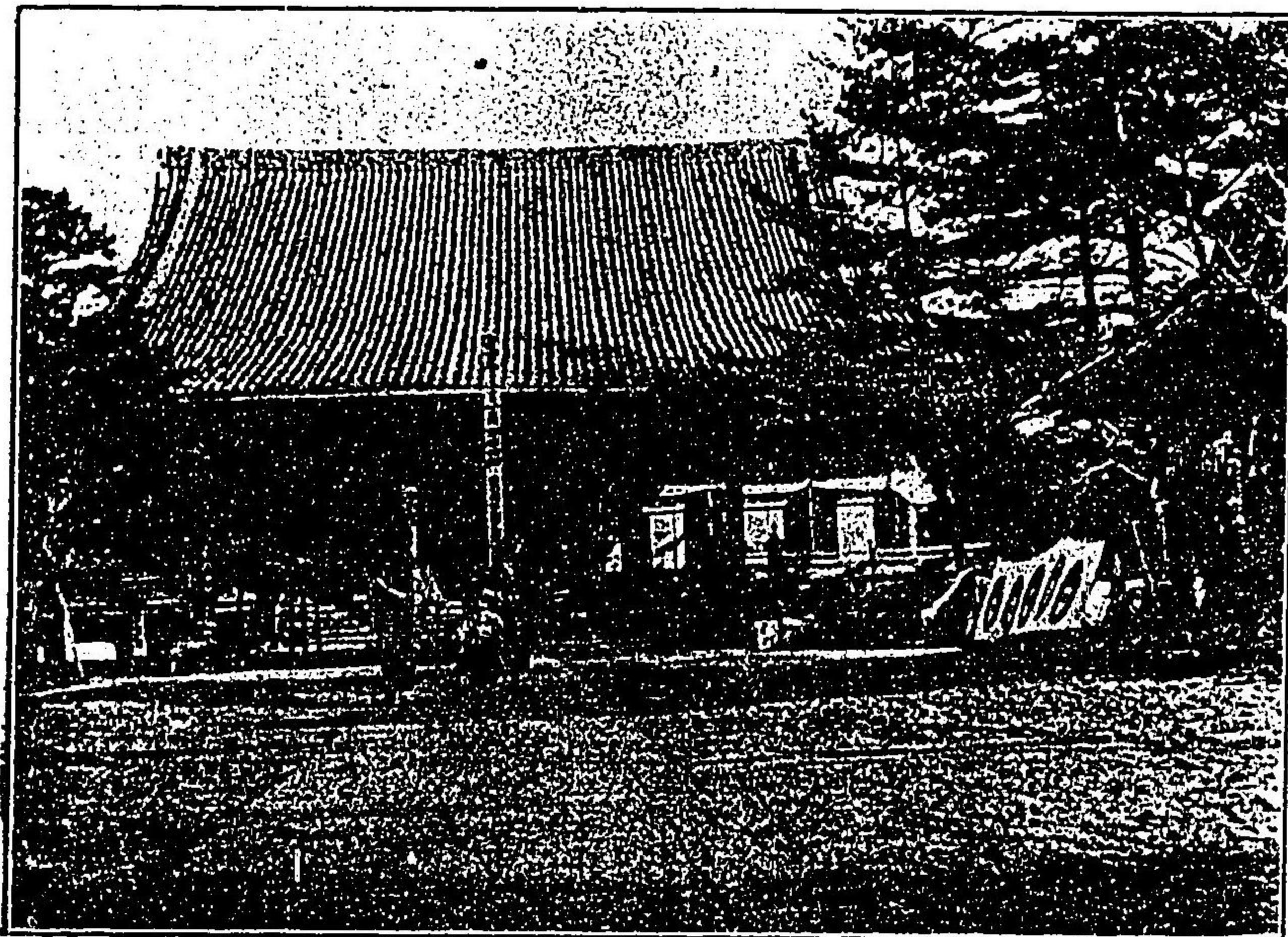
東北院 時宗、本尊辨財天は傳教大師の作にして、平安京開闢の際王城鬼門の鎮護として建てられし寺なり、比叡山開基以前なるべし、中古時宗となれり、

吉田神社 神樂岡に在り、官弊大社、本殿に武甕槌神、經津主神、天津兒屋命、姫神を祭り、本殿の東西に日本國中の神祇を、其國名及神社の數を記して鎮坐す、本殿の「日本最上日高日宮」の額は嵯峨天皇の宸筆、「大元宮」の額は後土御門天皇の宸筆、「日本國中三千餘座天神地祇八百萬神」の額は清水谷實秋の筆、本殿の後の八神殿の額亦御土御門天皇の宸筆なる由、此神殿は大内裏の時神祇官に在りしを、豊太閤聚樂邸を築くに際し、此地に移したりと、廣潤なる境内、莊嚴なる社殿、日本各神社の總本家たるに背かず、

百萬遍 神樂岡の西北に在り、智恩寺といふ、淨土宗四本山の一にして、慈覺大師の草創、加茂上下の法樂修法の寺なり、初め神宮寺と稱す、初め今出川に在りしを、足利義滿相國寺建立の時之を移し、再三轉して今の地に移る、法然上人が賀の神勅によりて住持弘法されしより、淨土宗となれるなり、後醍醐天皇の御宇、天下疫癘大に流行せし時、當時八世の善阿上人念佛すること一七日、一百萬遍に至りて、惡疫漸く止みしを以て、叡威あり、百萬遍の號を賜ひ、爾來百萬遍と稱するなり、之と同時に則りし弘法大師筆六字の名號は、其字畫の餘る處皆劍を附す、利劍の名號とは是なり、



吉 田 社



眞 如 堂

千菜寺 百萬遍の北に在り、光福寺と號す、豊太閤に千菜を多く献せしより、千菜山の號を賜はり、千菜寺と稱せり、六齋念佛を執行す、

將軍塚 桓武天皇鄭都の始め、八尺の土偶に鐵甲を裝ひ之に弓箭を携へしめて、東山の嶺に埋め、王城の守護神たらしむ、塚上凹形にして、老松簇生し、洛陽一目の眺望に富む、

將軍地藏 北白川の東北瓜生山に在り、本尊地藏菩薩を青石の面に刻す、由來不詳、

北山御坊 一乘寺村に在り、眞宗本派本願寺別院なり、親鸞上人比叡山に在りて、一宗開發に志あるや、山を下り境内の鑿水に浴し、京都の六角堂に詣するを例としたりしより、後此地に寺を建てたるなり、

芭蕉庵 一乘寺村に在り、金福寺といへる寺の後丘に在る一字の草庵なり、むかし金福寺の僧鐵舟、芭蕉の俳句を開き、忘機逃禪の境に入りたりしかば、屢々同寺に招聘して寄宿せしめたるより、この草庵を斯く名づくるに至りしなりと、

詩仙堂 一乘寺村に在り、石川丈山の遺跡として有名なり、漢晉唐宋の詩家三十六家を撰み、三十六歌仙に擬し、三十六詩仙と稱し、狩野尙信をして其像を畫がしめ

自ら其詩を之に書したる故に名づく、

圓光寺 禪宗開基は三要和尙、足利學校第九世の僧なり、

曼珠院 一乗寺村に在り、門跡にて山門の庵主なり、竹裏門主といふ、

八瀬天神社 八瀬村に在り、古き祠なれど鎮座の由來を知らず、鬼ヶ洞古跡あり

魚山勝林寺 大原村に在り、大原寺ともいふ、淨土宗には最も記憶すべき法然上

人の大原問答は實に此寺に於て行はれしなり、此あたり八瀬大原とては、京に田舎あり』とうたはれたる京都の在所なり、

淨蓮華寺 勝林寺の東南に在り、開基は良忍上人、融通念佛濫觴の道場なり、如來

藏獅子石は當寺の奇跡なり、

魚山三千坊 淨蓮華寺の東に在り、天台宗開基は良忍上人なり、慈覺大師入唐の

時、大原魚山にて梵唄聲明を傳來り之を山門に傳ふ、良忍之を中興し當寺を開き長

く聲明の本山とす、今尙大原聲明と稱せり、大原の名は唐の大原に起るものか、

音無の瀧 三千坊の東に在り、飛流直下六丈、濶二間五尺

古知谷阿彌寺 勝林寺より十八町、淨土宗禪誓上人の開基なり、堂後の山上に開

山窟、禪公窟、證掛松、自然石の佛像等あり、

寂光院 古知谷の南に在る淨土宗の尼寺なり、平家滅亡の後建禮門院の閑居し

玉ひし地なり、建禮門院阿波内侍の影像を安す、平家物語に有名なる大原行幸の條

は此地のあはれを寫し盡して遺憾なし、

雲母阪 京都の方より叡山に登るは此邊より始まる、傳教大師開基の雲母寺と

いふ寺あり、石川丈山の筆の雲母寺と題する額あり、

比叡山 滋賀縣近江國に屬す、日枝又は比江といふ、傳教大師延曆寺を建立あり

しより歷朝の叡信淺からざるが故に比叡の字に改めしなり、と、平安城の東北に當

るを以て良峯とも稱せり、最高の處を四明嶽と呼ぶ、延曆寺は平安城の鎮護として

傳教大師勅命により建設せし天臺第一の大刹なり、中古寺運の隆盛なりし時代は

叡山三千坊と稱し、寺領廣大、伽藍莊麗なりしが、信長の一大打撃に忽ち灰燼となり

今は大に衰頽せり、しかも堂塔伽藍當年の面影を存するものなきにあらざ、官幣大

社日吉神社の千年の面影を留むるも何となく珍らしうこそ、心あらば勇を鼓して

登臨の價値は十分なり、

洛北の部
鴨川 京都をして山紫の名を全からしむものは東山にして、水明の名に耻ぢざ

らしむるは鴨川なり、鴨川と東山とは京都といへる美しき子を産みし父母なるかな鴨川本名は加茂川なり、源を愛宕郡岩屋の山陰より發し、鞍馬貴船の二川を合し、加茂に至りて高野川を併せ南流して京都市を貫ぬき、下鳥羽に至り桂川に入るなり、夜三本木の客樓に在りて川千鳥を聞く、真に何ともいはれぬ趣あるなり、

糺 『たゝす』は鴨川の高野川を合する處の地名なり、其處の川を糺河原といひ其處の森を糺の森といふ、維新前の勤王家寺島刀山今様あり、川風寒く千鳥啼く、糺の川に霧たちて、大内の方は見えわかず、名高き名所なり、

松ヶ崎本涌寺 日蓮宗日生上人の開基、大黒天を安置す、靈驗顯著なりと、

妙法山 日像上人開基の松ヶ崎妙泉寺といふ、日蓮寺の後の山の名なり、毎年八月十六日の夜妙法の二字を焼きて聖靈會の送火とす、大文字山と兄弟なるべし、寺にて題目踊といふ盆踊めきしことあり、

岩倉實相院 北岩倉に在り、天臺宗、知辨僧正の開基にして圓融天皇の勅願所なり、行基作の觀音を安す、元岩藏山大雲寺といひし名殘にて本堂に大雲寺といへる佐理筆の扁額を掲けたり、

北岩倉 岩倉といへる地名は、奠都の際王城の四方に石藏を作り、之に經王を納

められし所を岩倉といふにて、此地は北の部なれば北岩倉といふなり、他の東西南亦たこの山來に外ならず、

鞍馬寺 鞍馬山腹に在り、天臺宗、開基は鑑真和尚なり、佛殿は延暦十六年藤原伊勢人の草創にて毘沙門天を安置せり、堂前七十八段の石階樓門に至るまで八丁、樓門の額は粟田尊證法親王、金剛力士之を護る、空也上人舊跡、僧正ヶ谷、牛若背競石、不動堂、太郎坊社等あり、千年の老杉、百奇の巨石、此山また一登臨の價値あり、

貴船神社 鞍馬の西、貴船村にあり、水神罔象神を祭る、官幣中社、奥の社に龍王の瀧あり、雨乞雨止を祈る、拜殿の傍に南北二間、高一間の船形に石を積みしものあり、之を御船といふ、

御菩薩池 往昔地藏菩薩出現したりとの口碑あり、今に此あたりの村民地藏會を行ふ、

大悲山圓通寺 幡枝にあり、禪宗、本尊觀音は西國三十三ヶ所の一、

由岐神社 大己貴命、少名彥命を祭る、拜殿は豊太閤建立、

岩谷山金峯寺 愛宕郡出谷村の北にあり、京都より六里といふ、役行者の創建なり、

棧敷ヶ嶽 岩屋の北三十丁余惟喬親王眺望の高閣ありしところ、に登臨すれば山城の界及び大阪のあたりまで見ゆることありと言傳ふ、

上加茂社 下鴨より鴨川を溯ること半里の所に在り、祭神は別雷神にして官幣大社、垣武奠都以前の名社なり、社殿の結構、蒼古謹嚴、競馬の神事は加茂の競馬として世に名高し、

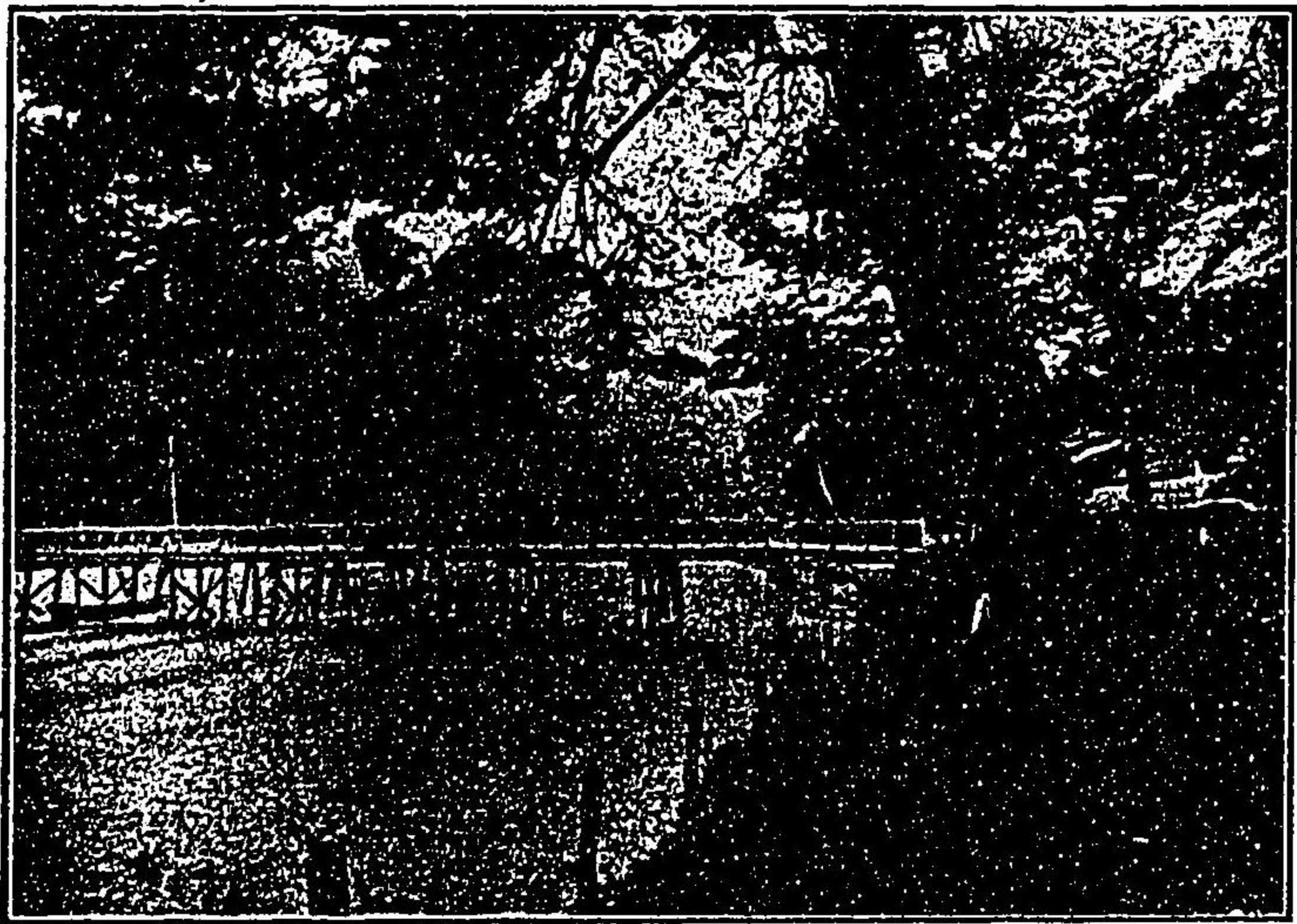
下加茂社 糺森の彼方に在り、祭神は王依毗賣命、大山昨神にして官幣大社、王依毗賣命は上加茂別雷神の御母なりといふ、社殿は天武天皇白鳳六年の建立にして樓門の左右に廻廊、神殿は二殿双立して南面、樓門内に比良木神社あり、此所に諸木を植ゆればみな柀木に化するといふ、井上社、雷殿、細殿、橋殿等、其他攝社多く、殿堂數十莊、嚴無比の大社なり、葵祭は欽明天皇の御宇に始まり、有名なる祭禮なり、五月十五日の神事にして祇園會と共に京都の偉觀、他の地方に於て見る能はざる所なり

西北之部

太秦廣隆寺 太秦は『うづまさ』といふ、推古天皇十一年聖德太子其侍臣秦川勝に命じて建立せられたる古刹なり、はじめ蛸國寺と號す、上宮王院には太子三十三歳



下 加 茂 社



嵐 山

手刻の像を安す、着御の衣冠は御年忌又は破損の時、朝廷より新調あり、今の衣冠は明治二年、千二百五十年忌に際して、今上天皇より御寄進あらせられしやなり、桂宮院は八角堂にして奥の院と稱し、太子自から土木を搬び給ひし宮殿とぞ後に梵宮となしたるなり、隋煬帝より贈られたる阿彌陀如來を安置す、今の伽藍は保元中藤原信賴勅を奉じて建立せし所といふ、假金堂には新羅國王献納の彌勒佛、百濟國王献納の如意輪觀音を安す、其他什寶は年代に於てはいづれも東洋の珍寶にして、巨勢金岡筆の十二天像、十二幅奏、致實筆の聖德太子繪傳、陸信忠筆の十王地藏、印度毘須羯^毘作の毘沙門天、芝琳賢筆の地藏厨子扉の繪、土佐行長筆の能雲法師繪傳、足利義輝筆の十七條憲法、聖德太子の軍配扇等あり、太子堂前の石燈籠は石燈籠の根元にして、太秦形と稱し、石工の模形とする所なり、

嵐山　大堰川の南岸に在り、櫻楓の名所にして、蒼々たる青山、綠樹の間に點在し、下には急流の過ぐるあり、四季の仙境此地に過くるは無し、櫻花は芳野と並び稱せられ、初夏の新緑、躑躅の時節亦た悪しからず、渡月橋、千鳥ヶ淵、戸無瀬瀧、淺黄櫻、嵐山城趾、夢想國師の坐禪石、大悲閣、惠心僧都作、角倉了意の碑、保津川、淺鑿の人なり、林羅山の撰文、嵐山温泉等見るべき所一にして止まらず、丹波の龜岡より舟を舩し、大堰

川を下りて此絶勝を賞すべし。

法輪寺 渡月橋の南に在り、本尊は空虚藏、京都の男女年齢十三歳のもの皆な此に參詣す、之を十三詣といふ、以前葛井寺といへり

天龍寺 下嵯峨に在り、臨濟宗五山の一なり、足利尊氏の本願にて後醍醐天皇追福の爲めに建立せしものなり、開基は夢想國師なり、以前此地に壇林寺あり、壇林皇后の建立なり、其後後嵯峨上皇の仙洞となり、龜山天皇の宸居となり、年を経て荒廢したるを修し、此大寺を建立せしなり、佛殿の本尊は釋迦佛にして、足利尊氏の像及び尊氏平日安持の地藏菩薩あり、雲居庵、多寶庵、金剛院等相連なる、多寶庵には醍醐天皇の廟あり、塔中に御冠を藏すと云、寺域三萬七千三百餘坪

臨川寺 大堰川の北畔に在り、禪家十刹の一、龜山法皇の仙居たりし地なり、

鹿王院 臨川寺の東五丁許、禪家十刹の一、什寶に佛舍利の名珠あり、

小督塚 大堰川の北岸に在り、高倉天皇の寵姬小督の大内を遁れ隠棲したる所といふ、塚には櫻あり、傍らに仲國塚あり、後の好事家の建てたるものならん、

常寂寺 法華宗にて、常寺の什物に車琴とへる名琴あり、高倉天皇が小督に賜ふ所なりといふ

小倉山莊 歌人藤原定家山莊の跡なり、常寂寺仁王門の北に小祠あり、定家を祭るといふ、

龜山 天龍寺の西北に在り、其形龜甲の如きを以て名づく、後嵯峨、龜山諸帝の住み給ひし地なり、

野の宮 常寂寺の西南に在り、祭る所は神明なり、此所は昔伊勢の齋宮の赴任前移り住まるゝ所なりしなり、皮附の木を以て鳥居を作る、俗に黒木の鳥居といへり
小倉山二尊院 小倉山に在り、天台、真言、律、淨土四宗の兼學にて、開基は未詳、法然上人の中興なり、上人此山に閑居し三昧發得し末代一宗機範の式七ヶ條を定め都鄙の附弟を召し、九十三人自筆に各判を書せしめたり、寺中に龍女池あり、西行法師の舊跡を存す、

伊藤仁齋の墓 古儒教の泰斗伊藤仁齋の墓は二尊院の境内に在り、

長明神社 二尊院門前に在る小祠にして、壇林皇后を祭る、皇后深く佛道に入り其終焉に及びて御遺骸を嵯峨野に捨てしめ、見る者をして無常變化の理を示し、且つ又其爛懷の相に愛執を離れしめんとし玉ふ、狼犬群集して四肢所々に離散す、此所は髻髪を止むる處なりと、後人之を祭りて長明神と稱す、

愛宕神社 愛宕山上に鎮座す、祭神は伊弉册尊、火産靈尊に雷神、破天神を合祀す。當社も亦た佛者の勸請なるを以て寺院に屬し、朝日山白雲寺と號せしが、維新後に至りて愛宕神社となる。山麓に一の鳥居あり、試峠、清瀧川、渡猿橋、愛宕の原を経て鐵の鳥居に至るまで五十丁百十八段の石階あり、之より上七十三段の石階を経て本殿に達す。伊勢參宮より歸るものは必ず當社に參詣するを常とせり、火防神なりといふ。

月輪寺 愛宕の山腹に在り、龍女水、白石、日暮の瀧、高野の瀧等あり、

水尾山寺 愛宕山一の鳥居の左傍より五十町、清和天皇崩御の後法會を行ひし處といふ、

祇王寺 上嵯峨に在り、清盛の妾及祇王を初めとし、祇女、母刀自佛等の隱遁せし所なりといふ、

横笛の歌石 瀧口入道の情人横笛の歌石は、祇王寺の南、三寶寺といへる淨土寺の門前に在り、

淨息院 中院の西北に在り、眞言宗、堂門に安ずる閻魔像の鬚は小野篁の鬚を植へたるものなりといふ、

廣澤の池 太秦西北に在り、帷子辻より三丁許東西二丁南北一丁の池なり、月の名所なり、

大澤の池 廣澤の池の西北五丁許に在り、嵯峨天皇の離宮に屬せしものなり、池中に島あり、菊島といふ、其島に在る庭湖石といふ奇岩は巨勢金岡が立てたるものといふ、

大覺寺 大澤池の西に在り、眞言宗、嵯峨天皇の離宮の在りし所なりしを、淳和天皇寺として給へり、本尊五大尊は弘法大師の作なり、嵯峨の大覺寺といへば洛西の名刹なり、

嵯峨の釋迦堂 大覺寺の西三丁許に在り、清涼寺といふ寺なり、本尊釋迦如來は五尺餘の立像にて赤栴檀の釋迦と稱し、印度の毘首羯磨の作、釋迦在世に寫したる生身の靈佛なりといふ、これ永觀年中南都東大寺の僧齋然宋に渡りたる時得たるものとなん、山號を五臺山といふ、文珠の靈場を擬したるか、本堂の東に阿彌陀堂あり、此地往昔嵯峨天皇の離宮にして大覺寺と連続せり、清和天皇住み玉ひし事ありと、嵯峨天皇第十の皇子河原左大臣融此地に山莊を設けて栖霞館といひしを後に寺と爲し、とかや、

五大堂 釋迦堂の西南に在り、眞言宗、嵯峨天皇の勅願所なり、五大尊を安置す、中古火を失して二尊を失ひ、新たに作りたるものを安置せり、不動尊、大威徳尊、軍陀利夜尊の三尊は弘法の作のまゝなりといふ、

三塔 五大堂の前に在り、三寺とは嵯峨天皇塔、檀林皇后塔、河原左大臣塔の在る故に名づけしなり、

八宗論池 往昔弘法大師、諸宗の僧と此池畔にて大問答を爲せりと言ひ傳ふ、

梅尾山高山寺 華嚴宗にして眞言宗を兼ね、開山以來荒廢せしを高雄の文覺上人再建せんとして中道にして逝き、有名なる明惠上人、其後を受けて中興せり、北條

泰時の歸依せし僧にして日本製茶の祖なり、宇治の茶園は當寺より移せしものと

いふ、梅尾、横尾、高雄を三尾山と稱して紅葉の名所たることは誰も知る所なり、紅葉青山水急流の好風色天下第一と稱するも過譽にあらず、

横尾山西明寺 梅尾の西四丁餘、律宗にして眞言宗を兼ね、智泉法師開基、正忍律師中興、三尾中最も楓樹に乏しけれども幽雅の趣は勝れり、

高雄山神護寺 横尾の西南四丁許、眞言宗、光仁天皇の御宇和氣清麿奏し請ふて之を創立し神願寺と號す、淳和天皇の天長二年弘法大師に賜ひ、神護國祚眞言寺と

名つけらる、寺域二万八千坪、樓門の額は仁和寺覺信法親王の筆、全堂の本尊藥師佛は白檀にて弘法大師の作、講堂の五大尊亦た同じ、納涼坊は弘法の住坊なり、弘法の像を安置す、文覺上人の坐像もあり、三尾中最も楓葉に富むは本山にして所謂高雄の紅葉なり、

御室仁和寺 光孝天皇の勅願所にて、眞言密乗の巨刹、仁和四年八月の創建なり、後に宇多天皇寛平法皇となり給ひて此地に宮居し給ふ、故に御室又は大内山の號あり、爾來代々法親王の法務を執り給ふ所なり、維新前までは故小松宮彰仁親王が門跡たりしなり、門跡號の初まりは此寺なりといふ、山門、中門、金堂、祖師堂、東壇觀音堂、經藏、五重塔などいづれも莊嚴なる建築なり、法親王の舊殿舎は頗る莊嚴なるものなりし由なるが、十四五年前回祿の災にかゝり、今の殿舎は新築なり、寺域十萬六千坪、境内櫻樹を植ふ、御室の櫻の名人の艶稱する所なり、其櫻他所の櫻と異なり、幾多の年所を経るも幹身延長せず、樹々皆な根邊より花を着く、老大なるものは地を這ふて蟠屈曲折亦た一奇觀なり、『嵯峨や御室の花盛り』とは京都文學の特産文字なり、

五智山 昔は仁和寺別院なりしが、荒廢年久しうして明暦中の再興なり、山上に

石彫の五智如來坐像六尺許の物を安置す、いづれも單稱法師として佛工の名手たる木食行者の作る所と聞く、

双の岡 一の岡、二の岡、三の岡とならべり、吉田兼好の古蹟、

法金剛院 双の岡の東南に在り、故に双丘寺、又は天安寺といふ、眞言天台禪淨土四宗兼學なり、古は此地は清原夏野の別莊なりしと、其二子右大臣瀧雄山莊を作りて代々の天子御臨幸ありしは三代實錄に見ゆ、崇徳天皇の御代、待賢門院之を再興し今の寺號と改まる、

妙心寺 洛西花園村に在り、即ち法金剛院の東北に當る、禪宗臨濟派の本山なり、左大臣清原夏野の別業にて子孫相襲て領せしを花園上皇其風色を愛し、時の領主清原良枝に轉地を賜ひ、離宮とし玉ふ、上皇禪法に歸し給ひしより寺となし、關山國師を改山となし、正法山好心寺と號す、爾來御歴代の御崇信淺からず、寺域五町四方あり、殿堂の宏、伽藍の麗、洛中有數の巨刹なり、山門の閣上には觀音大士及月蓋長者善財童子十六羅漢を安す、佛殿の本尊は釋迦如來にして大佛師覺清の作、天井の龍は狩野探幽が全幅の精神を籠めて揮筆せし所にして極彩色なり、筆力古今無双と稱せらる、大方丈の額は明の張即之の筆、襖は狩野探幽及ひ同益信の筆なり、祥雲殿

靈舎は豊太閤の嫡男棄君の棄姫の像あり、武田信玄、同勝頼、同信勝、同信豐、織田信長、同信忠等の塔あり、玉鳳院禪宮には花園天皇の法衣の像を安置せり、内陣の螺鈿の唐戸は唐玄宗皇帝居殿の具なりとの傳あり、其他枯華室、紫銅二重塔、加羅木の觀音毘盧藏、經藏にて一切經を藏す、黃鐘の古鐘、文武天皇即位二年の秋製造等古今の名器、建築四十有餘の塔頭に揚げて數ふべからざるなり、

藤原藤房僧堂 妙心寺内の禪堂にして、佛殿の兩塔頭天授の内に在り、一天授院は藤原藤房和尚の開きし所なり、藤房遁世の後諸國を歴遊し歸りて妙心寺の開祖國師に參謁して得法し、授翁宗弼和尚とて妙心寺第二世となり、併せて此院を開けり、後西院天皇よりは神光寂照國師の謚號を賜はり、明治に至り、今上天皇よりは更に圓鑑國師の勅號を賜はりぬ、藤房時代の忠義を思し召されてなり、

明智風呂 妙心寺の浴室なり、塔頭太嶺院開祖宋宗禪師が明智光秀菩提の爲めに創建する所なり、浴室の鐘は徳川家光の乳母にして有名なる春日局が先妣追薦の爲め納めたるものといふ、

佐久間象山の墓 信州の學者維新前の開國論者にて、元治甲子の歲三條木屋町にて刺客の刃に斃れたる佐久間象山の墓は妙心寺の塔頭大法院に在り、

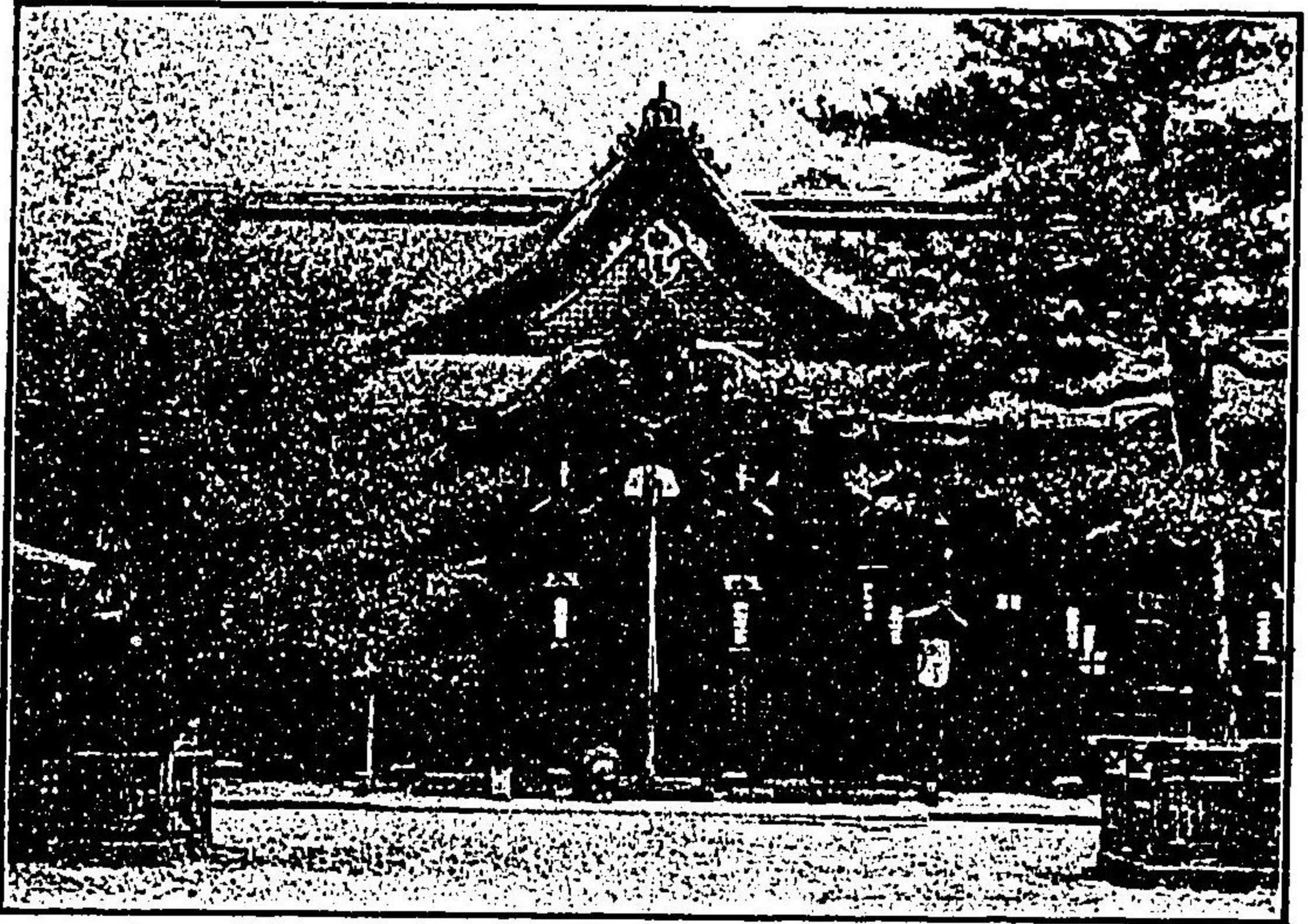
等持院 絹笠山の麓に在り、禪宗、夢想國師の開基、足利尊氏の建立、佛殿の北の昭堂には足利累代將軍の影像あり、衣冠持笏帶劍の坐像なり、維新前志士三輪田等が其首を斬りて三條大橋に梟したるは此木像なり、今は接合して依然存す、中門の等持院と題せる額は足利義滿の筆なり、

足利尊氏の塔 等持院境内昭堂の西に在り、高山彦九郎が鞭ちたるものなり、尊氏の遺骨は其落々たる雄心を抱いて此下に眠る、

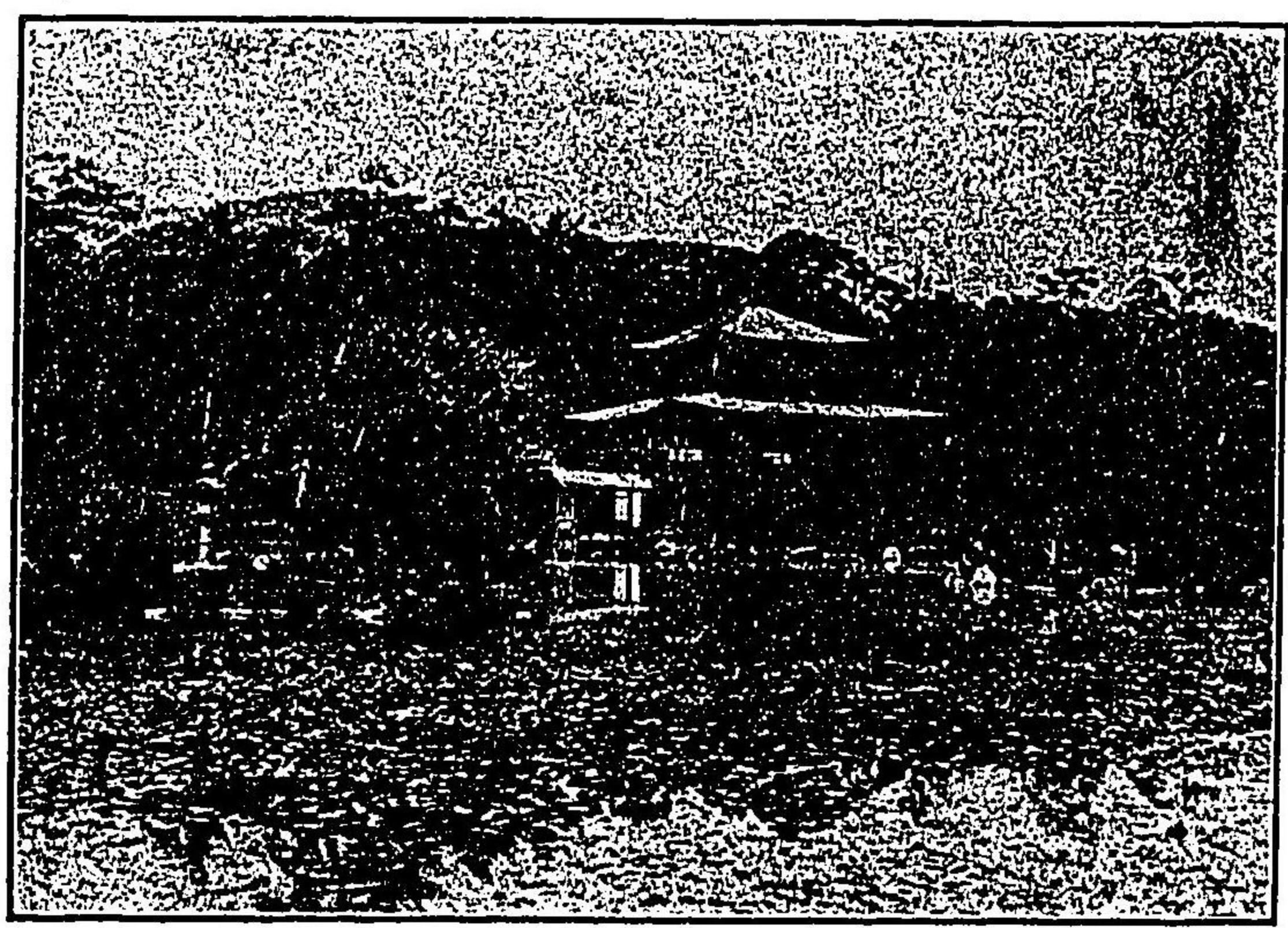
龍安寺 等持院の西に在り、禪宗、細川勝之の建立なり、本堂は東福寺の塔頭の一を移したる者なりと、天井に書ける龍、及び迦陵頻は兆殿司の筆なりと、方丈は勝元邸の書院にして、前底の築山は勝元の作る所、此池に冬季鴛鴦來遊す、龍安寺の鴛鴦とて有名なり、

絹笠山 等持院の後山なり、寛平法皇御室に在り、炎天に深雪の眺望を作らんとて、此峯に白絹を掛けさせ給ひしとかや、一名絹掛山といふ

北野神社 所謂北野の天滿宮にして、官幣中社、菅原道真を祭る、村上天皇天曆元年右京七條坊の小女文子なるもの右近の馬場に居らんと、菅公の夢の告げを受けたりとて、小祠を北野に建つ、全九年江州朝日寺の僧最珍來りて文子と力を戮せ



北野天滿宮



金國寺

靈社を作り天満天神と崇む、天徳三年藤原師輔大厦を改築す、それより社殿次第に宏壯に越き攝末社の堂宇一萬二千坪の境内に充滿す、三光門の額は西院天皇の宸筆、神前の大鏡は加藤清正の寄附、境内に梅樹多し、菅神の愛木といふに因みてなるべし、

上七軒 北野神社の東に在る遊廓にして祇園先斗町に亞ぐ、

椿寺 北野下の森の西五六町の所に在り、椿の大木あるを以て世人椿寺と稱す、

天野屋利兵衛墓 忠臣藏にて有名なる天川屋義平の墓は此に在り、賽人多く、百年香火斷えず、

平野神社 官幣大社にして、祭神は日本武尊、仲哀天皇、仁徳天皇、天照大神の四座、古來櫻の名所なり、篝火天を焦がすとき所謂平野の夜櫻とて美觀なり、

金閣寺 平野の西八九丁に在り、足利義滿退隱の地にして北山殿即ち是なり、三重の閣を金箔にて鍍む、故に金閣寺といふ、屋根は寶形造にして棟に鳳凰を安す、下層を法水院といふ、本尊は運慶作の阿彌陀佛なり、中層は潮音洞といふ、木造の岩洞あり、惠心作の觀音を安す、上層を究竟頂といふ、額は後小松帝の宸翰なり、四方椽は欄干擬寶珠にて内外屋根裏天井勾欄とも金箔を鍍む、勾欄は悉く剝けて金光幽に

存せり天井板は稀有の大木、閣下の池を鏡湖池といふ、夜泊石、九山、八海石、赤松石、島山石等の奇石池中に點在す、岩下水龍門瀧、鯉魚石等あり、丘山の池を白蛇池といふ、夕佳亭は金森宗和の好匠に出づ、

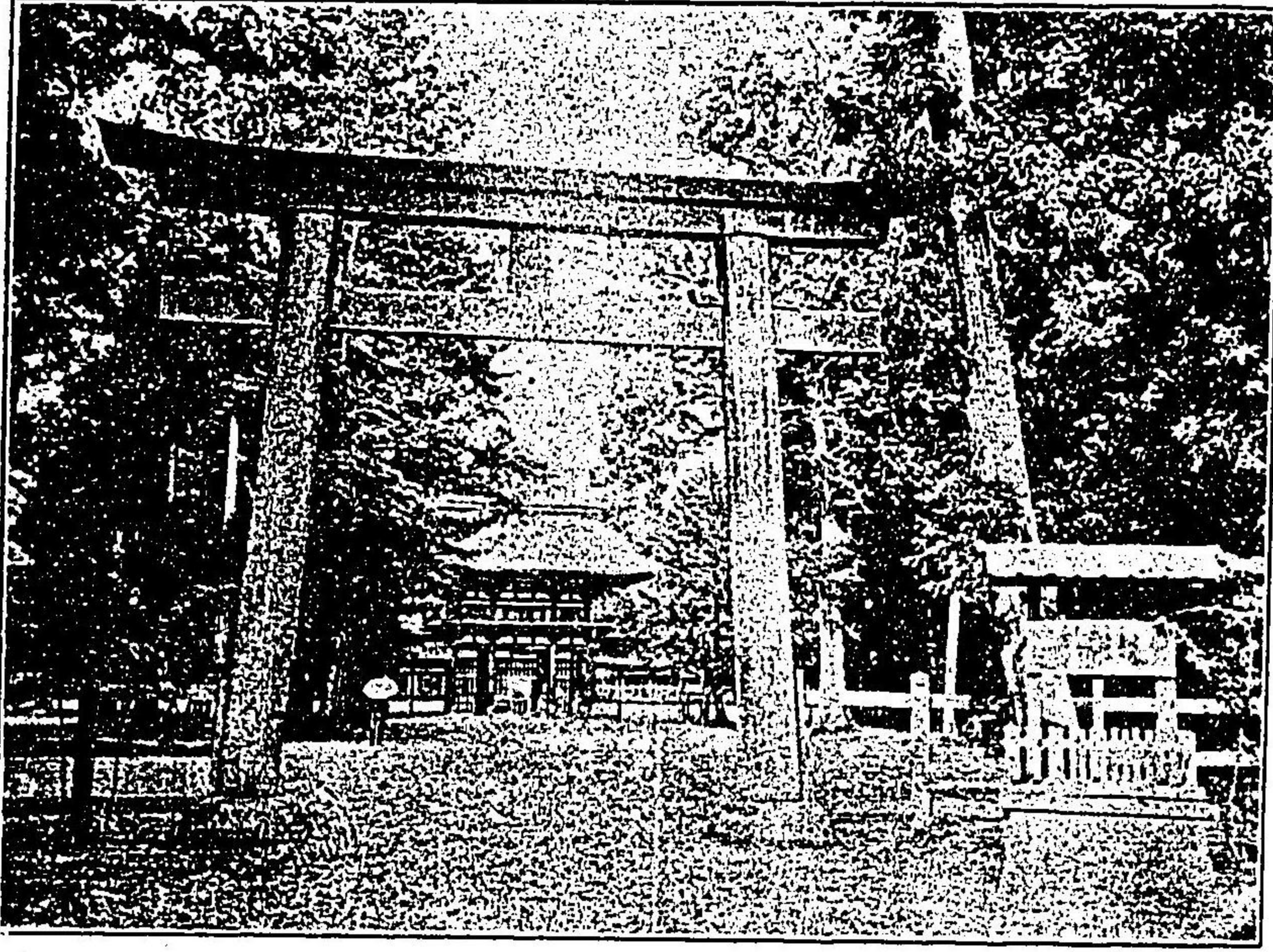
鏡石 金閣寺の北、紙屋川上にあり、石面水晶の如く影を寫すを以て名づく、

建勳神社 舟岡山東麓に在り、祭神は織田信長、明治十四年の造營、別格官幣社、

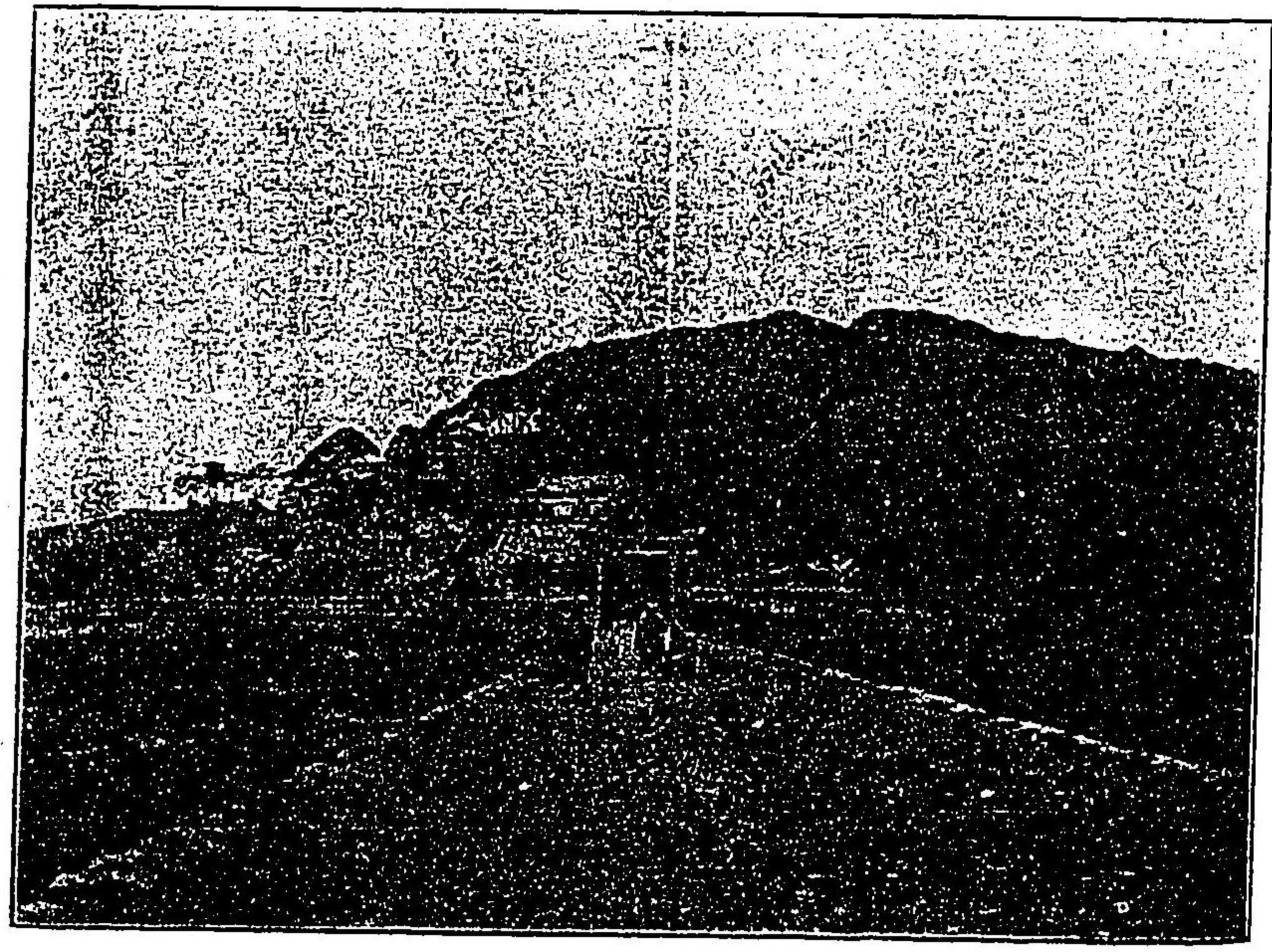
舟岡山 紫野の西に在り、舟の形に似たるを以て此名あり、

今宮神社 一條天皇の御宇はじめて舟岡山に祭られしを、後に今の紫野に移せり、故に五月十五日の例祭には舟岡山の旅所に神幸あるなり、祭神は事代主命、大己貴命、稻田姫の三體にして、攝社に素盞鳴尊の祠あり、

大徳寺 紫野に在り、臨濟宗、開祖大燈國師はじめ、東山の雲居庵(今の高臺寺の地)に在りしを、元應元年赤松圓心黄金を贈り、紫野に一小院を建てしむ、正中元年師の徳天聰に達し、後醍醐天皇より龍寶山大徳寺の號を賜はり、朝廷第一祈禱所と稱せしめらる、佛殿を大雄殿といひ、本尊は釋迦佛なり、總門を入りての勅使門は御所の陽明門を明正天皇より當寺に賜ひしものなり、山門は三解脱門といふ、連歌師宗長の修造せし所にして、其閣を金毛閣といひ、千利休の造營に係る、釋迦、阿難、迦葉及十



上 加 茂



建 勳 社

六羅漢を安せり、唐門は明智門といふ光秀の建立なる由、日暮門は豊公聚樂帝の舊門なり、大徳寺焼香は豊臣氏覇業の第一階段にして、大閤記には之を特筆せり、什寶の名畫勝げて數ふべからず、塔頭二十四、寺域六万八千四百坪、檜や松や蔚然蒼然、禪寂無塵の大道場也。

眞珠庵　大徳寺の塔頭にして、方丈の北に在り、有名なる一休禪師の開基なり、一休の舊庵は厩驢軒と稱し、其遺物頗る多し。

西南之部

梅宮神社　西梅津に在り、官幣中社、祭神は木花開耶姫、大若子神、小若子神、酒解子神の四座にして、孝謙天皇の天平寶字年中此地に祭りて鎮護神とす、昔檜林皇后此社に御祈ありて、仁明天皇御誕生ありしとなり、今も婦人の産月には必ず當社の砂を取りて襟帯に佩ひ平産を祈るは此遺風なりとなん。

長福寺　東梅津に在り、禪宗、はしめ天台宗なりしを梅津左衛門清景なるもの、月林和尚を尊信し禪寺と爲せりと、和尚は元に航して文宗皇帝より佛慧智鑑大師の敕號を受け、滅後七年後村上天皇より普光大幢國師の號を受けし名僧なり、
松尾神社　四條通より西二里に在り、官幣大社、祭神は大山咋神、市杵島姫の二座

なり

和銅二年加茂より移し、大寶元年其初殿を創建す、攝末社多く山上山下に散布せり、世に造酒の神とて酒造家の尊信する所なり、毎年五月の祭禮には神輿七基西七條の御旅所より桂川を船渡す、是れ仁明天皇承和五年にはじまる古式なりと、正殿の西十丁許を別雷峯といふ巨岩あり、洛西第一の大社なり、

月讀社 松尾七社の一、本殿の南二丁許に在り、痘瘡の神なり、

明智坊の像 松尾の北一丁に在り、明智坊といへるは山門の碩徳なり、ある時諍論の爲め此邊に盤居し、臨終の時其弟子に語り怨を酬はん爲め、像を造りて山に向はしめたりと、

西芳寺 松室村に在り、禪宗、行基の開基はじめ西方寺といへり、

眞如親王古蹟 眞如親王は平城天皇の皇子、嵯峨天皇の太子なりしが、彼藥子の變の爲めに儲宮を出て、沙門となり玉ひ、後唐に渡り、八十餘歳にして渡天を志ざし、東印度老撾國に於て虎害に遭て薨去ありし名僧なり、この西芳寺に永く住せられしとなり、

鉄牛和尚古蹟 葉室山下に淨住寺といふ禪宗あり、光嚴天皇の御宇兵燹にかゝ

り二百年の星霜を経しを鐵牛和尚再建したり、而して同寺の本尊は天竺佛の如意輪觀音にて和尚感得の本尊といふ、

西山御坊 川島村に在り、久遠寺といふ、眞宗本派本願寺の別院なり、

桂離宮 桂川の西岸桂村といふに在り、

大江山 山城丹波の界にして、大枝阪といへり、老の阪ともいふ、丹波街道なり、明智光秀の我敵は本能寺に在りと明言せし所なり、彼酒顛童子のこもりしといふは丹後の大江山にあらずして此山なるべし、京都近在を荒らすべく強盜の棲家となせしものか、大福山といふ寺あり、本尊は子安地藏とて慧心僧都の作、その西半町に酒顛童子の首塚といふが有り、

大原野神社 京都より三里、官幣大社、祭神は奈良の春日社と同躰なり、祭神は武甕槌命、經津守之命、天津兒屋根命、姫大神の四座を祭る、仁明天皇の朝、奈良の三笠山より勸請して平安城の守護神となし給ふ、

勝持寺 大原野神社の二の鳥居、西山下に在り、山に櫻樹多きを以て花の寺といふ、開基は役の小角、役行者なり、本尊藥師佛は傳教大師一刀三禮の作、右壇の不動は役行者の作、方丈の地藏は傳教大師の作、常前洞内の石不動は弘法大師作、山門の金

剛力士、阿像、呼像は、運慶作、呼像は、湛慶作、勝持寺の額は、小野道風筆、足利尊氏八幡山合戦のとき、寺僧が竹竿に勝持の旗を記したるを喜び、足利將軍家代々の祈願所となせり。

長岡の舊都 桓武天皇の舊都長岡は今の太原野神社の東南より向日神社の丘西は山を限り、南は山崎の東北に至るまでを稱すならんと云ふ、大原野神社一の鳥居より二丁許に芝生の地あり、土人之を御所屋敷と稱せり、帝城の舊跡ならんか、西岩藏金藏寺 西岩倉に在り、天台宗、本尊十一面觀音、本堂の西南二丁に岩藏の瀧あり。

西山三鈷寺 岩藏の西南二十四五丁に在り、天台眞言律淨土四宗兼學、慈鎮和尚の古跡、名寺なり。

西山善峰寺 三鈷寺の西南に在り、天台宗、寺域三万坪、昔時は五十餘坊ありて非常に繁昌せし由なれども、今は少かに七坊を有して衰退せり。

小鹽山十輪寺 善峰寺の西南五六丁に在り、本尊地藏菩薩は染殿皇后平産の爲め造立し給ふ所なりといふ、佛殿の西三十丁に鹽竈の遺跡あり、在原業平奥州鹽竈の景色を愛し、遠く難波の海水を取りて焼かしむる所といふ。

粟生山光明寺

粟生野に在り、淨土宗西山派の本山にして、念佛三昧院と稱す、本

尊は圓光大師(法然上人)の座像にして、世に張籠の御影といふ、法然上人四國の配所に在り、母堂の消息文を以て自ら作れる像なりといふ、方丈の御鉢の釋迦あり、本寺の開基は熊谷直實入道蓮生法師にして、建久九年の草創なり、山徒の迫害の日法然上人の石棺を其墳墓よりこゝに移せし故を以て淨土宗の宗廟となれるなり。

男山八幡

官幣大社、世に之を石清水八幡といふ、祭神は應神天皇、神功皇后、玉依

姫なり、貞觀二年和州大安寺の沙門行教の建立なり、一の鳥居より二の鳥居、三の鳥居に至るの間、名勝舊蹟頗る多し、上下高良社、耳語橋、太神宮逢拜所、景清塚、平景清源頼朝を刺さんとせし所といふ、石清水、楠公手栽の楠木、神前の橘、影向の櫻等あり、神殿拜殿、玉垣廻廊、其他花鳥を刻り、丹朱を彩り、綺麗壯觀、言語に絶す。

淀 京都を距る三十三丁にして、稻葉氏の舊城下なり、淀の城、淀の川瀬の水車等の名所、今は無し。

鳥羽の戀塚

下鳥羽に在り、遠藤盛遠が架婆の首を葬りたる所ともいひ、或はこ

の邊に池あり、怪鯉人を惱ますを以て殺して池を埋め塚を築く、鯉塚なりともいふ、安樂壽院 竹田街道に在り、眞言宗、鳥羽上皇離宮の地なり、本尊は卍の阿彌陀と

いふ。

(二一八)

寶塔寺 稻荷山の南に在り、はじめ極樂寺と稱す、日蓮宗の名寺なり。

桓武天皇陵 稻荷山の南、栢原に在り、之を栢原御陵といふ。

藤の森神社 神后皇后三韓征伐より歸り、兵器を埋め玉ひしといふ名ある古詞なり。

墨染の櫻 藤の森神社の南一丁にあり、此あたり一面の郊原なり、墨染寺といふ寺あり、豊公衣冠の畫影なり。

伏見 京都より二里半、人口一万七千にして繁華なる町なり、伏見城趾は東方に在り、桃山御殿の趾は桃樹數百株、來遊者頗る多し、山陰に梅溪とて梅花の勝地あり、巨椋池 伏見豊後橋の南五十丁、俗に大池といふ、周廻四里十一丁、池に蓮花多く、また尊菜を産す。

六地藏 大龜谷の東南關山の麓に在り、堂の形六角にして、本尊地藏菩薩は小野篁の作なり、傳に云ふ小野篁一木を以て手づから六躰の地藏を刻し六道能化の姿を造立すと。

東南之部

元慶寺 北花山村に在り、天台宗、本尊藥師佛、陽成天皇の勅願所なり、花山天皇此寺に入りて祝髮し給ふ。

田村將軍塚 栗栖野に在り、阪上田村麿を葬りし所なり、國家擁護の塚といふ。

大石良雄の苳跡 赤城四十七義士の首領大石内藏之助假住居の跡は、山科巖屋明神の鳥居前にありと。

山科御坊 兩本願寺の別院なり、中興の蓮如上人此地にて本願寺を建てられたり、一向教の猶太なり。

醍醐寺 醍醐村に在り、眞言宗、理源大師の開基にして延喜四年の創立なり、醍醐朱雀村上三天皇の勅願所なり、伽藍は山上山麓二ヶ所に在り、山上を上醍醐といひ、山麓を下醍醐といふ、運慶作の金剛力士あり、下醍醐の本堂は豊太閤の建立せし所にして、上醍醐の觀音堂は石階九十段、此間に花見山あり、豊太閤每春遊宴の地なりしと、文祿年中醍醐の花見といふは此地にての事なり。

黄檗山萬福寺 日本黄檗宗の總本山にして、宇治に在り、開基は隱元和尙なり、和尙は明の福州の人、承應三年始めて來朝し、萬治二年來朝、徳川家光此地を寄進し、寛文元年九月より伽藍を草創し、精舎の經營多くは彼土の風を模し名つけて黄檗と

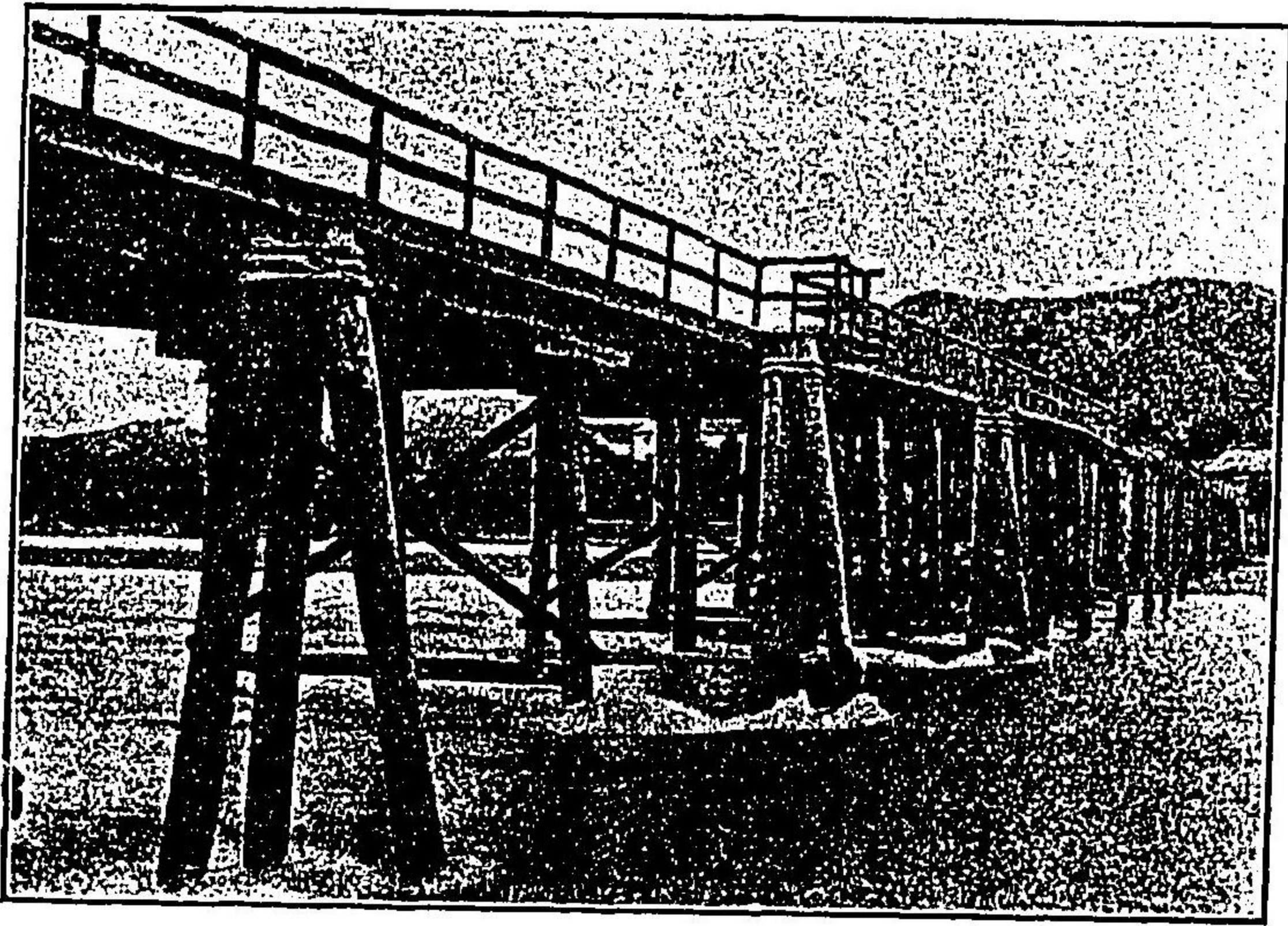
(二一九)

いふ、寺域七万七千三百餘坪、淡門、山門、天王殿、大雄法殿、法堂、鼓樓、祖師堂、撰佛塲、鐘樓、伽藍堂、禪脫室、牌堂、浴室、開山堂、壽藏、舍利殿、華嚴室、藏經印板の倉等、堂宇莊嚴、城南第一の巨刹也。

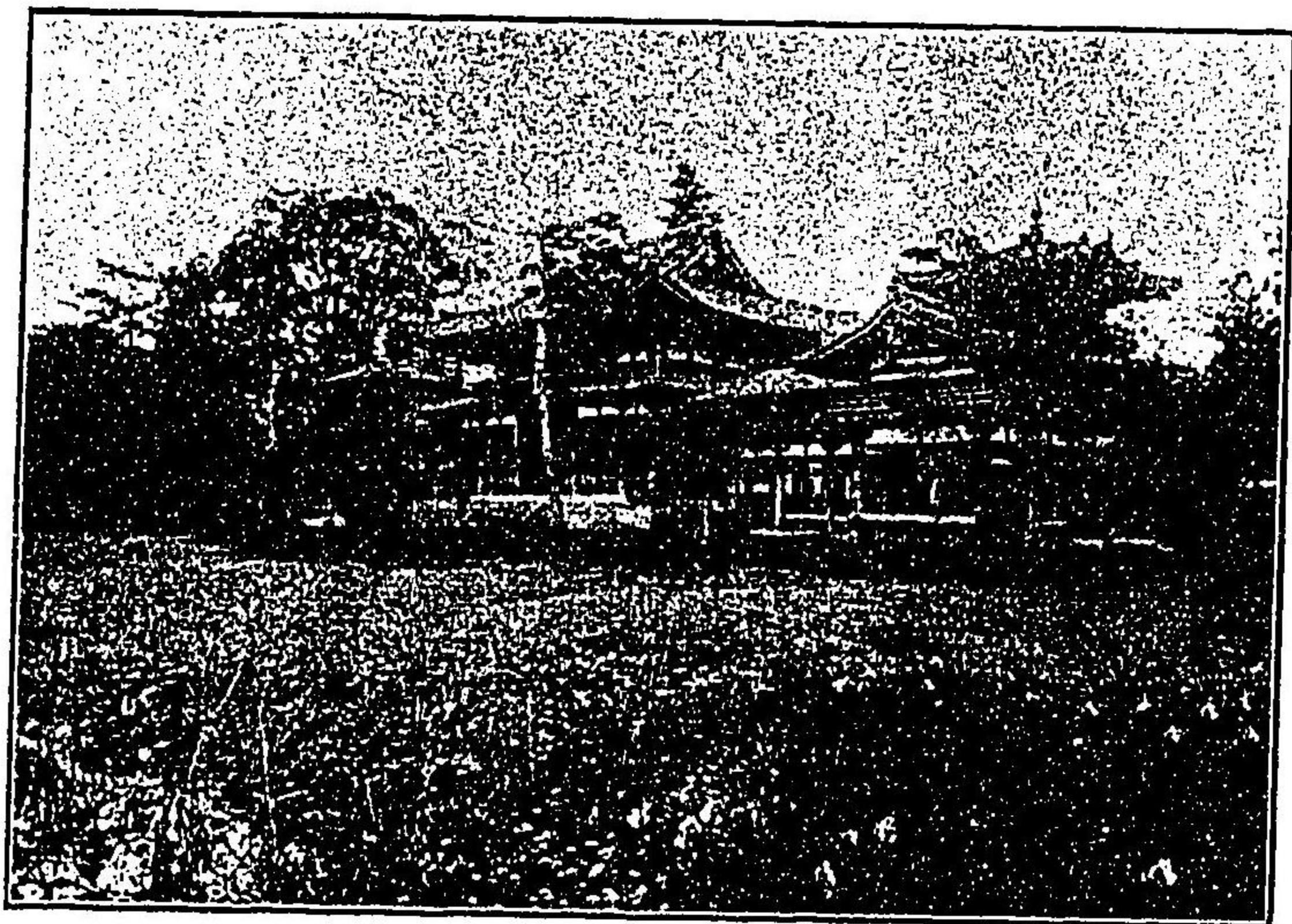
喜撰嶽 喜撰法師が住みし宇治山とは此山なり、山上眺望はなほだ爽快なり、宇治 京都より四里餘、伏見より一里二十八丁、翠巒に對し、清流に枕む、四時の名所、菴を以て名高し、

宇治橋 宇治川に架したる橋にして、孝徳天皇の大化二年、道昭和尚はじめて之を架す、日本の橋のはじめなり、橋下の水清白にして茶を烹るに適す、橋の東詰の通圓の茶店あり、橋南に橋姫社あり、祭神は瀬織津姫、

平等院鳳凰堂 宇治橋の南二丁許の處に在り、宇治關白頼通の草創なり、佛殿の有名なるは鳳凰堂にして、堂の形鳳凰の兩翼を伸たるに似たり、其棟上に雌雄の鳳凰(銅造三尺許)を造て置く、風に順ふて舞ふ、結構莊麗、建築の巧妙なる、内外美術家の嘆賞して已まざる所なり、其模形をシカゴの世界大博覽會に出品してより、其名一層世界に聞こゆ、扇の芝は源三位頼政自殺の所にして、方丈に頼政の甲冑及び畫像等あり、



宇 治 橋



平 等 院

此の如くにして京都市を中心としたる洛中洛外申すに及ばず、丹波近江の境に至るあまねく名所古蹟神社佛閣乃至遊廓芝居までも紹介せり、博覽會觀覽の人が京都に立寄るに便せんとて、すこしく詳に過ぐる程に報導せり、此上なほ記すべきことなきにあらざるも、五畿の名勝を盡さんとする著者の筆は左まで京都にのみ淹留し居る可からず、これより二三の補遺を録して更に他の名區に移らんとす、

疏水運河　京都に遊ぶもの、必ず見ざるべからざるは我邦未曾有の大工事として有名なる琵琶湖疏水工事なり、時の京都府知事北垣國道が計畫起工せし所にして、其目的は舟楫の便を興し交通の利を興ふると共に水力を利用して電氣を起し、以て機械運轉の資に供し、京都市民の爲め無盡の富源を得んとするに在り、明治十八年六月起工し、明治二十三年四月竣功せり、水路幹源は近江國大津三保崎湖岸より京都市鴨川東岸に至る延長六千七百七間、入費百十九萬餘圓、人夫を使役すると四百萬にて埃功せり、京都電燈會社、京都電氣鐵道會社、其他水力を利用する製造會社日を追ふて増加するはこれか爲めなり、京都市無盡の富源は琵琶湖畔より滾々として流れ出づといふも可ならん、墜道、洞門、閘門、堰門、鐵軌、山上に舟を上下するの奇觀、親しく就て之を見る可し、

京都の官私衙 京都府廳は下立賣新町西入所に在り、地方裁判所は九太町富小路西入、區裁判所は竹屋町富小路西入、主殿寮出張所、皇宮警察署は御苑内に在り、其他の警察署は上長者町、中立賣河原町、松原、五條、堀川の六署にして、郵便電信局は三條東洞院に本局あり、今出川、五條に支局あり、京都監獄は二條離宮の北西に、京都市役所、上京區役所、下京區役所等あり、

京都の學校 吉田村に京都帝國大學あり、東京に次ぐの帝國大學にして、教師生徒追々に俊秀の府となりつゝあり、第三高等學校亦同所に在り、其他京都府尋常師範學校、寺町通廣小路南入、京都美術工藝學校、九太町通鉄屋町、京都府高等女學校、中町通九太町、京都府醫學校本派本願寺、大學林、同文學寮、大谷派本願寺、同中學寮、同志社大學等頗る多し、

京都の病院 府立療病院、河原町荒神口北入、東山醫院、祇園神幸道同志社病院、其他にて癲狂院に京都癲狂院、精神病院、岩倉癲狂院など割合に多きも意味あり氣なり、呵々、

京都の銀行會社 東洞院の日本銀行出張所をはじめとして十三銀行三十餘會社あり、會社は工藝會社最も多しとす、

歴史上の人物 京都に關係せし歴史上の人物、之を擧げんとすれば、我王朝時代以下明治維新に至るまでの人物を悉く擧げざるべからず、さなきだに各所舊跡の多き京都は名勝案内の幾十頁を費やしたり、更に歴史上の人物を擧げ、一々之に就て多少の云々を爲すとせんか、名勝案内の全部を盡すも猶ほ足らざるものあらんよりてこゝに其主なるもの、氏名のみを擧げて、以て遊覽者懐古の槩となさんとす、先づ桓武天皇、奠都の當時にありては、英雄天皇は神聖なる九五の位に在ます、故に之を人物として數へず、和氣清麿、阪上田村麿、藤原冬嗣、清原夏野、傳教大師、弘法大師、巨勢金岡、藤原時平、菅原道實、三善清行、小野篁、紀貫之、紫式部、清少納言、藤原道長、藤原隆家、源滿仲、源賴光、平清盛、平重盛、源爲朝、源義平、源義仲、源義經、法然上人、親鸞上人、藤原信西、藤原賴業、鴨長明、釋西行、藤原俊基、足利尊氏、北畠親房、楠正成、細川頼之、足利義滿、一休禪師、蓮如上人、吉田兼好、立入宗繼、兆殿司、古法眼、織田信長、松永久秀、藤川藤孝、明智光秀、豊臣秀吉、狩野永徳、千利休、松永貞徳、出雲阿國、小野阿通、伊藤仁齋、加茂真淵、與謝兼村、圓山應舉、中山愛親、頼山陽、池大雅、香川景樹、梁川星巖以下王政維新前の英雄豪傑に至りては、眞に勝けて數ふべからざる者あり、其誕生地は京都にあらざるも、雲蒸龍變の地は則ち京都なり、

京都の詩歌 明媚なる風光、高雅なる山水、自然の公園、天與の樂土たる平安城が詩歌に於て大なる産物あるは、決して西陣の綾錦に譲らざるなり、こゝには其一斑を載するのみ、

豊王舊宅

菽生 徂徠

絶海樓船宸大明、寧知此地長柴荆、千山風雨時時急、只作當年叱咤聲、

桃山懷古

岩垣 松苗

丹樓昔日麗如霞、今見山桃萬樹花、追憶豊公功業大、黄金爲瓦亦非奢、

東遊六首節二

頼山 陽

百揆簪纓尙駿奔、觀光足識尊王尊、雲餘五色紫宸殿、日上三竿朱雀門、寶器由來存鄭廓、土田不必問溫原、西方赤縣如傳舍、孰若天誕眷萬孫、

五十三亭控海東、故關右折路岐通、湖南草樹春雲碧、幾内峰巒夕日紅、流峙依然此形勝、興亡已關幾英雄、分明攻守千年勢、著論誰追賈誼風、

銀閣

大樹肅蕭秋帶風、無如猿犬各稱雄、獨有玲瓏數拳石、從君建置小園中、

登東山望皇城

藤井 竹外

朱雀青龍稱四神、瑞雲遙認是楓宸、太平有象無人頌、只詠名山與美人、

東山

花外人家皆賣酒、入花又見幾樓臺、若教到處輒傾去、一日定過三百杯、

嵐山花下有感

爭放管絃訪詩家、落花風裏惜春深、碧潭曾葬如花女、一盞無人酌水心、

鴨河雜詩八首

大槻 磐溪

已尋山水過南越、又轉萍蹤滯帝州、昨接老濡今命妓、世間無此汗漫遊、夕陽紅歇納涼塢、未見紅裙來倩鶻、橋北橋南樓一面、翠簾十里盡釵光、澗面水風秋六月、燭天燈火盡三更、長橋百尺跨空起、聽依奔處是履聲、烟靄前灣樓影勻、無多燈火已宵分、孤懷一段俯然處、隔水遙筍細細聲、冷炎殘杯燭影青、思詩人在愛江亭、半彎落月山初黑、空水明涵四五星、肉絲聲闕思悽迷、惡字欄頭月已西、殘夜鴨川明一道、依稀三十六峰低、水鳴樓脚不停聲、醉枕殘宵夢自清、起到前欄天始曙、掬他寒玉洗餘醒、一掬幽慵說向誰、東山雖好已離卮、樓前只覺双眉重、烟雨樓中烟雨時、

鴨東

橋本 蓉塘

滿麗酒影綠鱗鱗。雷出樓臺駘蕩春。新漲無非臙脂水。長堤渾是綺羅塵。杏花紅塵當礙女。柳色青隨渡水人。彩筆弄來粧富貴。休言吾輩爲詩貧。

○

ちはやふる祇の園なる姫小松よろつ世ふべきはじめなりけり 兼直
 さりととも稻荷の山の瀧の水かへりてすまん世をいのるかな 宗良
 すは原やふしみのくれに見わたせは霞にまかふをはつせの山 西行
 いはねこそ清たき川のはやければ波れりかゝるきしのやまふ 西行
 き 國信
 くれて行くはるのみなとはしらねとも霞にれつる宇治の柴舟 寂蓮
 まこもかるよとのさはれふかけれと底まで月の影はすみけり 匡房
 神なひのみむろの山のくすかつらうらふさかへすあきはきに 家持
 けり 家持
 あきかせのよもにふさくる音羽山なにのくさきかのとけかる 好忠
 へき 好忠
 なくかりのねをのみそさく小倉山きり立はるゝときしなけれ

は 深養父
 ちりかゝる紅葉なかれぬ大井川いつれるせきの水のしからみ 經信
 高瀬船しふくはかりにもみし葉のなかれてきたる大井川かな 家經
 尋ねきてみちわけかふる人もあらしいくへもつもれ庭の白雪 寂然
 今はさはうき世のさかの野へをこそつゆ消はてし後のしのは 俊成女
 め 俊成女
 うきよには今はあらしの山風にこれやなれゆくはしめなるら 俊成
 ん 俊成
 まくらとて何れのくさにちさるらんゆくを限りの野邊のゆふ 俊成
 くれ 俊成
 さかの山千代のふる道あとゝめてまたつゆわくる望月の駒 長明
 今こそあれ我もむかしは男山さかゆく時もありこし物を 讀人不知
 白雪の八重ふりしけるかへる山かへるくもあいにけるかな 棟梁
 大原やをしほの山もけふこそは神代のともおもひ出らぬ 業平
 清瀧のはじのしら糸くりためて山分ころもありてきましを 法師

わたらしな蟬の小川の淺くともおいのなみそふかけそはづかし

いにしへの花のかけさへみゆるかな車やとりの春の夜の月
大井川かへらぬ水にかけ見えて今年もさける山さくらかな

○

見る人は橋氏のことくかな

時宗寺のしくれの亭や雨やとり

風風もいてよのとけきとりのとし

大原や酒呑みならぬ花の下

橋姫の燈明なれやとぶほたる

はらふなよ扇の芝に飛蓋

男山へ誰か媒人そ女郎花

もゝしきは大宮人のさかな哉

西風や何ろ自力の扇つれ

年玉に梅折る小野の翁かな

丈山

景樹

貞徳

全

全

重頼

全

徳之

全

宗因

言水

黄鳥に感ある竹の林かな

櫻かりきとくや日々に五里六里

花の山二丁のほれは大悲閣

我衣に伏見の桃のしつくせよ

千鳥立つ加茂川越えて鉢叩

片腕は都にのこす紅葉哉

萬日の人のちりはや遅櫻

此秋暮文覺我を殺せかし

春駒や都の町の小松原

松明や鶴の林の夕烟

松明もいかに嵐の山近し

淀舟の上るか引くかちほろ月

入口のあちらになひく柳か那

六條に汐も焼くかと臘月

鶏も待たて引出しけり函谷鉾

芭蕉

全

全

其角

全

全

全

柳飛

方山

野明

古根

一茶

既白

雲鞍

大文字や一筆山を染はしめ
 蝶 夢
 西東いづれ嵯峨野の虫あはせ
 東 湖
 我子にて候へあれもほこの兒
 大江 丸
 簀入や今年目につく金閣寺
 全
 白梅や北野の茶屋に角力取
 蕪 村
 女俱して内裏拜まんねほろ月
 全
 夜桃林を出て、あかつき嵯峨の櫻人
 全
 苗代や鞍馬の櫻ちりにけり
 全
 ほと、さす平安城を筋違に
 全
 丈山の口かすきたり夕す、み
 全
 花火せよ淀の御茶屋の夕月夜
 全
 名月や神泉苑の魚躍る
 全

京都の名所舊跡あまねく探り終り、さて其次に見物すべきは、奈良なり、七代の王都
 千年の舊跡實にも日本の希臘なるかな、京都より到らんには、七條停車場より乗車
 して所謂奈良鐵道なるものに依り、伏見、桃山、宇治、玉水、木津等を経て至るを最も便

利なりとす、さりながら著者が名勝要覽の趣旨は大阪を中心として而して他の畿
 内の名勝をも探るの便を與へんとするものなれば、一たび先づ大阪に立歸り、而し
 て關西鐵道に依り、奈良に至るの案内を爲さるべからず

大阪より奈良に趣くには、關西鐵道の終點たる湊町停車場より關西鐵道に乗り込
 まざるべからず、それより今宮停車場あり、次に博覽會臨時停車場あり、博覽會の見
 物を終りて、直ちに奈良に赴かんとする者の如きは、此停車場より乗り込むを最も
 便利なりとす、次は平野停車場にして其附近の名所舊跡は大阪の條にて紹介し置
 けり、次は八尾停車場にして、是より河内國なり、

八尾 平野の次の停車場にして河内國の中央に位す、楠氏八臣の一人八尾別當
 入道顯幸は此地より出てたり、

大聖勝軍寺 八尾停車場の西南六丁に在り、往昔聖德太子此地にて物部守屋と
 戦ふ、太子の軍危き時路傍の棕樹忽然幹を開きて太子の姿を匿したりと傳ふ、今に
 境内太子堂の前に大なる棕樹の繁茂せるあり、神樹と稱す、樹下に太子馬蹄石あり
 太子の鎧其他古器珍寶を藏す、

柏原 河内國の東南端大和川の北岸に在り、八尾の次の停車場なり、

王寺 柏原の次の停車場にして、大和郡北葛城郡に在り、こゝより關西鐵道の分岐線あり南和鐵道、紀和鐵道に接す、吉野山一覽の人はこれより乗り替へざるべからず、後章吉野の條にて詳記すべし。

龍田 有名なる紅葉の名所にて王子驛より下車二十丁行けば到り得べし、文武天皇の御歌に入りしより此地の紅葉は天下無雙なるが如く、艶稱せらる、今も老楓の残れるあり、

龍田神社 王子驛より東南十八丁、官幣大社祭神天御柱命、崇峻天皇御宇の草創なり、境内一万二千坪、

信貴山觀喜院 王子驛の西北三十三町に信貴山あり、此寺は其山頂に在り、聖徳太子の草創にして太子の古蹟多し、

片岡山 聖徳太子の乞食を見玉ひし地、其乞食は達摩太師なりてふ傳ある古蹟なり、山麓に達摩寺あり、

松永久秀墓 足利末葉の島雄松永久秀の居城は信貴山にして、其亡滅せし所亦彼地なるが故に、松永久秀の墓は片岡山達摩寺の境内に存せり、

法隆寺 王子驛の次の停車場を法隆寺驛といふ、法隆寺村に在り、停車場より下

車して北十三町に、南都七大寺の一にして最も名高き法隆寺あり、舊名を斑鳩寺と稱し、人皇三十三代用明天皇の敎願なりとて、推古天皇より旨あり、聖徳太子建立し玉ひし名寺なり、本尊藥師如來光背に其事を銘刻せり、伽藍の結構配置は金堂五重の塔を以て主眼に、大講堂を、後頂に鐘樓鼓樓を耳に、中樓門を鼻孔に、南大門を口にして、周圍に廻廊を遶らし、恰かも人面を形成するを以て世に佛面伽藍といふ、其規模を印度に資り、匠を百濟に徵せしと云ふ、壯嚴の精輪奐の美、共に本邦古美術の淵源なり、歐米人の我國觀光者、一千三百年の久しき木造の建造物にして、美觀の完さも、の世界第一と贊嘆す、我國歴朝勅願寺中第一の古刹也、

郡山 法隆寺驛の次の停車場なり、柳澤氏の古城下なり、城趾は町の北端に在り、花時は櫻雲霞舞たり、

藥師寺 停車場の東北十八丁に在り、南都七大寺の一なり、天武天皇の勅願所なり、孝謙天皇の本寺を以て行在所とせられしことありしを以て西の京の名あり、本尊聖觀音は閻浮檀金なり、六層の寶塔は天平二年建立のもの依然として今日に存せり、

唐招提寺 藥師寺の北五丁にあり、南都七大寺の一なり、天平勝寶八年唐僧鑑真

和尚の草創以來毫も舊形を變せざる古刹なり、金堂の丈六釋迦佛(唐僧如實作乾漆造なり)の後光の中に千體の佛像を鑄めたるは天下の奇觀、其他講堂、食堂、五層塔、羅索堂、御影堂、阿彌陀堂等、古代建立の妙を見るべきなり、

西大寺 奈良の東大寺に對する巨刹にして、南都七大寺の一なり、郡山停車場の東北四十町伏見村大字西大寺村に在り、天平神護元年僧常勝の開基なり、本堂、多寶塔、愛染堂、觀音堂、僧坊等みな宏大の建築なり、本尊は丈六の觀音像にして、その四天王像は鑄造の砌、稱徳天皇親ら玉手を以て其功を助け給ひし靈像なる由、今なほ保存せり、

郡山停車場の次は奈良停車場なり

○奈良

南朝四百八十寺、多少樓臺烟雨中、とは小杜の金句、移して我國の奈良の都に配すべきにあらざれども、元明天皇以來七朝の帝都、殊に佛法興隆の聖武天皇の御代を中に含み居ることなれば、佛閣の巍然として天に聳えし平城の都の常年を忍ばしめ、人口三萬二千人の一縣の都會も、亦た都の如き心地すめり、況んや美術は佛法興隆と共に大發達を爲し、所謂奈良朝文學なるものも亦た此間に起りしに於てをや、嗚

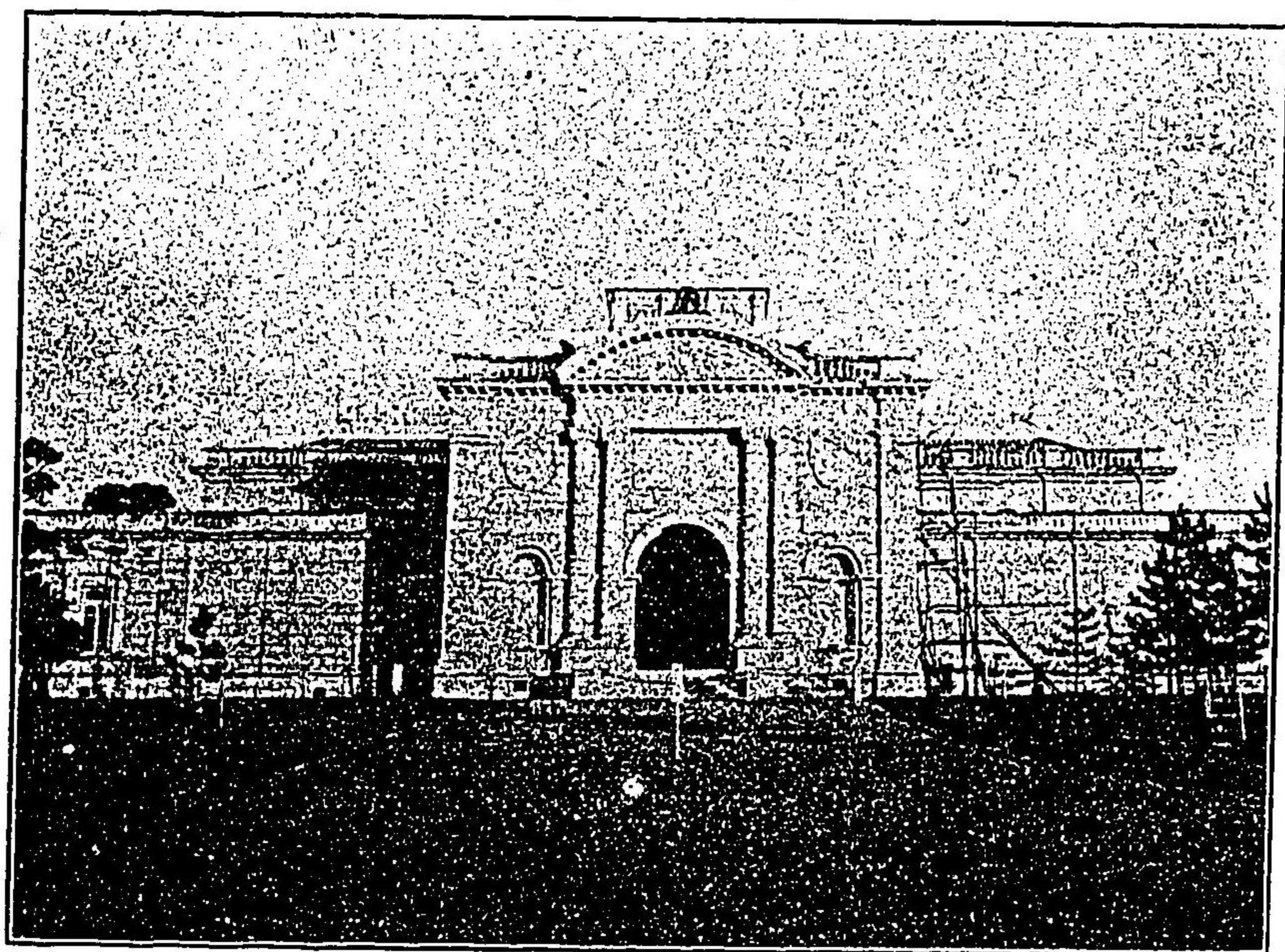
呼奈良は歴史の地なり、宗教の地なり、文學の地なり、美術の地なり、南都の名豈徒爾に附すべけんや、我國の黄金時代ともいふべき元明元正兩天皇の御宇は實に此都にてありしなり、遣唐使の盛に派遣せられしも實に此都にてありしなり、藤原廣嗣の亂も、惠美押勝の亂も、道鏡黨と藤原黨との政事も實に此都に於ての出來事なり、南都の名豈徒爾に附すべけんや、

東大寺 奈良といへば先づ大佛といはざるべからず、大佛といへば先づ東大寺といはざるべからず、名古屋方面より來る客は必ず奈良停車場の次の驛なる大佛停車場より下車して此に來るなり、其間少かに八丁、奈良停車場より下車するよりも便利なればなり、南都七大寺の隨一にして神龜五年聖武天皇の勅願に依り、良辨僧正の草創なり、三論華嚴二宗兼學にして、日本六十六ヶ國中の國分寺の總本寺、當時政教一致制度の首府たりしこと、今より思へば夢の如き心地すなる、本堂は即ち大佛殿なり、

大佛殿 東大寺の金堂(本堂)にして、千年の歴史を語るものは是れなり、殿舎の高十五丈六尺、東西二十九丈、南北十七丈、廻廊の東西凡そ四十六丈余、南北三十六丈余、其建築の偉大先づ人目を驚かす、本尊は毗盧舍那佛の座像にして、總長ヶ五丈三尺

五寸、面長一丈六尺、幅九尺五寸、鼻孔の徑三尺、拇指の長四尺八寸、廻り四尺二寸、中指長五尺八寸、足の裏直徑一丈二尺、螺髮の數九百六十六個、其他之に副ふ所謂奈良の大佛にして、天正十五年聖武天皇行基僧正に勅して鑄造せしめ給ひしものなり、當時鑄造の原料は熟銅七十三萬九千五百六十斤、鍊金一萬四百四十六兩、水銀五萬八千六百二十兩、白蠟一萬千六百七十七斤、炭一萬六千三百五十六斛を要せしといふ、この像鑄造以來屢破損し會て其頭自ら墜落せしこともあり、治承四年平重衡、父清盛の命を承け南都の僧都が頼政に加擔せしを懲戒の爲め東大寺を燒打せしとき、その兵火の爲めに伽藍灰燼となり佛頭熔解せしが、頼朝天下を治むるに及び所謂南都東大寺建立なる役を起し伽藍を建て佛頭を補ふ、それより三百七十餘年にして永祿十年十月十日松永久秀の兵火に依り殿舎再び烏有に歸し佛頭亦た燒落ちたり、永祿十二年山田道安なるもの自ら淨財を抛ちて之を補す、今の大佛は即ち是なりされど殿舎なくして露佛なりしに、凡そ百三十年餘、元祿年間に至り東大寺の僧公慶上人、之を再興して今日までに及べり、佛藏の周圍に什寶を陳列す、奇品擧げて數ふべからず、殿舎の前に八角寶珠形の金燈籠あり、高一丈三尺、四面に佛像他の四面に獸形を刻す、宋の陳和卿が鑄造せしものなりと傳ふ。

奈良大佛



奈良博物館

正倉院 東大寺の北二丁の所に在り、昔時は東大寺の寶藏なりしが、今は宮内省の所轄に屬し、有名なる蘭奢侍の名香、鴨毛の屏風、其他古器珍寶多く包藏せらる。古來數度の兵燹に免ぬかれ、一千百有餘年の久しきを経て、今日に存せるなり。

南大門 東大寺の南門にして、大佛殿の南方に在り、東西十四間餘、南北五間餘、高三十三間餘あり、世に之を古門と稱す。天平年間の建造、今に存するなり。仁王の木像は、湛慶運慶の作なり、又高麗狗あり。建久七年、後鳥羽天皇詔して、作らしめ給ふといふ。佐保路門 正倉院の西二丁に在り、轉害門又は景清門といふ。東大寺西方の總門なり。天平年間南大門建立の殘木を以て造營せしものといふ。賴朝が大佛殿落成式に臨場せし時、惡七兵衛景清賴朝を刺さんとして、役夫の中に交り、此門にて發見されしといふ。

般若寺 般若寺町に在り、舒明天皇の勅を奉じて、慧烙法師般若臺を創立し、聖武天皇其伽藍を御建立あり、親から紺紙金泥の大般若經を書かせ給ひて、地底に納め、其上に十三重の石塔婆、高五丈を建て給ひしより、寺號とせり。律宗、本尊は文殊菩薩なり。大塔宮護良親王經卷の中に、身を忍ばして危難を逃れ給ひしといふ。大般若經の唐櫃、今に存せり。